

503

117



始



(2111-38)

503-117



安達憲忠著
貧か富か

東京 宣傳社 發行



序

貧富の懸隔を出來得るだけ少くして、兩者各其の所を得させるといふのが、社會政策の眼目である。けれども政策の實施に先つて必要なことは、貧者が何せ富者になれないのか、又富者が何せ貧乏になるのであるかに就き、篤と研究することである。唯漫然と貧富の外形だけを觀て、直ちに社會政策を行ふことは、考へものだと思ふ。

安達君は三十年の久しきに亘り、貧民救濟の職務に従事した人である。而して此の間、君は貧民の心理に就て深く研究し、今や其の結果を一書と爲し、世に公にせらるゝに至つた。貧民の心理は、矢張り人間の心理であつて、遺傳環境の力に依つて、其の實生活に如何の影響を蒙つて居るかを知らぬことは、お互に取つても非常に参考になる

ことである。随つて子女を誨へ、社會を導く上に於て、本書が興ふる暗示は、甚だ鮮なからざることゝ信じ、一には君が多年獻身の勞苦を多とし、又一には斯の如き好著を、公にせらるゝに至つた君の志を推獎せざるを得ない。序を需めらるゝまゝ一言を記して責を塞ぐものである。

大正十一年七月一日

床次竹二郎

貧か富か 目次

緒言 一—二

第一編 貧の真相と富の暗示 三—九四

第一章 貧中の例外人物 三—一二

吉良上野介を賞讃する美髯翁——翁の怪氣焰——翁を訪ふ——前身は
藤堂侯の槍術師範——一奇話の發見——馬糞拾の寒山——日本天台の
三隱——奇人臥龍——貧乏人の金持——金持の貧乏人——此の研究は
經濟上の貧富が對象

第二章 社會のドン底 一三—四二

一 田舎から都會へ 一三

驚くべき人口集中——鐵道の四通八達と求人廣告——成功者と失敗者

二 都會の表面と裏面……………一六

聲名を博した人物——悪魔の陥穽——地方人の都會見物——裏面の都會——貧民研究の必要

三 是でも亦住宅か……………二二

貧民窟の移動——東京と大阪の貧民——割合に高い家賃——生活狀態——豚小屋にも劣る——住宅建築の要件——都會家屋の缺點——貧乏助成の構造

四 了簡違の集團……………二八

貧民窟の不潔——無名井戸端會議——極端な兒童の輕視——英連女房——米代に供される兒女——狩野一信の羅漢——人身賣買——妾業——假夫を作る女——妻子を捨てる男——東京府下の棄兒數——迷兒と浮浪兒——子を養育せずして賣つた女——非社會的社會の代表者高利

貸——聖代の冤物——可憐高利七百三十割——將來の計なき貧民心理

——高い掛費——高利の色々

第三章 零落者基調の一致……………四二—六〇

一 富家に生れた好色家の末路……………四二

花時に突然の退院——櫻樹に縊死——子に遺す傳記——光源氏が世之助か——好色の色々——樂み盡きて

二 放蕩家の屈指豪商の果……………四五

花見時の年中行事——拔群の容貌——全盛遊び——裏店住居——八年の長い夢

三 轉職で行詰つた元農業技師……………四八

駒場農學校を卒業——十一回の轉職——終に高利貸——一家離散——行倒れ

四 道樂者になつた名家の令嬢……………四九

父は七浦の宰領——遊藝が企てよも好き——浪花節に没る——座敷
牢——大風雨に出牢——出奔——浪花節語り——父なし子——子の行
衛は知れず——廻る因果の車

五 浮浪者になつた資産家の一人娘……………五一

蝶よ花よで育てらる——我儘——情夫と隨徳寺——茶屋女——身受け
——離縁——酌婦——梅毒——失明——按摩——電車に轢かれる——
人事不省——救助

六 判事の身で入獄した浪費者……………五四

判事奉職——驕奢——官金費消——懲役——訴訟鑑定——再び榮華の
夢——委托金費消——再入獄——窃盜術研究——幾度か入獄——行倒
れ

七 官吏から悲境に陥つた大酒家……………五五

中卒卒業——煙草専賣局官吏——對酌三升——貧乏と病氣——退職の

悲境

八 射倅で失敗した元某商社頭取……………五六

擴商社の頭取——米相場——銅山で失敗——眞面目な事は馬鹿々々し
くなる——暗涙

九 我儘勝手に終始した法律家の落魄……………五七

資産家の生れ——伶俐な男——英漢の書に通じ法律を修む——法律顧問
と法律教師——行爲は法律の許す範圍——堂々たる住宅で無貨——
落魄——兄弟義絶——人の厄介——遺骨中有に迷ふ

第四章 不可解心理の發露……………六〇—八一

一 呆れた某女の了簡違……………六〇
恐ろしい了簡違——潜在觀念——放火——無我觀の活用——不可解の
心理
二 河口某の乞食根性……………七〇

十年來の乞食……教誨師の訓誡……乞食は氣樂……木賃宿……小博奕

三 甲太郎の泥棒根性……七三

改過の保證付——蝦口の行衛——毎夜の快飲——セメント樽のトンネル——我儘の増長——監獄に十一回——車の曳逃げが専門——盗んだ車を飲む——署長の當惑——色氣は毛ほどもない

第五章 認めれた曙光の強弱……八一—九四

一 一門衛の更生環境を善化する……八一

青年修養團——一門衛萩原君の更生——不言實行環境を化す——一破起つて萬波動く

二 紙屑買の卓見著者へコマさる……八五

職業に貴賤はない——不用物は不潔——必要物は清潔——職業的觀念

三 乞食の親分十五人の良國民を作る……八九

ハンキ屋親方——彼も人の子——徹底的の訓誡——十五名の幸福の授

け主——襤褸の中から光明

第二編 貧の主因と富の主因……九五—一二六

第一章 利己心から逆境へ……九五—一二四

一 心理的原因が七割……九五

貧窮原因探究の要——貧の種類——内的原因と外的原因……自招的原因が大部分——心理的方面の閉却——本末主従の關係

二 利己主義が貧の母……九九

貧乏根性と泥棒根性——世人の錯誤——モロ—僧正の卓見——貧原の種々相——精神が主因で他は副因

三 共同貧乏法……一〇七

利己主義の一因——利を得るに他の迷惑を問ふな——米國の小賣商人——利己的結束——却て共同貧乏法

四 貧窮と犯罪.....一三三

五十歩百歩——東京市養育院と巢鴨監獄——大通と曲り道——自己妄
信——利己の勇者——怜悯なる犯罪者——大盜の五徳——精神的貧者
と犯罪人——精神的富者

五 貧の主因と副因.....一二一

三十年の實驗——物價騰貴と貧民の増減——富的貧民と貧的長者——
統計の示す貧因——皮相の見——罪を他に嫁する心理——幼兒と柱——
——非を改むる能はず——偽れる告白——前提既に誤れり——ブリス大
將の所見——良醫の如くに

第二章 不合理なる利己説.....一三四—一五六

一 利己主義の學説と事實.....一三四
利己と其の結果——利己主義の實行者——個人主義と利己主義——利
己主義者の標語

三 利己説の三主唱者.....一三八

古代の利己説——エビクローヌ——小我のみを認める偏見——楊朱の
利己的快樂説——チャールルウカの享樂主義——神の否認——極端なる
階級制度——波羅門と順世學派——順世學派の歌

三 利己説の批判.....一四七

三學説の共通點——一時的の説——不合理甚し——回教徒の印度侵入
——歐米の物質主義と支那——支那の現状——朝鮮の王城

第三章 自他の福利共進法.....一五六—一七八

一 同昌共榮の理法.....一五六
自他の二利圓滿——社會共存の定義——商工業の秘訣は利他——天理
夫則
二 利己心と共同生活.....一五九
公益は即私益——公德心の缺乏——養育院の下水——内外の掃除——

下水研究——地先下水——毒物吸入器

三 公德心の涵養……………一六七

毒物吸入器取除の緊急問題——公共觀念の養成——岡山市の下水——
獨西葡三國の街路樹——荒川の八重櫻——鳳凰堂の壁畫——朝鮮の植
樹——青島の植林——支那人と公德——公共觀念の發動に俟つ

第四章 貧富自在の安樂境に……………一七八—二〇三

一 利己主義と自我……………一七八

利己説の由来——本能満足——自然主義——自我實現説——シヨツペ
ンハウエルの語——人生常なし——無價値の我——根本的誤想

二 大我と小我……………一八七

未生の前は如何——天地萬物皆我——悠久無限——精神と肉體——同
體の理と相愛——不變の定規

三 人道の原則……………一九一

小我の活動と制裁——真我の活動に制裁なし——自他の心は共通——

大我の世界は安樂境——靈の人、不靈の人——光明界と闇黒界——本體
是れ神佛——至誠是れ人道

四 正道と近道……………一九七

羽前の姥母湯見物——咫尺も分かの密林——十餘丈の岸壁——宮本武
藏の故智——帯を繋ぎ合せて懸崖を攀づ——五人の命拾ひ——道なき
道を近道と見るの過——大我に一致の大道

第五章 尾崎行雄氏の裏書……………二〇四—二二六

一 西郷南洲に對する疑問と其の氷解……………二〇四

市長として養育院視察——南洲の徳望と事業——養育院收容者の共通
的特質——南洲の面目髣髴——南洲の南洲たる所以——同情と人望——
偉人と仁心

二 人生の浮沈と友愛主義……………二二一

養育院に富豪の娘——昔は高等官、今は收容者——自分本位の人——情ける者は養育院行き

第三編 貧の副因と富の副因……………二二七—三四四

第一章 勤惰と苦樂の關係……………二二七—二四三

一 怠惰と勤勉……………二二七

勤勉は富への道——怠惰は貧への道——個人的怠惰と社會的怠惰——或る建具屋の話——某陶器會社員の話——自由勞働者の常習

二 人世と業務……………二二二

怠惰の三原因——人の字の解釋——利己心の強弱が標準——苦樂顛倒の謬見——隱居の惡習——活動と幸福——怠惰と病弱——舊幕臣の零落——瓜生岩子刀白の名言——某工事監督の談——英國民に學べ

三 職業的觀念……………二二二

業務の觀念と趣味——船津技師の業務觀——誠意熱心——興味と發見

——大學の文——愛惜と嫌忌の情——修養的觀念

四 時間徒費の風習……………二三八

時間の掛直と彼我の遅刻——井戸端會議と椽先話——無法に怠り矢鱈に働く——社會奉仕は自家の幸福保存の妙計

第二章 權道と常道……………二四四—二五五

一 投機と賭博……………二四四

投機と賭博——投機の機能——素人筋の投機は賭博と同様——投機の利害と運用者の如何

二 射倅即貧道……………二四九

射倅と利己心——正當業務と投機・賭博——一攫萬金にあらざれば一擲萬金——人心の弱點と誘惑機關——結局貧道に

三 危道に近づく勿れ……………二五二

好奇的心理——園基の経験——君子は危きに近づかず——射倅に因る
失敗者數——都會の統計と田舎の統計——要は自覺に俟つの外なし

第三章 事業成敗の分岐點……………二五五—二八二

一 成敗の遠因と近因……………二五五

大多數は自招的原因——商機——成敗の分岐點——業務の變轉も亦一
因——勦先の變更——精神的錯誤——泡沫の山——職業的基礎觀念——
富士登山の譬

二 利を求めて損を招く……………二六三

歐洲大戰と我が商業者——志田博士の指摘——可驚粗製濫造——奇怪な
一齣——策士久七の失敗——依然たる背德行爲——歐米商人の忠實

三 商業道德の頹廢……………二七四

虚言學校——安井息軒の痛罵——石田梅巖の高唱——商人の詐偽的習
慣——外人の驚異——損害は需要者が負擔——買占・占賣——商業の反

逆者——暴利取締令——個人の貧困、國家の損害

第四章 浮華から質實へ……………二八二—三〇二

一 必要以外の貨財消費……………二八二

虚榮——奢侈——贅澤——放蕩——浪費——陋劣な心理作用——貴婦
人風の萬引——虚榮は女子の方が男子の數倍——入るを量りて出づる
を制す——富豪にも虚榮奢侈あり——享樂的機關

二 粗衣粗食の田尻子爵……………二八九

破れたるレインコート——三十年前流行したモーニング——修養園大
會の會長席——羊羹色で金釦の詰襟服——小作人の風態——山海の珍
味に優る教訓——北條時頼の回顧

三 家庭交際上の惡習と浪費……………二九二

浪費の風俗習慣——來訪者の變態——其の由来二ツ——國內一部の不
作と封建の餘習——東京は全國風俗の持寄場——年頭狀に告白——山

西翁の薄葬論

四 實業界の弊風と浪費

無意味・不始末の交際——商談は待合・料理屋——不真面目千萬——不正事件と賣笑婦——失敗の素因——業務の神聖——社會退歩の一大原因

第五章 上戸と下戸

一 飲酒の通害

酒は貧困の母——罪惡の保母——狂ひ水——時間の空費——節酒は禁酒に如かず——酒代を貯蓄せば——食糧四百萬石の犠牲——野卑なる無禮講

二 醫家の酒害説

大澤博士の講話——片山博士の禁酒論——佐伯博士の一説——同批評

三 禁酒運動

岡山縣の防貧事業——未成年の禁酒法——米國アルコール戰——某老

師の痛歎——片山博士の年始狀

第六章 心の持方と健否

一 精神と肉體との關係

心身二面の病因——精神作用と肉體の變化——御大葬を拜せる感想——感動から来る胃病——石上病院長の養生法——人體天與のオプソン——治病と精神修養

二 心理作用と生理的變化の著例

大戦と腰曲り病——感動死——人魂を見たと言ふ大工——悦び死——瑜伽の眠——波羅門ハリダース

三 利己心より煩悶病苦へ

心理治療——精神状態と抗毒素増減——精神の持方一つ——處世の錯誤——自己を反省せよ——不自然の享樂——自業自得——社會的活動家と健康

結論

三四五—三八〇

一 理論と事實……………三四五

隠者の人物の解釋——重荷の小附を卸す——二ツの潮流——第一編の
概括——辯明を要する點——貧民は一種の聖者か

二 運命と努力……………三五三

貧者は運命信者——貧者と富者の運命觀の相違——大隈侯の人壽說——
昔は運命の領域、今は努力の範圍——努力の天運變改

三 利他と富者……………三六二

富者より得たる原因も亦貧者のと一致——富者の研究——明治の十二
傑——古河市兵衛氏の批評——汚穢より無邊際まで突進——要は眞の
利己——貧因解説の妙法——富原招來の秘訣——終りに一言す

貧か富か 目次終

貧か富か

安達憲忠著



緒言

貧原富因に關する三十年に亘る私の研究は、先づ貧民に接觸して、其の通有性
を知り得なるに始まり、貧民の狀態調査に中ばし、更に之を富者の通有性に及ぼ
して、其の實質の表裏に照し、之を複雑なる社會狀態に徴して、疑團の氷解に勉め
更に之を古今の學說に質し、之を自己の信念に確かめ、以て一點の疑念なきに至
つたのである。今研鑽の結果を稍組織的に記して、之を讀者の前に披瀝するに
當り、私が最初に着手したる順序を逐うて、先づ第一編に於て、數千人中より若干

の實例を抜き來り、貧民状態の特異の點を相並べて掲載することにした。讀者が之を讀過するに際しては、貧民の特異なる點を、此の境涯に至れる因由に如何なる事實を含蓄するかを考慮せんことを請ふのである。次に第二編は私の所論の骨子をも稱すべき部分で、貧富の眞原因の探究並に之が對策を説き、又第三編には世人の所謂貧富原因なるものを拉し來り、私は却て之が副貳的のものであることの認定の下に、此の副因が主因と相依り相結びて貧富を實現する所以を述べ、以て防貧致富の方法に論及する積りである。讀者が本書を讀了し、更に其の日々接觸する實社會の實驗に参照せば、私の所論に共鳴して、其の獨斷妄言ならざるを認むるに共に、或眞理の存在を發見し得らるゝであらう。

第一編 貧の真相と富の暗示

第一章 貧中の例外人物

私が吉良上野介の菩提寺として名高い東京牛込の萬昌院に下宿して居たころがある。明治十七年の春の某日、机に倚つて書を讀んで居るに、本堂の裏に在る吉良の墓邊で、突如として大聲で演説をする者がある。曰く、「君は實に我國の恩人である。人は君を稱して奸物とし、佞人として居る。余は君が奸であつたか佞であつたか否かは知らぬ。又そんなことは知るの必要がない。人は奸と云ひ佞と稱するも、眞に國家に功勞さへあればよい。裨益する所があれば十分だ。嗚呼君も亦君子人である、大菩薩である。君、俗評を意に介してはならぬ。百世の下、君の知己は此處にある。君願はくは安んぜよ」。障子の破間から之

を窺ひ見るに、年の頃六十有餘で、白髪的美髯胸を覆ひ、身に襦袢の半衣を着し、股引草鞋を穿つた老翁が、吉良の墓前に向つて述べて居たのである。私は其の言の奇なるに驚き、歸路の先廻りをして本堂の表に走り出で見るに、堂前に羅字屋の荷物がある。其の装置が頗る奇で、二個の書函を以て之を作り、一方には「命長則耻多」を書し、一方には「磔川反古齋」を記して居る。其の筆致亦非凡で、活氣躍如たるものがある。奇言の對照、一見して美髯翁のものたるこゝが明かである。須臾にして老翁歸り來り、其の荷物を擔ひ去らうとした。私が聲を掛けて語らうとするに、彼は「羅字のすけ替であるか」と問ひ返した。「いや、少し君と話したいと思ふので」といへば、「君は書生であらう、己れは今時の書生なご、語る暇はない」と言捨て、サツ／＼と行かうとする。強いて引止め、「僕は君が今吉良の墓前で語つたのを聞き、其の説の奇なるに驚いたのであるが、吉良を國家の恩人として爲し忠臣とする理由を今少し詳細に聞きたいものであるが」と乞ふたら、翁は應へて、「君も矢張馬鹿書生たるを免かれない。君には合點が行かぬか。抑々徳

5
川の中世以降、世は泰平に馴れ、世襲の武士は士道を忘却し、利祿を貪り、殆ど忠孝の何物なるかを知らず、商工は唯己を利するこゝのみを是れ事とし、道義地を拂ひ、風俗は奢侈淫蕩を極め、賄賂公行、農民は其の誅求に堪へず、將に溝壑に顛せんとする有様で、元祿年間はその腐敗の極に達した。此の時に當り、吉良なる者あり、四十七士を起たしめ、忠孝の何物なるかを知らしめ、以て社會國家を警醒した。人心爲に振ひ、天下の形勢こゝに一變した。近くは大鹽平八郎、頼山陽、佐久間象山、吉田松陰の徒、皆これ其の勢に依りて動かされたものである。かくて將軍が三百年間掌握してゐた政權を奉還し、三百諸侯が奮つて其の封土を返上し、茲に王政維新の大業を遂げるに至つたのも、其の一大遠因として、吉良が義士を起たしめた遺功に歸せざるを得ない。順縁逆縁共に菩提である。吉良は逆縁ではあるが、其の偉績は誠に没すべからざるものではないか。天下の事は、青表紙や机上の空論のみで成功するものではない。純潔な義人烈士や、大人君子の働きに依つて成るのである。若し吉良が無かつたならば、四十七士はなく、四十七

士が無かつたゞすれば、日本は迅の昔に外國の奴隸になつてゐたかも知れぬ。奸物と言はれて、功のあるのが眞の功じや。倭と言はれて、益を與へるのが眞の偉人じや。今頃の書生が親の脛を噛りながら、鼻うごめかして屁理窟を叩いて居る。チヤンチヤラ可笑しい。其の様な空學問をするよりは、馬糞でも拾つて田畑の肥料にでもした方が遙かに國家の爲じや。大氣焔を吐き、私に對する皮肉まで附加へて、呵々大笑して去つた。

其後一月許り經て、門前を「羅宇屋」が大聲で叫ぶ者がある。煙管をすけ替へさせる爲に呼び入れる。圖らずもそれが反古齋であつた。偶々同寺の萬拙和尚が其の邊の庭掃除をしてゐたので、反古齋は「人を殺せば地獄に墮ちる」と云ふのは眞實であるか。と話しかけた。和尚曰く、「自分は未だ實地を見ないが、經文の中には左様に説かれてある。」翁曰く、「極樂界は無爲寂靜である。このことだが、それも事實であるか。」和尚曰く、「矢張り經典にあるから事實であらう。」翁曰く、「己れは無爲寂靜の極樂は嫌いだ。さうか地獄に墮ちたいものである。」

古今の英雄は大抵人を殺してゐるから、屹度地獄に集つて居るであらう。行つて彼等と談笑したら面白いに相違ない。私は彼の奇言を聞き、其の奇行を見、洒々落々の風采に接し、其の凡人ならざるを思ひ、彼の居處を問ふたら、「小石川金富町、九尺二間の裏店こそ、この反古齋が住家なれ」と答へた。

それより數日、雨天を待ちて彼の居を訪ふた。反古齋家に在り。喜び迎へて、「己れの如き業務を執る者は、人皆これを賤者と爲し、知友も亦悉く忌避するのに、君は書生でありながら己れに親しまうとするのは、その心事が面白い」と云ひ、更に「君に己れの好物を饗應するから暫く待つて居て呉れ」とて、出で、濁酒を購ひ來つて之を勸めた。飲み且つ談じ、氣焔は愈々高い。反古齋の言ふには、「己れと君と兄弟の約を結ばう。己れは既に古稀に近いから兄となり、君は未だ二十有七だと言ふから弟となれ。今後互に誼を盡さう。決して兄の言に背いてはならぬ」と。且つ急に改まり告げて曰く、「お前が書を読むのは、必ず志を有するからであらう。其の希望を遂げよう」と欲するなら、決して己れの言行を見習

つてはならぬ。己れは少壯にして文を學び、又武を學び、大に爲す所あらんことを志した。然るに我が性の狷介にして、善事には與するも、惡事を感じれば毫も之を恕するこゝが出来ず、君に忠諫し、友人に苦諫し、權者を言ひ、強者を罵倒して假借する所が無かつた。そこで終に世の捨つる所となり、己れも亦脱然として世を捨て、氣樂な自力自活の境涯となつた。お前は決して己れの言行を見習うて將來を誤つてはならぬぞ」と懇々訓戒して呉れたので、私は深く其の誼に感銘した。其の時左の事實を知つた。復古齋の性は山室、名は一二、勢州津に於ける藤堂の藩士で、鎗術師範役として文武に通じ、維新の際、苦忠其の容るゝ所となり、脱然として羅宇屋となつた。親戚知友は皆彼を目して狂者とし、無頼漢としたが、彼は毫も其の毀譽を意に介せず、卓然として勞役に衣食するに至つたのであるといふ。

翌春、新佛教の主唱者水谷仁海師が上京し、私の寓居に滞在するこゝ數日、談偶々山室復古齋のこゝに及んだ。仁海師は彼を以て真人なりとし、共に復古齋を

訪問した。時に仁海師薄紅色の法衣と金爛の輪袈裟を着けて居た。彼の寓に到れば、復古齋一見するや、「貴様は轡轡を連れて來たナ」と絶叫した。私が其の然らざる所以を辯じたので、彼は「兎も角も上れ」と云ふ。かくて三人巴座して大に談笑した。其の時驚くべき一奇談を聞いた。

「小石川の護國寺裏の山林中に穴居し、毎日四方に出で、馬糞を拾ふ男がある。年は四十前後、頭髮は肩を覆ひ、鬚髯は胸に垂れ、身に襤褸を纏ひ、其の汚穢見るだに堪へない。拾へる馬糞を賣り、其の日の糊口を塗して居る。人或は彼を目して、『性來の痴呆である』と云ひ、或は『幕末の儒者で發狂せるものである』と云ふが、彼は吾が無二の親友で、痴呆でもなければ、狂者でもない。學者にして隱士である。余は常に彼を以て寒山に擬し、余自ら拾得と稱して居るが、彼は余より高きこゝ數等、天下に信服すべき者は唯彼あるのみである。余は常に、馬糞拾ひの寒山があり、羅宇屋の拾得があるも、心窃に豊干の居らないのを遺憾として居たが、今こゝに仁海を得たから、之を豊干に擬すべきである。日本の三隱既に

揃つた。惜しいこゝには、天臺三隱の雅趣を缺いでゐる。放言大笑して分袂した。此の時仁海師が馬糞拾ひの姓名履歴を問ふたが、彼は余の畏敬する寒山を煩はして呉れるな。云うて、決して、何も語らなかつた。

後私は東北に遊び、三年の月日を閲し、歸來反古齋を訪ふたが、其の行く所を知らず。又馬糞拾ひの寒山は、平素から藁や木片を拾ひ來つて穴居の中に積み重ねて居たが、一夜故意か過失か火を失して、其の居る共に燒死し、遺骨は大塚光立院の住僧に葬られた。云ふこゝを、直接に其の僧から聞いた。

私の縁者の林臥龍も奇人で、明治奇人傳中に掲げられた人、曾て馬糞拾ひの寒山の隱士なるを聞き、砲兵工廠前で、彼が馬糞を拾へるを見て、恭しく一禮を爲し、且つ彼の居所を問ふたが、彼は一言をも發せず、ニヤリ／＼と笑うて去つた。更に其の居穴を訪ふたが、尙一言も發せず、唯微笑する許りであつたから、止むを得ず歸つて來た。この事であつた。(臥龍は維新後某縣の少參事となり、後職を宮内省に奉じ、原坦山師に就て佛教を學び、年五十に及んで洵宮の門に入り、研鑽十餘

年、其の蘊奥を極めて斯道の師となり、大正十年八十四歳の高齡を以て歿した。

反古齋と馬糞拾ひとに就き、私の知れる所は以上の事項に過ぎないが、反古齋の滿身の氣慨と洒脫の風采とは忘れるこゝが出来ず、馬糞拾ひの愚鈍なる風貌と汚穢なる顔容とは、今尙ほ眼前に髣髴たるものがある。反古齋の談片中には、「當時官途に相當の地位を有せる友人も少くない」このこゝもあつた。彼にして人並に富貴を希ふ心があれば、官途に就くこゝは容易であつたであらうが、其の性の奇なる、好んで天下の大勢に逆行し、人の賤とする羅字屋となり、以て貧に甘んじて得々たるものがある。若し夫れ馬糞拾ひが、反古齋の稱するが如く、狂にあらず痴にあらずして、學者にして隱士なりせば、既に奇人の範圍を通り越し、全く人間離れをして居る。其の性格に於て幾分の差異が無いでもないが、共に彼等の心中には、現在の貧に對する苦痛の感もなければ、又將來の富に對して快樂を夢みるこゝもない。蓬髮垢面、身には襤褸を纏ふも、其の胸底たるや、光風の如く、霽月の如く、洒々たり落々たるものがある。物質上では如何に貧者でも、

精神上では決して貧者でない。世の中には、智識徳行の缺如から、巨萬の富を抱いて却つて恐怖憂懼に襲はれつゝある者が少くない。故に内面より觀れば、羅字屋も馬糞拾ひも貧乏人の金持に云ふべく、萬金を抱いて心安からざる者は、金持の貧乏人とも稱すべきである。

以上は私の熟知せる物質的貧者にして精神的富者の一例であるが、世には宗教的安心哲學的立命又は道德的奉仕を完うするが爲に、自己の身命を損傷して顧みないものすらある。況や、單に其の身命を保持する爲の衣食住の如き、殆き眼中に置かざる者、敢て其の例に乏しくない。併し斯の如き貧者は、聖賢、隱士、畸人の如き社會罕に觀るの士が、深く自ら期する所があつて、好んで求めた特種の境涯を認め、又其の數も一般貧者の多數なるに比すれば、猶九牛の一毛も當ならざるものがあるから、貧者中の除外例として取扱ふべきである。故に本書に於ても、唯これを貧者の例外人物として掲ぐるに止め、専ら世俗の所謂貧者、即ち經濟上の貧富のみを對象として叙述することにする。

第二章 社會のドン底

一 田舎から都會へ

都會の集中は驚く可き數字を以て現れて來る。一例を東京市内外の人口に見るに、明治四十四年末には東京市の人口百九十萬七千二百七十二人のものが、大正九年末には二百三十七萬七千八百八十四人となり、十年間に四十七萬六千六百十二人を増加し、周圍の接續廿七ヶ町は、其の境界すら分らぬ一體のものとなり、同四十四年には三十五萬六千八百六十八人であつたものが、大正九年末には七十六萬六千五十一人となり、十年間に四十萬九千八百八十三人を増加し、市に接續町村との合計では、實に八十七萬九千七百九十五人を増加して居る。三萬以上の人口を有するものは、十年前には僅かに澁谷の一町なりしものが、大正九年末には澁谷、品川、大崎、淀橋、千駄谷、南千住、王子、瀧之川、日暮里、西藥鴨、千住、龜戸、吾嬬の十

三ヶ町村となり、中にも澁谷は八萬九千餘の人口を有する大都市となつた。此の以外にも接續市街を爲せる町村尙數箇に及んで居る。東京市は恰も數萬の人口を有せる中都會二十餘を附屬せるが如き盛況を呈して居るのである。這は全國の都會に於ける通有の状態で、特に大阪・神戸・京都・横濱・名古屋・福岡附近は最も著しいものである。

居住の移轉の自由は憲法に依つて保障せられたる臣民の權利であるから、華やかにして有利の如く見ゆる所へは、蟻の甘きに就くが如く、各地方から集中する、集中するから愈大都會を形成するに云ふわけで、都會は日に月に潮の寄せが如き勢を以て澎漲し繁昌しつゝある。地方の青少年達の中には、書籍や新聞や傳聞きに依つて都會の狀況を半解し、色々の空想に駆られて居る者もあるであらう。大都會には何か甘い仕事があらう、金儲けも出来よう、華やかに愉快であらう、田舎よりも好からう、地方でやつた失敗を都會で取返したい、大成功をして故郷の者を驚かしてやりたい、杯を思つて居る者も少くないであらう。恰も

よし、誘ひ出す機關は整つて居る。鐵道は四通八達である。日々に各種の求人廣告が新聞を賑はす。それを見る青少年の男女たちが、「あゝ、さすがは大都會だ、業務の自分に適したものが濱の眞砂のやうにある。都會にさへ出れば、職業を見付けるに造作はない。其餘暇に勤勉努力すれば、苦學を以て成功するも難事でない」と速了して、無謀に飛び出す。豈圖らんや、一の廣告には數十百の希望者が押掛けて居る。今度は違つた意味で、「さすがは大都會だ」とアツク魂消る。其の選に當ることは眞に容易でない。偶採用せられた處で、田舎の生活の様な悠長なものではない。都馴れぬ者が一人前の業務に當るのは、骨の折れること夥しい。忠實に勤勉せざればお拂箱となる。其餘暇の通學などは、二人前の業務を執ることになるので、こんな無理なことは兎ても永く繼續は出来ぬ、いつの間にもやら志も挫けてしまふ。

何處の地方にも大なり小なり成功者がある。中には裸一貫の成上りもある。其の人達が折々故郷へ錦を飾る。其の地方の大評判となる。成功した人は、第

一に身體が強壯で、性質も正直で忍耐力が強い、都會で事業を開拓するに適合した人である。是が地方の人をして都會を憧憬せしむる一大原因となる。然るに憧憬者は其の成功の素質に就ては十分に考へ及ぼさない。

世間には缺點ある者は多く、缺點なき者は少い。故に失敗者は多く、成功者は少い。多き失敗者は郷里へ音信不通となる。偶一部の親族間には其の惨憺たる窮狀が知られて居つても、自分達にも恥辱であるから、親戚は秘して吹聴しない。されば失敗者のここは一般の人が其の事情を知らず、成功者だけの評判が高い。都會は愈立身出世の本場なりと誤想する。そこで甲乙丙丁、我もく、都會へ向けて集中する。都會集中はざつと此の位のところで置かう。

二 都會の表面と裏面

扱、此の集中した者が如何に成行くかを記す前に、都會の人物と先代に集中した人々の状況を少し記すこととする。

都會集中、それが悪いことではない。都會に居住すべき必要があり、確乎たる理想目的があつて都會に轉ずるのは、寧ろ歓迎すべきである。併し古語の「深山大澤龍蛇多し」は、誠に甘いことを言つたもので、邊土僻陬の地から傑出した人物を出して居ることは、争はれない事實である。政治家、武人文豪、詩聖、畫伯、宗教家、教育家、碩學、商工業の成功者、相撲の關取、横綱まで、凡そ歴史上古今を通じて一世に聲名を博した程の人物は、其の大多數を片田舎から産出して居る。現在でも知名の士を物色して算へあけて見るに、大概は地方出の人である。大都會は人物の輩出上に幾多の缺陷あることが肯定される。

東京なごに於ては、各町に亘りて、三代以上住居して居る家は殆ど雨夜の星のごときもので、大概三代目には没落するに云はれて居る。日本橋西河岸で魚問屋をして居る村山鳩洲と云ふ人が、大正十年に發刊した清水芳洲氏の著「病は氣から」と題する書中に告白した一節に、僕は此の頃大通りに居る大商人の家庭のここを調べて見たが、「賣家」唐様で書く三代目どころか、何れも二代と相傳す

るものがないことを知つた。大通りの商人數百人を擧げて、現戸主は先代の子なりや、將た養子なりやと照會したらば、殆ど總てが養子であるに答へるに相違ない云つて居る。田舎には數十代連綿たる家は片端からであるが、都會地には三代以上嚴然たる家は甚だ少い。全然滅亡する譯でもない、其の子孫が皆没落するのである。

私が僅か三十六年間の在京中に、自分の知れる範圍だけでも、知名家の盛衰興亡驚くべきものがある。俗に「名人に二代なし」云ふが、名人に不肖の子は常に實見する所で、偉人の父に優る子はない。

前に都會地は、人物輩出の上に幾多の缺陷があると言つた。其の最大なるものは、享樂的惡魔の陥穽であらう。都會といふ都會には、享樂的の陥穽を設けて生血を絞らんとする大小の惡魔が充満して居る。大都會ほゞ甚しいものがある。

而して其の捕虜となる者は如何なる種類の人かを見れば、一は永住者では主

として知名家の二代目からで、他は地方から集中者の精神的素養のない蹠跟連である。此の二種類は大概皆其の捕虜となるの素質を有して居る。一たび此の惡魔の捕虜となつた者は、恰もドン底行の急行列車に乗つて居る様なもので、小驛には少しの停車もせずして、瞬く間に目的地に到着するのである。

地方の人が偶旅行して都會見物を爲すに當りては、名所舊蹟、神社佛閣、公園及繁華なる市街等の最も顯著なるものゝみを選んで見歩く。そして如何にも都會だなど歎美して止む。郷黨への土産話も、「都會は立派で、便利で、清潔で、富める人、偉らい人ばかりの集まつて居る處だ」といふ調子に吹聴する。斯くして一盲衆盲を率ゐるが如く、われ人共に都會憧憬熱に浮かされるのである。是れ實に皮相の淺見で、彼等は唯華美な都會の表面のみに眩惑し、其の裏面の細民窟の慘憺たる實狀などは、とても夢想だも出來ないのである。

特に地方人のみではない、永く都會に止り、學業を修めた人達でも、裏面の細民狀態なきを知つて居る者は極めて稀で、特に其の方面の事を研究し調査する一

部分の人士のみが之れを知つて居るに過ぎぬ。父祖代々都會に住し、都會に生れ都會に育つた謂ゆる生へ拔きの市民であつても、細民社會の狀況なき實見する人は極めて少いであらう。況や其の内情に立入りて之を調査するが如き人は、絶無といつてよからう。新聞雜誌なきに、稀に此の方面のこゝが掲げられても、多くの人はあまり注意を拂はぬ。近來社會事業の勃興するに至り、注意する者も幾分増加した様ではあるが、尙少數たるを免れぬ。

海面に起る風波は、其の方面を渡航する大船小舟の共に蒙る困難である。社會の一部に起る小波大浪は、其の一部には止らぬ、社會一般に蒙る所の利害なるのである。貧民社會のこゝが、直接に我等に利害はないと考へるのは大なる誤である。總ての社會の善惡は一般に影響するのみならず、如何なる人でも其の了簡の如何に依りては、皆此の社會に仲間入をするのであるから、之を研究し之が改善を圖るに共に、自らも此の方面に墮落せぬ様に勉むるこゝは、人世の大要件である。

三 是でも亦住宅か

大都會は何地も同じであるが、從來地代の昂騰につれて、市の中央部に介在した貧民窟が、漸次邊地に移りゆく傾向を示して居る。東京に就て見れば、以前には、東海道線の汽車が品川から市内に進入して將に新橋驛に着せんとする間に、芝新網町の貧民長屋數百軒が、車窓から手に取る如く見え、初めて首都に入る者を驚かしたが、後東京驛が出来て軌道が變更され、今日では車窓より此の奇觀が眼に入らぬこゝになつた。しかし今も尙ほ彼處には五百三十餘戸の貧民長屋を存して居る。深川本所、淺草下谷、小石川、牛込、四谷、芝、麻布の各區内にも之れが存在を見る。地代の騰貴に従ひ徐々に郡部へ押出されること云ふ形勢はあるが、貧民が減つたといふわけではなく、以前に比較したならば、非常な増加であらうと思ふ。

明治四十四年に於ける濟生會の調査では、東京の貧民二十萬人、大阪のが十四

萬人で、當時の市の人口に比すれば、東京が一割一分二厘、大阪が一割であつた。今日に於ては兩市共更に其の率を高めて居るであらう。市の周圍の田畑が變じて、貧民長屋が建てられたものが非常に多くなつたことは、郊外に足を踏む者の目撃する事實である。

貧民長屋は數十戸から二百戸位までの間で一團として建てられ、其の隘小なること何れも大同小異で、最大のもので六疊一ト間、三尺の昇降口に半坪の流し臺所位で、次は四疊半か三疊一ト間である。甚しいのなること、一疊半の家もあれば、一疊で一戸といふのさへもある。六疊の家になれば、二家族以上住居して居るのが多い。近年大都會の繁昌に連れ、地主は地代を際限もなく競り上げる家賃も亦年一年に競り上げる。特に年々地方から押掛ける人が多い爲に、家がない。幾ら建て、も追ひ付かぬ。随つて家賃を愈高くする。最近に於ける一般物價暴騰の影響や、都會集中や、家屋の不足なき混淆して家賃を騰貴せしめた結果は、戦前疊一枚につき五六十錢位であつたものが、一圓五十錢より二圓五十

錢にもなつて、平均十數割騰貴して居る。地代騰貴の上から考案したものであらうが、近年貧民長屋を二階建として、一戸分三疊又は二疊宛に仕切つて貸す方法が多數に出來た。貧民の家賃を中流の者に比すれば割合に高い、其の家屋の構造造作等は數等劣つたもので、中流家屋の半價以下で建てられるものである。家賃の割高なのは、何故か云へば、斯る家屋に住居する人達は、家賃を停滯させたり踏倒したりする者が多い。家主の方では収入の平均を計るから自然高率になることは、家主側の言ひ分である。是も止むを得ぬことの様にも聞えるが、一面には貧民に家屋を供給するものは、最も強慾な家主が多いと言はれて居る。一般に左様な譯でもあるまいが、多數は事實らしい。兎も角、家賃を拂はぬのも、高率な家賃を取るのも、共に我利的唯み合ではあるまいか。

貧民窟は東京の例で云へば、何れのものも大同小異であるから、一を以て其の他を推すことが出来る。六疊敷又は四疊半なること、二家族位同居して居るから、其の非衛生的なる状態は、住居の大小に依つて少しも異なる所はない。茲に一例

を挙げよう。(大正十年十二月調) 金杉裏から日暮里三河島邊へ掛けて數千の貧民長屋がある。大概長屋は長屋の距離は裏は三尺、表は六尺の空地のものが多い。故に一棟は南に向ひ、一棟は北向に建てられて居る。多くは四疊半一ト間づゝ、或は三疊一ト間、二疊一ト間、甚しきは一疊半のものすらある。此の小家屋に三人五人の家族が住んで居るのである。四疊半の長屋なれば間口九尺奥行二間入口三尺通りが三分せられて、三尺四方が炊事場、三尺四方が土間で昇降所三尺四方が便所になつて居る。唯四疊半のみで押入もない籠糶極まるものであるが、それで家賃は一ヶ月四圓五十錢位、又或るものは數十戸の長屋が、各戸僅かに一坪半で、入口の六尺を炊事場と昇降口に充て、疊は唯二疊のみで押入も窓もなく、便所は共同で使用して居る。而して家賃は三圓である。又驚くべき儉約な建方をした家屋がある。其の邊では相坂長屋と唱へられて居るが、多分相坂なる人の所有で有らう。一棟の二階建を二十餘戸に仕切つたもので、梁間三間半長十數間、棟の中央より仕切つた所謂棟割長屋であるから、一面は北に

向ひ、一面は南に向つて居る。六尺毎に仕切つて、奥行一間半巾六尺が一戸である。入口六尺を三尺は炊事場、他の三尺は昇降場に充て、二疊一ト間で押入もない。二階も此の通りである。階下中央六尺通りの内に、三尺通りは便所と二階の階段とし、三尺を交通路に充て、ある。而して一戸の家賃は二圓四十錢を徴して居る。家族の平均は大概四人二三分であるが、以上挙げた如き狹隘なる所に、如何にして起居し得らるゝであらう。

此の附近で最も甚しいものは、三河島の内で字「二の坪」に在る二十五戸の長屋である。二寸角位の棒杭の柱で、周圍は穴だらけの四分板を以て圍つてあるだけで、壁がない。其の穴だらけの板には、内から紙を貼つて風を防いで居る。しかも其の羽目板は半ば腐つたり割れたりして居て、割れ目から家内が丸見えのところもある。風雨を防ぐ爲であらう、その隙き間に新聞紙や厚紙を押し込んだりしたところもある。雨漏りもするものが見えて、屋根には古藁や古板なごが投げ上げられてある。其の最も廣いものが四疊一ト間、狭いのは一疊半で、何れ

も三尺の土間を取つて昇降所を設けて居る。疊を敷いた家はない。何れも破れた薄縁りを敷いて居る。家賃は、四疊のものが三圓、一疊半の家は二圓である。豚小屋同然と云ひたいが、斯んな粗悪な豚小屋であつたら、豚の爲めに忽ち壊されてしまふ。豚小屋よりも更に劣つて居るものはねばならぬ。

住宅の建築には、夏季に冷しく、冬季に暖かく、光線の射入、空氣の流通を良好にし、濕氣を避け、下水の流下を計るなき、各種の點に注意して設計すべき必要がある。若し是等の要點に注意せずして建築すれば、夏は熱くて、冬は寒く、不愉快不經濟の上に、病氣に罹り易い恐れがある。我國の居宅は成るべく南向きし、北面に空氣の流通口があれば、冬期に日光を南面全體に受け、夏季は日光が室内に入らず、風は夏は南より冬は北より吹くことが十中九分であるから、空氣の流通光線の射入も適度に、冬暖かに夏冷しく、住居して心地よく、夏なき蒸熱くて寝られぬなき云ふことは減多にないのである。家屋は人間生活の三大要素の一であるから、其の建築物の精粗は暫く間はさすするも、右の事項は最も大切なることである。

である。

然るに都會地の商店にては、道路に添うたる店舗を必要とする關係上から、是等の諸項に適應することは不可能の場合が甚だ多い。是は誠に止むを得ぬとするも、貧民住宅の如きは、多くは非商店地であるから、此の目的に應じ得らるのであるが、是等の要點に注意して建築した住宅は殆どない。貧民住宅は住宅と云はんよりは、寧ろ夜分の寢所だけを目的とした程度のもので、換氣はあしく、光線は入らず、冬寒く夏熱く、濕氣なきに對して寸毫の注意をも拂つて居ない。下水の流下すら不可能のものが十中八九である。夏なきは蒸熱く寝られぬことが多いと云つて居る。夏熱い家は冬は必らず寒いに極つて居る。棟割長屋の如きは、一面が南に向つて居れば、他の一面は數十戸悉く北に面して居て、窓一つあるではない。年中斯様な裡に起居して居れば、怠惰にもなる。不活潑にもなる。或は不愉快で、疝癩も昂ぶる。斯くて貧者をして愈貧道に驅る。實に貧民長屋の構造は、貧窮助長の有力なる機關であること謂ふべきである。

四 了簡達の集團

貧民長屋は何れも隘小なる家であるから、掃除をするにも至極簡單に出来る。怠らず勵行すれば、常に清潔を保つこゝは譯もないこゝである。しかも不潔は此の社會共通の特色で、この家も塵埃堆を爲し、足の踏みどころもない状態である。それでも住んで居る人々は平然たるもので、不潔の感なきは毫末もない様である。外部に至りては、其の不潔は一層甚しい。此の附近の下水なきは、至る所に塵埃が溜つて流下を妨げるから、下水は腐敗して赤子は一面に生じ、臭氣紛々たるものである。是は貧民窟のみではないが、貧民の住宅地は地坪の割に多數の人が住んで居て、開渠も假設であるから、他に比すれば殊に甚しい。彼等は自分以外のこゝは總て構はぬから、下水の流下が好からうが悪からうが、そんなこゝには一向無頓着である。腐水は溢れたり溜つて居る所が多い。夏季には兒童は溜り水を汲んだり、泥中に入つて遊んで居る。着衣は汚付いたもの破れ

たもののみである。衣服は全部洗替を持たぬ程でもない。注意すれば洗濯も出来るのに、汚の付かぬものを着て居るのは稀である。されば生計の爲めに洗濯をする隙がないかと思れば、さうでもない。隣同士の細君連は寄合つては喋々喃喃々饒舌の閑はある。常に井戸端會議が開かれる。野菜物を洗ふとか、洗濯をして居る者が一人あれば、其の周圍には二三の婦人が之をながめながら、頻りに談話を交換して居る。我等が之を聞くに三文の價値もない。子供の事とか親父の悪口とかである。されば閑隙は幾許もあるが、怠惰と清潔を保つ必要を知らぬ爲こであらう。若しも彼等が勤勉であつて、不潔が各種の病根と不快なるものであるこゝを自覺したなら、斯くまで不潔にはならず、斯る貧窮にも陥らぬであらう。是も亦非社會的ではあるまいか。

29
彼等の社會では兒童を輕視して居る。是も自暴は貧から云ふ譯でもあらうか、教育のこゝなきは餘り考へて居ない。小學教育なきも役所から督責を受けるので餘儀なく就學さすもの、自ら進んで就學せしむる者は少い。入學は

しても缺席が多い。未就學者があつても役場の督促に洩れる者もある。何故か云へば就籍して居らない爲である。

此の社會に「莫蓮女房」云はれて居る女が澤山ある。聞いて見るに、女が主動的に氣儘の結婚をしたものと言ふ意味らしい。男女とも時の都合次第合せ物は離れもの、離合勝手云ふ風に、氣まぐれに情意投合一時家庭を作つても、新たに好いた男が出来れば、女は「アンなヒヨットコは駄目だ」と言つて、良人を見捨て、新夫に奔る。男は「こんな阿多福は嫌だ」と云つて追ひ出し、氣に入れた女を入れて、「嬬」疊は新しいが好い」とすまし込んで居る例もある。此の間に於て婚姻届ををするでもなければ、又出生届もせず、戸籍にないから學齡に達しても、役場から就學の督責も出来ぬといふわけで、不就學の兒童も往々ある。

又兒童のこゝを多くは「餓鬼」唱へて居る。他は談話する多くの場合に、「内の餓鬼が」と言つて居る。普通の人情として、子に對しては、如何なる困難を忍んでも、其の幸福を祈るのが常であるに、此の社會では（無論取除はあらうけれども）

却つて子をもを自己の食物とする考を以て居る。兒女の成長して米代に供されるこゝを期待して居る。彼等の中では「今二三年も立てば米代にはなる」と、公言して憚らぬものが多い。

曾て増上寺の重寶なる狩野一信の五百羅漢の幅を見たこゝがあるが、其の幅中に餓鬼が生きた子をもを頭から丸かじりにしたり、病婦の枕頭に一椀の食物を置いてあるものを、多くの餓鬼が奪はんとして居たり、其の他種々なる悲境を半暗黒面に畫いてある。其所へ五人の羅漢が顯はれて、携へたる寶玉を差向けるに、其の寶玉より光明を放つて、照された部分だけが立派な人となりなつて居る圖であつた。此の寶玉は智慧と慈悲の光明を表象したものだといふ。即ち此の暗黒面は恰も是等親達の心理であらう、誠に情けないのである。彼等社會では子供が十二三に達すれば賣飛ばす者もある。娘が容貌が美ならば藝者に賣る。之れが爲には、幼年から無理算段をしても三味線や長唄の稽古をさせて、其の準備をさへして居る者がある。斯る準備の出来ぬものは、娼婦や密賣婦や酌婦な

きに賣る。人身賣買は禁ぜられて居るけれども、此の賣買をせられたものは藝娼妓だけでも全國に現在十萬人以上ある。密賣婦や酌婦を算したならば、幾十萬人に及ぶであらう。誰か人身賣買の事實を否定し得るものがあらうぞ。

又此の社會の少女には恐ろしき惡魔が付けねらつて居る。即ち人身賣買の媒介者である。貧民多き場所の附近には藝娼妓酌婦周旋所の看板を見受けるであらう。管に看板のみではない。斯る憐むべき人の子を藝娼妓や密賣婦や酌婦に賣買して、多額の媒介料をせしめる惡鬼羅刹の如きものが、此の社會にまはつて居る。若し親や本人が斯る業に入るを望まぬと見れば、種々の術策を弄して終には氏なくして玉の輿に乗るのは、此の業の外にはない。觀念せしむるに至るのである。尙ほ甚しきは妾を營業せしめることである。此の妾の營業は、普通の妾は趣を異にして居る。二人や三人の妾となるのではない。五人十人と妾たるべき約束をするのである。夫は甲乙丙丁と時日を取極めて妾業を爲すので、つまり一種特別なる娼婦である。妾業の媒介者も出來て居る

と云ふことである。此の妾業が當れば、彼等の一家は此の窟を脱して相當の住宅を定め、自家營業を爲すものもあるといふ。斯の如き妾業が二三十年來の流行と聞いては、唯驚くの外はない。斯うなれば兩親は左り團扇で遊んで暮らす。其の知人どもの羨望の的となること云ふに至つては、被毛戴角の仲間と云はれても致方はなからう。中には容貌の美なる女兒を、幼年の時に貰ひ受けて育てて、此の妾業を營ましめる者もあること云ふ。

斯る不倫不義なることも、彼等の社會では、親の爲には當然だと考へ、又そう言つて居る。若し子が當世氣を出して自由結婚でもする段となること、大悶着が持上がる。「親の恩を知らぬ鳥獸だ」と罵り怒る。親自らは鳥獸以上のことを爲して居るのは毛頭心付かぬまでに、精神が人間離れがして居る。子の方では、一人や二人の妾ならば忍耐もするが、八人十人の妾にされるのは、如何に親でも無理であること泣く。野合して結局問題が跡に残る。此の中に割込んで仲裁の勞を採る金取主義の我利く、妄者もある。斯の如く總てのことが我利主義で固ま

此の集團に偶犯罪人があつて入監するに、其の妻は取敢へず假りの夫を持つて、其の出監を待つなごのことは、少しも怪しからぬ沙汰に思はれて居ない。假夫の方が氣に入れば、前夫を捨て、逐電するこゝもある。道義人情の重荷もなく、所有財産も小風呂包一個が關の山なれば、行くも奔るも氣散じのものである。前夫が出獄した場合に、前の通りに前夫に歸れば、假夫と前夫との衝突を起すこゝもある。斬つた突いたの血塗れ騒ぎは、多く是等の事柄より起るのである。逐電しても再嫁してもいづれも内縁であるから、戸籍上には何等の支障も面倒も起らぬ。假令喧嘩争鬭はしても、表面訴を起すものの殆どないのは、此の社會一般の状態である。是亦我利的唯み合の社會ではあるまいか。

此の社會には、尙甚しき不倫不徳が平然として行はれて居る。年取りたる親を見捨て、逐電する子がある。病夫を見捨て、奔る妻もあり、妻を捨て、姿を隠す夫もある。養育院の貧原調査表中には此の種類の者が少くない。夫を捨

てた妻は、夫は酒飲で、怠惰で、先の見込がないと云つて居る。妻を捨てた夫は、妻の不しだらを罵つて居る。甚しきは妊婦を置いて行衛を暗ます夫もあり、稀には幼児數名を家に置去りにする夫婦すらもある。子を捨てる親は、東京府下のみに一ヶ年三百人乃至四百人位ある。捨兒は貧民窟のみに存する現象ではないが、矢張彼等の社會に最も多い様である。此の親にして子を捨てるに云ふとは、道義人情を有する人の決して爲し得られるものではない。棄兒の狀況に就て見るに、多くは歩行も不能、言語も不明で、大概は哺乳中の者である。棄兒の外に迷兒、浮浪兒がある。迷兒は言語も通じ歩行もするが、自己の住所、親の姓名も知らぬ程度の、三才以上四五才位までの者が多數である。浮浪兒は六七才以上十五六才位までの兒童で、親はありても扶養教育の義務を盡す能はざる者か、奉公先より飛び出したる者、地方より無斷上京したものなごで、何れも親元を自白せぬごか、親元は分つて居ても行衛不明の者ごかである。迷兒も浮浪兒も結局は幼少年の棄兒である。若し眞に愛情ある親なれば、其の筋へ申し立て、百

方搜索し、日こして飲食も安からぬ筈なるべきに、是等兒童の親達が搜索し來るは千中一二に過ぎぬ。されば同じ人類中にも道義は固より人情の大いに異つたものあるは、事實争ふ可からざるこゝである。子を捨て、省みぬこ云ふ中には、憐むべき悲しむべき事情があつて、茲に至るには相違ない。さるにても親でも子でも、夫でも妻でも、足手纏ひこなれば、捨て、省みぬまでの觀念があるので、之れが爲に愈困難の深淵に沈みて浮む瀬もなくなるのである。

茲に其の一例を擧げる。養育院へ京橋區某町の者きて、四十有餘の賤しけなる一婦人が來て、物語るやう、「妾は今より十六年前に夫に死別し、困窮の結果、生れて間もなき一女兒を何町何番地先へ棄てたのである。愛兒は棄てたけれども、一日片時も忘るゝこゝもなく、如何にもして手元に引取り、親子の名乗をした。いゝ夏は炎天を冒し、冬は嚴寒を厭はず、早天に納豆を賣り、晝は吹立豆を賣歩き、十六年の間に數百圓の貯蓄を爲し、今は其の子を引取るも生活の困難なきに至りたれば、若し其の子が御院に居るならば、引取らして頂きたい。さうなれば妾は

此の上ない本懐である」と、誠しやかに涙こ共に述べたので、掛員も感動し、私に通じた。私は本人に面會して篤き事情を糺し、其の子の特徴を聞き取つて取調べると、其の子は幸にも在院して居たので、之を引合はした處が、彼は大いに喜び、子も母なりと聞いて嬉しき様子であつた。結局養女として貰ひ受ける手續にするがよからうといふこゝになり、後夫々聞合せ、本人の申出に誤りなきを認めたらば、終に養女として入籍の手續をも濟まし、引取らしめた。斯くて凡そ一ケ年經過後、圖らずも院吏某が千葉縣銚子町で彼女に邂逅ひ、彼は母に引取られて間もなく淫賣婦に賣られて、同地に在るこゝが判明し、其の居所を確かめ來りて之を告げたから、有志者の醜金に依りて彼の女を購ひ返したが、彼の母は行衛を晦まして終に不明であつた。道義人情に遠ざかる斯くも甚しきものすらある。是等の事例は尙ほ多々あるが、際限のないこゝであるから略して置く。

彼等の社會は何れの方面を見ても、非社會的である。彼等社會は普通社會の助け合ひでなく、倒し合ひ、唾み合ひである。其の最も代表的のものは高利貸で

ある。何れの貧民窟にも高利貸の出入せぬ所はあるまい。此の高利貸なるものは、餘程古い時代から横行して居るものに見える。『翁草』に

今は昔し、享保年間に、日錢貸と云ふ者あり、其の日過しの者へ錢を貸す。日々に百文の錢に二文の利を添へて其の日の暮に返し、直にまた其の錢を借戻して翌日の元手とす。日々斯の如し。若し滞れば毎日の利を元にし、一貫文に至れば三貫文の證文を書かせて公訴す。其の利算用百文の錢一ヶ月六十文の利あり(中略)。此の事公儀へ聞えて不届の沙汰に及び、日錢貸の者も各所を拂はれ、缺所になり、爾來日錢停止せらる。

とあつて、公儀より禁ぜられた爲めに、貧民は非常に困難を感じたことを記して居るが、此の利を一ヶ月借り通すものとすれば、七百三十割となるが、若し滞りたる時、一貫文に對し三貫文の證書に直し公訴に附すとあるが、之をも支拂ふに至れば、一年何千割の利子となるであらう。今も此の高利貸と貧民とは不離の關係に在る。借る者があるから貸す者もある譯ではあるが、此の高利貸は實に

聖代の魔物である。高利貸から言はしむれば、「魔物なご、は怪しからぬ、誰も頼着せぬ貧民に金融の道を附けてやるのである。擔保品の提供を受けて金を貸す質屋ですら、三四割の利子を取るのは公然許されて居る。吾等は其の質物をも持たぬ者に、信用貸をする。一つ間違へば元も子も失ふのである上に、番頭も使へば、手代も使ふ。中には貸倒れも出来るから、高利は正當だ」と云つて居る。兎も角此の社會では唯み合主義が公行されて居る。其の利子は安いものでも年十五六割より最高利が七百三十割に達すると云ふに至つては、驚くの外はない。此の一點から見ても、一度此の社會に陥れば、容易に擡頭するこゝが出来ぬのも尤の次第である。

東京淺草玉姫町に、東京市長を會長とせる辛亥救濟會の貧民住宅が百餘戸ある。其の差配人の語る所に依れば、同所に居住せる魚屋と八百屋が、毎日高利貸より二圓を借受けて市場で買出を爲し、得意先を行商して晩方歸途、貳圓の元金に利子四十錢を附して拂ひ、年中之を繰返して居るこのこゝである。之を一ヶ月

年に通じ利子のみにて百四十六圓、實に年利七百三十割である。私は當時事務の管理を托せられて居たから、差配人に勸めて毎日二錢宛の貯金を爲さしめば、三ヶ月餘にして貳圓の原資を得られる。既に原資を得た上は、自己の資金で商賣を繼續し、其の利子も心得て、毎日二十錢を貯蓄せば、一年にして七十三圓、五年繼續せば一廉の商人となる譯なれば、之を差配人にて盡力し、實行せしむることによろしく努めたが、彼等は「斯る小面倒なことはなさずとも、利子さへ拂へば大威張りで商賣が出来る。朝出掛けに大聲でオーイと呼べば、同時にソラミ二圓を投げ出して呉れる、禮の一言も云ふに及ばぬ。差配所なきの世話を受ければ、毎日お禮の百萬だら、さても遣り切れない」なごゝて聞入れず、從來通り借入れで商賣をして居るこのことであつた。

又貧民部落には、往々物品の日掛拂を唱ふるものが行はれて居る。是も普通五十錢の品を八十錢又は壹圓位の高價に日掛けで拂入るゝ方法で、高利貸も毫も異なる所はない。中流以上では通帳で買入れ月末拂にしたからさして、格段なる

高價に支拂を要するこゝはなからうが、貧民に在りては掛買は六七割の高價となるのである。其の他各所に行はれて居る高利貸を調べて見るに、種々なるものがある。五圓の證書を渡し、手取四圓參拾錢で、一日十錢宛六十日間に支拂ふ、是は一年間の延べ二十四割以上の利子に當る。又壹圓の證書で八十八錢を借り、毎日二錢宛六十日間に支拂ふのもある。是は年利八十割以上。又六圓の證書で四圓八十五錢を受取り、毎日二十錢宛六十日間に支拂ふ、是は年利十五割以上。烏金を稱するものは、毎朝一圓を借りて、晩方五錢の利を附して返却する、是は年利八十一割五分。又一時九圓を借り、十圓の證書を入れ、八十日間日賦で十三錢宛拂入れる、是が年利五十三割以上。其の他種々あれども、最低利年十五割より最高七百三十割止りの様である。實に驚くべき高利であるが、貧民間には普通のこととして行はれて居るのである。貸借の利子に關しては法律上の制限あるも、是は畢竟訴訟の場合に有効なる制限に過ぎざるが故に、貧民間に行はるゝ、貸借の實際に關しては、法律の制限も其の効用を爲さぬのである。一度斯

る高利の借金に絡まる時は、其の膏血は悉く債鬼に吸取られて、終身困窮の深淵に沈淪するが故に、其の心理は愈紛亂して、我利愈強烈なるは、誠に自然の趨勢なりと云はざるを得ない。實に我利的唯み合の社會ではあるまいか。

第三章 零落者基調の一致

一 富家に生れた好色家の末路

十年も前から、某と云ふ夫婦で、三人の子を携帶して養育院に入院した窮民があつた。入院の時は夫婦ともに病氣で、それは梅毒から來たものとのこゝであつた。妻は早く全快して洗濯場に働いて居たが、夫の方は二年餘も病室に入つて、歩行だけは出来るまでになつたが、稼ぐ様には兎ても快癒はせぬであらうと云ふこゝであつた。こゝろが花時に突然出院を願ひ出た。掛員は「そんな身體で退院しても困るであらう、全快まで療養せよ」と勧めたけれど、少し世話を頼

むべき目的もあるから、一先づ一人だけ退院して、追て妻子も引取るこのこゝであつたが、退院して二三日目に、上野の櫻樹に縊死した。其の事が新聞に出た。豫て妻に變なこゝも言つて居たし、新聞紙上の人相着衣も心掛りであるとして、妻が警察へ申出で、見たら、果してそれが夫であつた。それから妻が歸院後本人の風呂敷包を開いて見るに、長い入院中に書いて居た帳面が數冊と、遺書とが出た。最早快復の見込がないから、退院して緩く花の見納めをして死ぬと云ふこゝから、此の本は幹事の一覽に入れて後に、子供の成人の上で見せて呉れ私の一生の誤りを包まず書いてあるから、子供の爲にもなるであらうと云ふのであつた。妻が其の書類を携へて來て、私に讀んで呉れこのこゝであつた。一見するに假名交りの話し體に綴つた小説的の履歴で、細字で數冊もある。預つて置いて緩く一讀したのであつた。

北國の豪家に生れ、若い時は榮耀榮華に暮すと共に、頗る色を好み、度々妻を取替へたこゝから、他の多くの婦人との關係、其の婦人の爲めに屢起つて來た種々

の面倒なる事件、家庭の風波、親類縁者との經緯^{けいゐ}やらを、事細かに記したもので、恰も源氏物語の光源氏や、西鶴好色本の世之助を中心とし、周圍に千種萬様の婦人を展開させて行く様な観がある。かゝる状態で歲月を經過して居る内に、身代は傾き出し、親類からの苦情も嚴しくなつた。これが五月蠅い^いまで田畑山林家屋什器を金に代へ、數千圓を携へて出京し、馴れぬ商業を始めた。女道樂は以前に變らず、出京後は田舎女は土臭し^いまで取替へたが、夫より後は萬事か手違ひばかりとなつて、貧乏は奔流の如くに流れて來た。最後の妻には次から次へ三人も子供が生れたが、其の内に夫婦とも病に罹り、資産は全く盡き果て、其の日の糊口にも困るに及んだ。それまでに度々梅毒に胃されたから、夫婦の病氣もそれが原因であらうと最初から自覺して居つた。終に生活が全く杜塞して入院したが、國許にはいくら親類はあつても、元が親類ごもの異見が嫌さに逃げ出した都住居、假令ひ死ねば^いまで相談も掛けられず、掛けた^いまで誰も頓着して呉れる者はないといふのであつた。中に驚くのは數十人の婦人を列ねてあるにも拘

ず、關係の婦人は尙多けれ^い、別に煩累も生ぜず、自分も餘り熱心ならぬものは省いて書かぬ^いとしてある。又若い時から世の中で樂みは女と花に限る。其の他には樂みも望みも持たぬ^いと書いてあつた^いに依り、花見をして縊死した理由も判明したのである。

二 放蕩家の屈指豪商の果

45
毎年櫻花時に、六十歳以上の男女に特別の馳走をして院内で花見をさすのが、養育院の年中行事の一であつた。某年其の會に列した八十餘歳の一老人、是はまだ入院後間もない人である。人品骨柄賤しからず、容貌も拔群に立派な人である。段々話を聞くに、彼は淺草の豪家の生れで、早く父母に死別れ、未丁年で家督を相續した。召使の番頭手代や出入の人達も、異口同音に「旦那が二代や三代我儘一抔を盡されても、此の身代がビクもするものではない^いと云ふ。成程金も千兩以上はいつでも手元にある。其の節の千兩は今時の何萬兩といふので

あらう。大地主でもあり、店の取引も淺草では屈指の一家。地金はすきなり御意は好し。丁年前からそろ／＼始めた道樂が壯年に及んで段々嵩じて、廿五六歳からは、取替へ引替へ、圍ひ者の十人を減らしたこゝにはない。其の上でも柳橋でも、自分の顔を知らぬ藝者はない位に遊んだ。落語家でも俳優でも名ある者は皆知人で、吉原なごでも随分全盛遊びをやつた。處が五十の坂を越さぬ内から、身代が左り前こなり、番頭手代は悪いこゝをする。自分には店のこゝは一切分らぬ。據なく店を疊むこ、夫から夫へこ悪いこゝばかり重つて来て、バタ／＼に身代が壞れてしまつたが、夫までに親類縁者から強意見をしても、テンで相手にせぬこ云ふ風であつたから、近縁の者は寄付かぬ様になり、妻は離縁を取つて里へ歸る。從弟ハトコいとこはあつても遊び中間にはなるが、家の相談相手になる者は一人もない。若い時から道樂をしつくした爲めか、子こ云ふものは一人も出來ぬ。チャホヤ云うて機嫌取りに入浸りに來たものは、かうなるこ皆逃けてしまふ。それでも家や道具のある内、賣食をしながらも、女道樂は止まぬ。こ

盛時代にノ、九尺二間の裏店住居、新しい貧乏仲間、知人は出來たが、舊知人はつて貸し寄付かぬ。此方から訪ねるこ、逃げ廻る。逃げ廻るも道理で、會へば全が、其の日借りた金を義理にも返さねばならぬ。それかこ云うて、一々證文を取たのは少ない。證文がある金でも、盛んなら後があるから返しもするにも困る様になるこ、證文を突付けても、摺つたもんだで返しては呉れぬ。親類もハヤ近縁こ云ふではなし、從兄弟なごも皆死んでしまつた。縁者はいくらもあるが、盛んな時にやア遠縁でもチャホヤ云うて出入をするが、こうなつちやア知らぬ顔の半兵衛、家貧にして新知少く、賤しき身には故人疎し、こ謠つたが、斯うなつて見て、泌み／＼こ身につまされる。誰一人訪ねて呉れる者もなし、世の中の人情が能く分つた時には、モ一駄目だ。元は知らなんだ赤の他人様の中に、「昔の何兵衛さんのなれの果か、親様にやアいかいお世話になつたこゝもある」といって、存じ掛もないお助けを受けたこゝも一兩度はあつた。全く親の光りである。こんな不孝者にでも親様の光りのお助けがある。誠にありがたいこ、獨り袖をぬら

したこゝもあつた。全然乞食見たいな真似をして、八十幾つまで裏長屋で生恥を晒したが、身から出た錆で自業自得だ。病氣になつたもんですから御院の御厄介にまでなつた。こちらでこんな御馳走が頂けるこゝは存じがけもないこゝだ。嗚呼八十餘年の永い夢を見た——この述懐。

三 轉職で行詰つた元農業技師

泉州岸和田の富裕なる家に生れた伊藤某は、順次に正式の教育を受けて駒場農學校を卒業し、大阪府勸業課に奉職せるを振出し、古市郡役所員、和歌山縣田邊藩士の授産館技師、廣島縣杵原郡鐘詰製造所技師、滋賀縣大津鐘詰製造所技師、空地集治監農工課農業掛長、宮城縣巖手水産協親會事務員、東洋商會支配人に轉々し、更に神田印刷所社長、日本橋區新葎町盛榮商會支配人、東京府農事試驗場御用掛、近江鐵道事務員にも轉々し、終に公私の俸給生活を一擲し、東京淺草榮久町に居を構へて高利貸を営みしが、間もなくこれに失敗し、次で麻布日ヶ窪に文

具店を開きたるも、これ亦失敗に歸し、終に一家窮乏離散の憂き目を見、果ては公の救助を受くるに至つた。

四 道樂者となつた名家の令嬢

水口ヨツ(變名)といふ六十ばかりの老婦人があつた。彼の語る所に依れば、生れは房州の某村で、父は元沿岸七浦の宰領、仰がれ家も舊家として尊敬を受けて居た。母は若い時松平伊豆守家の奥勤めをした者で、至つて物堅い性格であつた。當時娘を東京へ見習に出すのが此の地方一般の風習で、ヨツが十六の時、父母は相談して、知人なる神田美土代町の池田某方へ頼み、裁縫の稽古に通はすこゝにした。

こゝろが富裕な家の女子には往々あり勝な癖で、ヨツは遊藝が食事よりも嗜き、來て、裁縫に通ふ振りを装ひ、親元よりの送金は皆常盤津の稽古、殆ど毎夜寄席で浪華節を聽く料に使用した。滿三年の後には、常盤津も人から上手に賞

められる様になり、浪華節には特に趣味を覚え、自分でも相應な自覺があつたので、二十歳の時に意を決して、浪華亭駒吉の弟子になりたいと申込んだ。駒吉は「親が承知があれば」といふので、直ちに両親に問合せたら、母は大に驚き、倉皇として出京し、無理やりにヨツを連れ歸り、世間へは發狂したと云ふことにして、座敷牢を造つてこれに押込め、殆ど一年間といふものは、母親が毎日く涙をこぼしながら異見した。いくら異見をしても、ヨツには馬の耳に念佛で、隙があつたら牢を破つて逃げようと思つて居た。

恰もよし、其の年の八月末に大暴風雨があつて、牢から出されたのを幸い、態を改心の體を装うて父母を欺き、窃かに父の金を取出して上京し、再び駒吉に弟子入を申込んだ。處が駒吉は斷乎として之を跳ねつけた上、親元にも通じたので、再び母が來りて連れ歸り、さめふく泣きながら「お前の様な子が此の母の胎内に宿つたのは、何の因果であらう。併し此の母を泣かせるだけ、お前の泣く時節が來るかと思へば、誠に不慙に堪へぬ」としやくりあけて泣いたので、ヨツもア

悪かつたと思ひ、其の時は共に泣いたが、それは唯一時のこと、間もなく母の言葉も忘れ果て、又もや東京へ抜け出し、駒吉の許へ三たび弟子入を要求した。両親も今度は呆れたものか、別に迎へにも來らず、駒吉も終に弟子入を許して呉れた。それより熱心に浪華節の稽古をして、二十五歳の時始めて前座を勤める様になつた。渡世柄まで男女打混つて田舎稼ぎに出掛けることも屢々ある。其の中いつしか父なし子を妊娠する始末となり、女の子を産み落し、マチと名づけて育てあげた。今は其の娘も二十三歳。これにも浪華節を仕込んだが、樂遊と稱する仲間に連れられて田舎廻りをして居る内、何れに墮落をしたか、今にかいもく行衛が知れず、自分はこの通り病氣に冒され、母を泣かした報いは、今はわが身の上になつた。廻る因果の車程恐ろしいものはないとの、涙ながらの懺悔話。

五 浮浪者となつた資産家の一人娘

是は三十五歳の山本エス(變名)といふ失明婦人の物語。彼は淺草向柳原町の

相應の資産ある家に生れたが、兄弟にては兄が一人なれば、一人娘で蝶よ花よこ
甘やかして育てられた。

十六の年に父に死別かれ、翌十七歳の時には、はや人から後指をさゝれる始末
となつた。終には母の眼にも入り、親類の耳にも聞え、四方から手厳しき干渉を
受けるに至り、我儘者の腹立紛れに、情夫を手に携へて高崎市に落ち延びたのが
不幸の初まり、二人とも格別の路用の金もないので、旅館へ女中奉公に住込んだ
が、忽ち身の破滅はなつた。群馬縣は女郎屋を云ふものが無い代りに、茶屋女
は云ふに及ばず、旅館の女中までも、娼妓同様に客の好みに應じて伽をする。か
くて吳客を送り越客を迎へて居る内に、淺草鳥越の荻野某に思はれ、前借金を濟し
て内縁の妻として引取られた。元來我儘育ちの何事にも厭きの來る悪い癖が
あるので、半年も経たぬ内に其の男に厭氣がさし、家を飛び出して再び我儘勝手
の出來る酌婦となつた。間もなく岐阜縣の清井某に引取られ、復た内縁の妻と
なりて世帯を持つたが、これもほんの束の間、此の男も厭やださあつて、一年足ら

ずで別れ、三たび元の酌婦となつた。かくて埼玉千葉茨城の各地を飛び歩き、サ
ンザン男を騙ましたり金を絞り取つた報いは、觀面、何時感染したもののやら、梅毒
が身體一面に吹き出し、治療の甲斐もなく、兩眼とも失明し、今は取付く島もなく
親への不孝、男の怨みは恐ろしいと眼覺めた時は、全くの盲人。止むを得ず、杖を
力に兄の許に便れば、母は既に此の世を去り、兄と嫂とは大こほし「家族の五人も
ある中に、十餘年も一度の便りもせず、思ふ存分浮氣をしつくし、今更盲になつて
來たから、さて世話が出來るか出來まいか、篤考へて見よ」と異見をさるれば、返
す言葉は一言もない。泣く泣く、前非後悔の話をすると、外にかけ替のない兄と
妹の二人の中、それなら按摩になれとて、淺草福井町の茅場某方へ内弟子に遣ら
れた。何を云うても中年の盲目、感は悪いし、まだ梅毒も癒つて居ない。僅か二
ヶ月で先方から愛想をつかさ、泣く泣く、其の家を出たが、これから直に兄の家
へも行かれぬと、思案ながらにトボトボ歩いて居る内、江東病院の前で、風を切つ
て疾走して來た電車に足をすくはれ、そのまゝ、人事不省となり、某病院へ擔ぎ込

まれた。治療の功があつて負傷は大體よくなつたが、梅毒の方が仲々癒らぬため、終に御厄介になることになりましたと語りつゞけた。

六 判事の身で入獄した浪費者

入院者にG某云へる者があつた。彼は元判事として山梨縣に奉職して居た。然るに平素から驕奢に耽つてゐた結果、轉任の際に於ける臨時の諸費用に窮し、身の裁判官であることをも顧みるに由なく、窃に官金を費消するに至つた。間もなく事が露顯して檢舉せられ、審理の末終に懲役に處せられた。

出獄後、友人の斡旋で或る法律事務所には雇はれ、訴訟の鑑定に従事すること、なつたが、金錢の自由になるに伴ひ、幾度か榮華の夢を繰り返し、爰に再び驕奢の念を起して、花に遊び月に耽り、妙なからざる委託金を費消した。かくて之が善後策につき、兎や角に思案に悩める末、或る日不圖一策を案出し、上野停車場一等待合室に於て、自分の鞆を他人の鞆をすり換へ、室外に出で、將に逃逸せんことを

する刹那、警吏の追跡する所となり、遂に捕縛されて検事局に送られた。

かくて彼は再び入獄の身となつた。茲に於てか、彼は今度出獄するも、到底社會の良民に齒して生活することの困難であることを曉り、自暴自棄となり、同様の竊盜常習犯者に就て竊盜術を研究し、出獄の際には純然たる竊盜に化し果てた。其の後幾回か犯數を累ね、最後の出獄の際病氣に冒され入院して救助を受けること、なつた。

七 官吏から悲境に陥つた大酒家

入院者の一人にH某云ふ者があつた。彼は中學校卒業後、間もなく煙草專賣局に奉職し、次第に昇進して相當の俸給を受け、家計も裕かに暮して居つた。

或る日交際上料亭に遊んで、友人から酒を勧められたのが病み付きとなり、其の後は毎夕の獨酌を此の上もなき楽しみとすに至り、最初は極めて少量で済んだものが、次第に酒量を増し、一年ならざるに早や大酒家となり果て、對酌三升

を費すに至つた。斯くて酒の爲めに、家計も次第に困難になつた許りでなく、身體の健康をも害し、後には重き腦病に罹つて始ぎ啞者同様の姿となり、終に役所から退職を命ぜられるの悲境に陥つた。勿論かくなつては、自活の途を立てるに由なく、公の救護を仰ぐに至つたのである。

八 射倅で失敗した元某商社頭取

六十餘歳で入院した清水某は、信州諏訪の藩士の家に生れ、裕かなる家計の下に成長した。中年長野市に出で、商業に従事し、漸次に信用を得て生絲綿麻等の販賣を專業させる擴商社の頭取となり、それから約十年間もそこに勤務して居た。

當時商用で屢々上京し、其の都度蠣殻町の米相場に手を出したが、損するこゝもあれば儲けるこゝもあつて、大失敗は招かずに濟んだ。其の後は同社を去り、専ら射倅事業に奔走し、最後に友人二名と共に十餘萬圓を岩代國內川銅山へ投

資したが、全然失敗に歸し、これが爲め忽ち家産は傾き、剩へ心痛の結果病氣まで惹き起すに至つた。それでもまだ多少の餘財があつたので、一年間はやつこ湯治場で静養するこゝも出來たが、其の後は全く零落の極に達し、諸所を彷徨中、遂に病倒の憂目を見たのである。

尙彼の語る所に依れば、二度投機事業に手を出しては、眞面目な商業は馬鹿々々しく思はれて、現在身の破滅は知りながらも、止むに止まれぬものである。私の如きも、最初から此の横道に這入らなかつたなら、今日は優に四五萬圓の財産を拵へて居つたであらうに、それが自活すらも出來ず、かゝる御厄介に預るこゝもなつた。呉々も戒むべきは射倅心である、暗涙の眼臉を霑すのが見えた。

九 我儘勝手に終始した法律家の落魄

私の同縣人に初瀬(變名)といふ頗る伶俐な男があつた。生家は相當の資産を有し、郷里の某學校で漢文英語を學び、明治十三四年頃に上京して法律を修め、數

年の後には或る方面の法律教師となり、或る所の法律顧問ともなり、相當の收入を得て紳士風な生活をして居つた。随分我儘勝手な振舞をする男で、其の我儘勝手が豪傑でもあるかの如く心得て居たらしかつた。彼は常に「法律の許す範圍ならば、如何なる行動を取るも自由である」と公言して憚らなかつた。常に堂々たる大厦に住居し、借屋料を拂はず、剩へ移轉する時には移轉料を取るのを以て自慢さして居るに云ふことは、豫て聞及んで居た。

國元に居た時から知合でもあり、不圖其の男に用事が出来たので、兩三回互に往復することになつた。行つて見るに聞きしに優る立派な家屋を構へて居る。私は豫て彼が家賃不拂の自慢を聞及んで居たので、特に尋ねて見た。「是は立派なお宅だ、君の御所有か」と尋ねるに、「否、借家だ」と云ふから、「こんな堂々たる家は、家賃は大したものであらう」と言ふに、彼は「家賃は高いが、僕には無料だ」と云ふ。夫から自慢話を持出した。「僕は上京後十五年、下宿を出て十年になるが、一度でも是以下の家に住居つたともなく、家賃などは拂つたことがない。而かも出る

時には移轉料を取る」といふのであつた。彼は愈移轉を極めるに、豫め家屋を捜索して置いて、借入の交渉には、堂々たる風采を装うて二人曳の人車に乗り、家主や差配を誤魔化し、前の家から受領する移轉料だけは敷金や家賃に入れるが、其の跡は一文半錢でも支拂はぬと云ふ寸法で、殆ど詐偽的の行爲をして少しも恥ともせず、自慢らしく豪語するのであつた。他の知人より聞く所に依れば、彼が行ふ所は皆に夫のみではない。法律の制裁を受けざる限りは、如何なる無理非道でも、平然決行して少しも憚らぬと云ふことであつた。私は其の後は用事もなく往復も打絶えたが、後聞く所に依るに、彼は國元の資産も蕩盡し、夫婦も離縁となり、兄弟は義絶し、朋友も相手にする者なく、肺結核に罹りて貧窮に陥り、曾て法律を教授した門人が銚子町に居るのをたより、同地に轉地保養し居たが、病氣は漸次に重りて、終に其の門弟の厄介の下に死亡した。其の死亡前後門弟より各所の知人へ書面を發したるも、誰一人返事すらする者なく、門弟は大に迷惑し、止むを得ず死體を茶毘に附し、其の遺骨を生前の知人の許に送り付けた。こ

ころが知人は之を受けず、「彼には兄弟ある筈なれば、其許に送られたし」と返却したれば門弟もほゞ／＼當惑し、遺骨は中有に迷つて居たが、後漸く義絶の弟を探し當て、其の弟が引取つたこと云ふことであつた。

第四章 不可解心理の發露

一 呆れた某女の了簡違

了簡違は管に貧民に限つたことではないが、これが特に貧民には甚しいものがある。此の了簡違ほゞ恐ろしいものはなく、何處まで間違ふか底の知れぬもので、往々常識では判断のつかぬ呆然たるものもある。

社會に於ける不祥なる出來事の大部分は、此の了簡違から起るのである。若しそれが發狂か、痴愚か、物の物の道理の分らぬものなれば、別に不思議もないが、さうではなく。假令智慧は勝れて居ても、學問を修めて居ても、其の精神の根本

に料簡違がある時、場合により、事に觸れて、意外千萬なる吃驚すべき事件を惹き起し時に或は再び起つこと、の出來ぬ様な結果を招くのである。これは智情意が脱線的に、其の料簡違の精神の上に働くからである。

大正元年のこゝ、記憶する。東京市養育院の女病室で、放火するものがあつた。一度は草蓆を四五本集めてそれを障子に立掛け、火をつけたが、發見が早かつたので、蓆の草を二本ばかり、障子の紙を二枚だけ焼いて消止めた。二三日経つと、又午前一時頃床下から發火したが、是も揚板の裏を焦した位のこゝで消止めた。同病室の北に當る六百坪の空地へ、女病室と並行に百廿餘坪の病室二棟を新築中で、其の邊には鉋屑や木屑が散らばつたり、積つたりしてあつた。此の鉋屑を澤山に病室中央の出張つた流し元の横にある揚板の床下へ詰め込んで、是へ放火したのであつた。院内では勿論夜番が設けてあつて、一人は内部、一人は外部を更代に巡視し、立關内の丁字點の中心に其の詰所を置いてある。斯く二度も放火があるのは容易ならぬこゝである。唯監視のみに任して置いて

は不安心極る。二度とも望みを達せなかつたが、此の先幾度も遭るに相違ないと思つたから、事務員中の壯年者六人を選び密かに告げて言つた。夫は夜分二人づゝ三回交代で、女病室から新築中の室内を警戒し、放火を防止するに共に、放火者を発見しようと思ふのであつた。院には病人や老人や不具癡疾の人達も千二百人も居る時であつたから、一朝火を失したら、如何なる慘狀を現出するかも知れぬ。平素から火災避難の練習はして居たけれど、容易ならぬことであるから、諸君の盡力で之を防止し、之を発見し得ることが出来たならば、此の上もない幸であると思つたら、何れも快諾して屹度仕遂げると思つたのであつた。

其の夜の午前二時ごろのことである。ドロ／＼と音響が私の家まで響く、私の宅は院の構内に在る役宅で、院から一丁足らず離れて居る。此の音響は多くの人が廊下を駆け走る響きである。従来も屢々例のあるとて、變事が院内に起るに先の通りに響くのであるから、スハ大事と思つて直ちに飛び起き、轟く胸を押し静め、衣服を着替へて居るに、「火事だ／＼」と思つて呼ぶ聲が聞え、宅の裏門を叩いて、院が火

事ですと思つて知らせて来る。急ぎ駆け付けて見るに、火は既に消し止めた所であつた。様子を聞くに、特殊夜番の一人は女病室の中庭に佇みて警戒し、他の一人は新築中の病室に忍んで見張つて居るに、パチ／＼と發火の音がするが、少しも火は見えぬ。病室は内部は障子、外部は一面の硝子戸になつて居たから、中に火が起れば直ちに見える筈であるのに、火が見えぬから、兩人とも同病室に飛び込んで来て、彼所か此所かと思つても、唯音のみ、床下でもない、便所であらうと思つて見れば、果して戸の隙間から火が見える。「此所だ／＼」と思つて消火器を呼びながら、戸を開けるに、火焰は非常な勢で、廊下の天井をいづくまでも勢ひ鋭く奔る。消火器が来たから火元に向つて灑ぐ。其の内に水も續々運び来る、他の消火器も来る、終に難なく消し留めた。便所は一棟四個あつて、其の過半を焼き、廊下の天井は火が這つた爲め少し焦けたのみで、他に別條はなかつた。

大塚警察署へ電話で知らす。警官も來り事務員も全部集つたが、評議區々である。放火者を押へることは出来なかつたが、茲に一の手掛りはあつた。普通

64
夜番も前二度の放火で、特に注意をして居た。私も注意方を言ひ渡してあつた。同夜は上野某云ふ男健康室の看護人の當番で、同人は氣の利いた正直で注意深い人である。上野は夜番の便宜にせんが爲めに晝間、窃かに女病室の中の様子が見える様に態に障子に大きな穴を穿けて置いた。そしていつも同室の前では、忍び足で、穴から内の様子を窺い見るのであつた。丁度同人が内部を巡視して病室の障子の穴から中の模様を窺ひ見た時、北側の取付の若い婦人が、將に寢臺に昇らんとする所で、今彼女は便所から歸つて來たものゝ推測した。奥の室の様子は見えぬから分らぬが、この室には外に何等の異状も見當らなかつた。夫よりそろ／＼右に曲つて九尺廊下に出で、立關の詰所へ向つて凡十四五間來るゝ、バタ／＼足音がして間もなく「火事だ」と一聲聞えたから、上野は病室の方へ引返した。最後に便所から出て來た者は、慥かに若い彼女であるから、彼が怪しいと云ふのである。他の者も彼女の素振りが變だすと云ふ。其の變な理由も色々聞かされた。同室の看護人も亦彼が怪しいと云ふ。病室の人では彼女が火事

前に便所から戻つたことを知つて居るものはない。何れも平素の舉動と、現在の素振りとが怪しいと云ふのである。若し上野夜番が云ふ通り、彼女が彼が見た時、便所から歸つたとしても、彼が入つた便所が、果して焼出した場所であつたか、否かも分らず、他の者が焼けた便所に入つて居て、彼は他に入つたかも知れぬが、兎も角も彼の若い婦人は疑の焦點に置かれて居る。之れが唯一の手掛りである。

65
私は何氣なき體を裝ひて女病室に行き、奥の室も口の室も念を入れて人々の様子を見、其の人態なごも熟視したが、成程人の噂の通りに、彼女は落付かぬ様子が歴然と見える。併し奥の室にも若い婦人が居る。此の婦人も落付かぬ風は前の婦人と同様である。若い者は斯く同じ様に見えるのかも知れぬとも思つた。病室の人員は二室で四十人程であるが、他の人々は差して變つた様子は無い。皆何れも見舞を云ふ。彼の若い女二人は何も言はぬ。併し今出火後で氣が顛倒して居り、特に若い婦人は老年や壯者とは違ふから、斯様に見えるのかと

も思つたが、疑はしい點は慥かにある。取調べの爲に來た警官へも逐一此の一條を述べた。警官は夜番や看護婦や下働の婦人なごから、一々狀況を聞き取り、最後にかの口の室の若い婦人を二階に呼び上げて取調べたが、結局要領を得ずして引取つた。

私は色々考へた末、若い女を二階に連れ來らしめた。豫め其の女の椅子を取極めて、「其の位地を動かさぬ様に腰を下させよ」と看護婦に命じて置いた。其の位置は私が椅子に掛るゝ其の眞横から私の身體が全部見える様にして置いたのである。又看護婦には彼を椅子に腰掛させたら、直ちに引取れよと命じて置いた。私は彼女が二階に昇つた後、凡二十分位を隔て、二階に昇つて行つた。是は彼女の心を成るべく落着けしめる爲めであつた。彼女は黙禮をした。私も黙禮を返した。私は靜かに椅子に腰を下して、腰から上を直立の姿勢を執つて、暫らく正面を見ながら、無我觀を凝らした。徐々に兩の手を握り占めて右手を卓上に置き、左手を其の上に載せ、自分の額を其の握つた手の上に載せ、黙々こ

して居るこゝ凡そ二十分も経つたであらうと思ふ頃、徐かに頭部を揚げ、彼女に向いて「ア、困つたこゝをして呉れたナ」と言つた。彼は之れに應じて「ごうも濟みませんこゝを致しました」と答へた。「ナゼあんなこゝをしたのか」と言ふと、彼女は次の如く物語つた。

「私の直ぐ隣りの寢臺に大病人が寢て居ります。其の人には毎日鶏卵が附くのですが、其の人は食べませんから、毎日私が食べて居りましたら、三人目の三十餘りの女の人が『お前さんは此の人の卵を毎日取つて食べて居るが、そんなこゝをやるゝ罰があたる』と申しました。それだけならば私も腹は立てないのですが、あの人が病室中へ言ひ觸らしたもんですから、看護婦さんを始め皆の人に悪まれる上に、私を泥坊だと言ひ出したので、腹が立てくしかたがありません。いつそ此の家を焼いてしまつて、彼の人の居るころをなくして困らしてやらうと思ひましたが、私は病後でまだ足が確かりしません。漸くつかまへ立ちで便所へ通つ位ですから、奥の室に居る私と同年の女にこれくゝ話すゝ私に同情

して呉れました。『お前さんも手傳つて呉れぬか』と云ひましたら『火を附けるのは嫌だけれど、こしらへだけならして遣る』と云ひますから、あの女にこしらへをして貰つて、二度放けましたが、二度も消されてしまひました。するに昨晚あの女が『流しの端の大籠に鮑屑の詰めたのが置いてある、あれを便所へ入れて遣るから放けよ』と云ひました。一時ごろに一番口の便所へ入れて呉れたので、盗んで置いたマツチで放けたのです。少しも包み隠さず物語つた。此の大籠の鮑屑は特別夜番の兩人が申合はして、わざと流し許に置かして、成るだけ早く實行させようと思つたのである。

夫れから私は彼女の心得違のこゝから、若し火事になつたら、三人目の婦人の居所もなくなるが、お前方のも共になくなるではないか。又千人の人の居所がなくなり、病人や老人や盲人や不具の人達が千二百人も居るのであるから、怪我人や死人が出来るかも知れぬ。怨は其の婦人にあつても、第一に迷惑する者は養育院である。こゝや、悪いこゝは必ず顯はるゝ、こゝなき懇々意見をしてやつ

たら、彼は涙を流して只管謝罪するのであつた。

夫から彼女に、『此の上は警察官に取調べられたら、私に話した通りに包み隠さず話して、謝るより外に致し方はない。斯くなつた上は内濟ですます譯に行かぬ。又裁判所に出ても、決して隠してはいけぬ。有りのまゝに言ふがよろしい。お前たちはまだ若い。行先きの長い人であるから、此の先き悪いと思ふことはしたり思つたりしてはいけぬ。人が悪く仕向けても、少しも怨んではならぬ。神や佛は皆見てござる。自分で悪いこゝさへせねば、人が仕向けて來ても、其の仕向けて來る人が悪いのであるから、致し方がないが、神や佛は許されぬから恐ろしい』と、十分に諭して病室へ送り返し、引き違ひに其の加擔者たる十九の婦人を看護婦に連れて來さし、是にも前の話をして見るに、前の婦人の言つたの少しも違はぬ。再び警官が出張して取調べた上で、連れ歸つて裁判所へ廻された。彼等の心理状態は、吾等の常識では殆ど判断が出来ぬ。こゝ斯くのごこくである。

迷こ云ふものが精神の底に潜んで居るこ、心が闇黒になつて、理非正邪の辨別が附かぬ様になるのである。人の迷位恐ろしいものはない。犯罪人の中には常識を以て考へ得られぬ様なこまが往々あるこ云ふこまであるが、是が所謂變態心理である。利己中心の迷はきこままで奔放するものか、まるで狂馬の如きものである。此の十九歳の婦人の如き、利己的の強烈なる迷が貧乏を通り越して、犯罪にまで突入したものである。斯くまでに至つては、如何なる人も彼を使用し、彼を保護するこまは容易でない。世の中には、利己的身勝手から飛んで火に入るの類が甚だ多い。年々生ずる十萬以上の犯罪者は罪種こそ異なれ、多くは是である。

二 河口某の乞食根性

河口ミ云ふ五十前後の者が、行旅病人として養育院に收容された。彼の脚里は廣島縣賀茂郡の某村で、十年以來乞食渡世をして居るこのこまであつた。教

誨師は彼に對して種々の訓誨的談話を試みたが、彼は平然たるもので、少しもこれに耳を假すこまなく、却て先方から説教を始め、乞食生活を謳歌し出した。

「人さんはごんなに見ても、ごんなに考へても御勝手です。私共には、世の中で乞食位資本なしで、出来る氣樂な商賣はないと思ひます。乞食になりたてこそ、少々飢餓（ひたひた）い思ひをした時もありましたが、物乞ふ呼吸を覚えさへすれば、何も心配したものでなく、如何なる日でも三十錢や五十錢の貰ひはあります。縁日さか、花見さか、兎角人の多く集る所に出かけますこ、五六十錢から一二圓にもなるこまがあります。此處に御厄介になつて、は、麥飯にお汁位のものですが、外に居れば赤飯もたべられます。天ぶらも御馳走になります。壽司でも、お汁粉でも、蕎麥でも、それは、何でも思ふ物が口に入ります。たと路傍で待つて居ては、そもいきませんが、恰度潮時を見計つて、天ぶら屋の前に立てば、客の残りの天ぶらが貰へます。蕎麥屋でも、汁粉屋でも、お茶屋でも、女郎屋でも、門に立つて動かずに居れば、先きでは邪魔にもなり體裁もよくないから、不精（へた）に小言を

云ひながらでも呉れます。時としては西洋料理で舌鼓を打つともあります。着物ですか、それは葬式のあつた家に貰ひに参りますれば、病人の着残したものが手に入ります。事によれば、私共が着るに商賣勝手の悪い様な立派なものがありますから、そんなものに出くはした時には直に賣拂ひ、その金で似合つた古着を買ひます。

夜ですか、それは金さへあれば木賃宿に泊り込んで、慰みに小博奕でも打てば、相手を買かすこともあり、寺銭の取れることもあつて、仲々愉快なものであります。負けた所が、元々人様から貰つたお金で、何も失望するにも當りません。錢がなければ、橋の下でも、積材の間でも、神社佛閣の椽の下でも、その日の風の吹き廻はして、足の落着いた處で住家を求め、これも又香氣なものであります。

病氣ですか、これもよくしたもので、二日や三日位の病氣なら、仲間から夫々手當をして呉れますから、少しも困ることはありません。若し長くなれば、お上で打ちやつては置かず、かやうな救護所（かたすけほ）があつて、それに入れて下さいます。私

もはたゞ其のお世話で御厄介になるだけです。食ふに困らず、着るに困らず、住むに困らず、病氣に困らず、年貢の心配もなければ、子孫長久の計をなすでもなし、これ程氣樂なものはありません。」

「寢る間のみ人に變らぬ思出を、浮世に返へす曉の鐘」は、勿論一部の乞食の述べた懷であらうが、又一部の乞食には、「三日乞食をすれば忘れられぬ」の俚言が示す様に、乞食根性の情性から、更に之に興味を有するに至つた者もある。

三 甲太郎の泥棒根性

甲太郎(假名)云ふ入院者があつた。年は七十歳、窃盜犯で二年前巢鴨監獄に入監し、出獄の際、病氣の爲に養育院に入院したものである。監獄教誨師から院の教誨師へ「本人は近來信仰の門に入り、最早老年にも及んで居るから、累犯者ではあるが、今後犯罪の憂はなからう」の申傳へもあつた。彼は自ら望んで、院の教會堂の周圍の掃除をして怠らなかつた。毎日參堂しては禮拜

念佛して居るので、累犯者として感心な老人だとの噂もあつたから、院からは掃除賃として一日二錢宛を給與することにした。然るに一日教誨師夫人の蝦口が見えぬ。中には十餘圓の金が入れてあつた。遺失したか窃られたか。窃られたとすれば、甲太郎ではあるまいかとの一應の疑は掛つたが、確證もないので、其の儘に打過ぎた。それから数日の中に、甲太郎が夜分寢床から抜け出して、町へ酒を飲みに出るさといふ噂が立つた。室の看護人が注意して居るさ、一旦寢床に入つた彼は、枕を並べて居る他の一人と共に床から抜け出して、徐々、室内に出る。看護人は跡を尾けて見た。東の方に枳殻の生垣がある。其の垣の間へ晝間用意をして居たものと思はれて、底なしの桶を差込んで、其の中を潜り、外の道へ這ひ出すのであつた。看護人も續いて這ひ出した。彼等は院の塀に添うて、廻り廻りして表門通りの往來に出て、数丁先の居酒屋へ入り、酒を命じて、差しつ差されつ、饜腹飲んで、上機嫌で高語をしながら、元の通りに桶穴からめぐり込んで桶を抜き取つた。看護人は表門に廻つて這入て來た。

翌朝此の報告が私の手許に出た。最早甲太郎が教誨師夫人の蝦口の犯人であるとの推量が出来た。私は甲太郎を呼んで聞いた。彼は少も包み隠す所なく語るのであつた。

「朝、會堂の周圍の掃除をして居るさ、一個の蝦口が落ちて居る。中を改めるさ十餘圓の金がある。是は自分が多年の悪心を改めて嗜好な酒も飲まぬのを、佛様が可愛相と思し召して下さつたものであらうさ。押戴いて懐中にしたが、考へて見るさ、月に六十錢戴いて居る者が、十圓以上の金を持つて居ては、人に疑はるゝは必定だ。又人に取りられぬさも限らぬ。自分は酒の外には何も欲しい物もないから、直ぐに居酒屋に行つて一杯やり、亭主にはだけの金を渡して置くから、通帳をこしらへて毎日飲んだ勘定を記けて置いて貰へぬか、相談したら、承知をして通を拵へて呉れた。其の通も酒屋に預けて戻つた。其の晩からは床に入つて寢た振りをして、そつと抜け出して飲みに行きましたが、三日目の夜に枕を並べて居る乙公が、足を踏んだと云つて怒り出したので、ツイ一杯機嫌で吐

鳴り付けてやる。乙公は「大きな聲をしなさんな。每晚寢床を抜け出してドロンケンに酔つてつ戻つて来るにやア、人に聞かされぬ仔細がある。睨んで居る。枕を並べて寝る誼しみに、一杯おごる。ありやア魚心には水心だ。乃公だつて愚圖くは言はネー」強迫つたもんです。乙公は元は博奕打の切れものです。『さう圖星を指れちやア仕方がネー。おごつてやらう』直に二人で出掛けて飲直しをやりました。夫からは二人連れで三晩参りました。

悪びれもせず淀みもなく陳べ立てた。私は「出入口は」問ふたら、「背の口です。御門も開いて居りますが、鑑札が貰へぬので前にセメント樽を見付けて、其の底を抜いて置いたやつを垣根に差込んでトンネルを拵へ、其の中から出入した」答へた。前後少しの偽りもない様である。私は蝦口は教誨師の夫人の所有で搜して居る。ここから拾つた物を黙つて費消するはよからぬ。ここ、謝罪する。ここ、残金を返すと、爾後の心得等を申し聞かしたら、散々に詫びて、残金を落し主に返却し謝罪をしたのであつた。教誨師も是はお前に遣る。こゝて事済みな

つた。

後甲太郎を呼んで、若い時から、今日に至るまでの履歴を尋ねて見た。彼の語る所に依れば、彼は幼年の頃、日本橋の薬研堀に奉公に出て、二三年間はそこで勤めたが、我儘は年一年と増長し、遂に主家を飛び出して、夫から夫へ、僅かの間に勤め先を替へては飛び出した。こゝやくして居る内に、年齢と身體は一人前になつた。一日、小車に經節を積んで外に置きながら、店へ這入つて話し込んで居る小僧がある。其の車の置き所が丁度小僧の居る所からは見えぬを幸に、其の小車の曳き逃げを試みて、甘くいつたのが悪い。こゝの手始めで、其の方の友達も段々に出来る。奉公先は出た切りで、此の年になるまで悪い。こゝばかり仕通して来たが、十一度監獄に行き、十年は監獄で年を送つた。云ふのである。

77
其の犯罪を問ふ。誠意に氣地のない小仕事ばかりで、お恥かしい次第、是ぞ申す程の仕事も致さず、何とも申譯がありません。詭言を言ふ。彼の言に依る。盗賊を一生を終るは恥かしい。申譯がない。考へるもの。見える。盗賊を

職業を心得て居れば、自から斯る言葉も出るのであらう。私は謝罪の意味が途方もない間違ひ方であるのに失笑を禁じ得なかつた。甲太郎は「自分の仕事は車の曳き逃けが専門だ」と誇りらしく答へる。「それは空車か荷積のものか」と尋ねれば「ねらう所は積荷の車であるが、積物に依りては曳逃けの機會はあつても、重くて逃けられぬものが多く、積荷の種類に依つては捌きの付かぬ品もある。直に捌きの付く品で曳き逃けの機會をねらうのであるから、餘程骨が折れる」と云ふ。話が曳き逃け一條に進むと、彼は「何ごとも打忘れたるが如く、甚だ熱心で、濃厚なる趣味を感じるが如き態度を言葉で物語るのであつた。

「先づうまい物にありつくのは五日に一度か、十日に一度位のもので、時に依る目を光らして東京中歩き廻つても、半月も仕事の見付からぬこころもある。其の様な時には食ふに困るから、空車を曳き出して居酒屋へ行くのです。先づ鰯腹飲んだり食うたりした揚句、金を拂ふまで車を預かつて置いて呉れ」といふのです。ない袖の振れぬこころは、商賣人は分りが早い。二ツ返事で承知する。こ

いつを度々やつて居るに暴露露るのです。うまい仕事にあり付いた時は、荷を捌いて金は懐に仕舞つて置いて、車は前の手で居酒屋で始末を付ける。荷の捌きですか、不正品の捌きはそれ／＼ちやん／＼捌く窩主が極まつて居ます。その代り正もの、半植です。原手の掛らぬ品だから仕方はありません。監獄へは長いのが二年。大概一年か八ヶ月、五ヶ月位で御年貢は済みます。度重なれば、食ひ込むのは當り前です。夫でも此の年になるまで、此の仕事を始めてからは唯一日も汗を流して人間並の稼ぎをしたこころはありません。年を取ちやアあきません。一昨昨年監獄を出て来て、年は寄る積荷稼ぎは出来ませんが、一日も食はずには居れません。空車を曳き出して来て、飯屋へ行つては前の手で暫らくやつて居ました。或る時芝の居酒屋で其の手をやるに、飯屋の亭主が因業者で、何と云つても承知しません。さう／＼警察へ突き出すと云ふから、「勝手にしろ、持つて来た車ア俺のぢやネー、警察へ行きやア食ひ込むまでだ」と度胸をきめたら、果して警察へ突出した。警察では掛の者が一應取調べた後で、署長さん

が出て来て、散々説諭をして、『今後を改心するなら今度に限り免してやる』と云ふのです。微罪不檢舉で放免にしようと思ふのです。その時かう申しました。『署長様の前だが、そりやア困ります。私は若い時から車の曳き逃げが専門で、モーター十通も監獄へ行きましたが、出て来てもこれからはこの稼ぎも出来ません。此の稼ぎを始めてから四十何年、一日も真面目な稼ぎはしたとのない奴です。此の御免になればやつぱり空車の曳き逃げでもやらなけりやア、飢へます。ならうこゝなら監獄へやつて頂きたい』と申したら、署長さんも考へて、『手前は誠に厄介な奴だ』と云つて、やつと裁判へ廻されて、監獄へ一年半ばかり送られました。今度は御教誨も身に沁みましたし、年は取るし、悪いこゝをせずと世渡りがして見たいと思つて居るに、放免の日に御院へ入院を許可せられて送られたので、此の上は御堂の掃除でもして一生を終りたいと心得て居ります』と語つた。私が妻帯の有無を尋ねるに、『妻帯どころの騒ぎではありません。婦人の肌には觸れたこゝもありません。人は能く「人間に瘡氣と色氣のない

ものはない』と云ひますが、自分ばかりは色氣も瘡氣も露ほごもありません』と威張つて云ふのであつた。

第五章 認めたる曙光の強弱

一 一門衛の更生環境を善化する

大正十一年一月年頭に於て、蓮沼門三君から惠まれた賀状により、私は欽すべき一美談を得た。蓮沼氏は青年修養團の主幹である。同團は田尻・澁澤兩子爵を團頭に戴いて、經濟と道德の一致を主張し實行する所の一大青年團で、今は團員全國に亘り十萬以上に及んで居るであらう。此の團體の標榜する所は、流汗・鍛鍊・同胞相愛で、結局心身を鍛鍊し、相愛の大道に依りて、各人の本務を盡し、個人の使命を果さんとするに在る。謂ゆる欽すべき實例とは、次の文に現はれた美談であるが、蓮沼君の承認を得て茲に登載するこゝにした。

萩原兼雄君は佐世保海軍工廠の一門衛である。大正十年、修養團講習會に出席して感激禁することを能はず、前半世の濁魂を清め、新しく愛に生れ、過去の暗雲生活から脱出して光明界に入らうと決心した。

君が會場を去るに際し、涙ながらに誓つて曰く、「私は常に人に求むることばかり多く、人に厭ぐることを考へませんでした。自ら自己を卑下して社會の落伍者と悲觀して居りました。上官を怨み、家主を呪ひました。家族も、近隣も、親和することが出来ませんでした。これ皆利己に立脚して居たからです。皇國の使命を實現して此の世界を住み善き樂園たらしめ様とする我々修養團員は、先づ己れが家庭と近隣を善化せねばなりません。私は歸國早々善化運動を開始して、今年中に必らず支部を設立致します。どうか此の誓言を記憶して居て下さい。」

日月流れて年は將に暮れようとする。「佐世保の支部は如何に」「萩原君の誓約は如何に」と、密かに案ずる折から、十一月廿七日支部發會式を舉行する

の吉報が來た。松元幹事は勇躍してその式場に參列した。萩原君は、松元君の手を握り、「悦んで下さい腹を切らずに濟みました」と、感激の熱涙を流した。さいふことである。萩原君が家庭に歸るや、從來の愛と汗とを離れた、怨恨怠惰の生活を改めた。早起裸體のまゝで國民體操を行ひ、家族に先んじて室内外を掃除し、更に隣家の溝ざらひまでも努めた。總身の汗を以て人と世に使はれようとし、奉仕生活に入つたのである。家族は喜ぶ、近所の人は感心する。君が無言の實行は、一人の同志を得、多くの團員を得る原動力となつた。氏は日一日と希望に輝き、曾て憂鬱なりし顔色は、次第に歡喜の色に満たさるやうになつた。

君は家主と犬猿も管ならぬ不和の中であつた。「門衛と侮つて疊替もして呉れぬ、壁の修繕もして呉れぬ、馬鹿にするにも程がある」と僻み心に家主を憎んだ。君が更生してからは、「これ皆自己の罪で、決して他人を責むべきでない」と、一事も家主に要求することなく、從來借り家として粗末にした穢れた心

を洗つて、「國家の家である、天子の御預け物である、自分が住む間は自分の家であり、自分の管理として大切に取扱はねばならぬ」と家主を待たず、自己の能力の範圍で、修繕もし美化もした。自分から心を披いて家主に眞情を注いだ。神性を宿す人間が、誰か感ぜずに居られよう。家主は別人のやうに親切にして呉れ、進んで疊替も襖張まで手入をして呉れた。現在は特別に睦び合ふやうになつた。

工廠の藤田少將が、松元幹事に向ひ、感涙を流して語る。「實行の力ほご人を動かすものはない。私も従來幾多の書も読み、話も聞き、長い経験の中で萩原君の善化運動を見た時ほご感激したことはありません。私が現在家主と親和するここが出来たのも、萩原君のお蔭であります。私ももごは家主と争つた一人であります。團員に加盟してから共に善化運動を勉めて居りますご。人を使役せんごした傲慢の魂を粉碎して、「人に使役せられよう、求むるものに與へよう」と更生するのでなければ、決して住みよき世界を造るごは出来

ぬ。千の名法、萬の權力を以てするも、愛ご汗を離れて、社會善化の道はない。我等同志は地位はなくごも、自分が賤しくごも、唯涙ご汗ご實行に依りて、最後の勝利を見つゝある。

猛火も時過ぐれば消える、一度點火せられた靈火は、水も風も消すごは出来ぬ。獻身奉仕の靈火燃え廣がつては、あらゆる醜穢を焼き盡して、往く所善化美化の歡樂境が展開される。果せる哉、各工廠に於ける同志が、一度善化運動の旗を擧ぐるや、共鳴の志士加盟するもの多く、今は横須賀舞鶴吳の各工廠悉く支部を設立するの狀況である。延いては海軍省の高等官を始め、吏員一同が本團の精神を聞かうごする機會が到來した。一波起て萬波動く、實に感謝ご欣喜に堪へぬごごであります。

二 紙屑買の卓見に著者へコマさる

ある日のごご、私の宅へ紙屑買が來た。此の男は普通の紙屑買ごは少し違つ

た所があるので、私は好奇心に驅られて話しかけた。「一日稼いで幾許位利益になるか」云ふに、彼は「私どもの商賣は何も彼も細いづくめです、生活も細い、資本も細い、利益も細い、人間も細い」云ふ譯ですが、それでも細い生活をして毎日少しづつ、でも貯蓄をして居れば、段々太くなるに楽しんでやつて居りますが、ありがたいことには、人様が不潔だとか、賤しいとか思はるゝものほぎ、割の良いものです」語る。「不潔かは知らんが、賤しい商賣」云ふことは無い」云へば、彼は不潔」云ふことが癢に障つたらしく、滔々として説き出した。

「ナアに、あんまり上品な商賣ではありませんが、此の商賣をするにやア、人様に下賤視せられても、不潔な物を取扱つても、平氣になる工夫が最初に出来なきやア、兎ても續きません。假令人様に下賤視せられたつて、正しい商賣をして、正しい生活をして居れば、天地には恥ぢざる了簡でやつて居ます。不潔物」云ふは、不用物のとで、不用物は悉く不潔物」なる。人様にやア不潔物でも、屑買に取つち、やア大切な商品です。山海の珍味」云はれる結構な料理だつて、一度でも!!

に入れて吐き出したら、直ちに不潔物」なり、當人すら再び口にはしない、誰しも顔を横に振る。不用」なつたから不潔なので、人の口が不潔な譯でもなく、物が腐つた譯でもない。魚類の死體は高い代價を拂つて買取つて行くが、美人の死體は金を附けても、無縁の者で引取る者はない。火葬場の臭氣が煙突外に洩れ出したら、大問題を惹き起すであらうが、ホテルや西洋料理屋の牛や豚や蒲焼の臭氣は、食慾をそゝつて鼻をひこづかせても、町の問題」なつた例はない。牛の死體が道に横はつて居たら、人は顔を背けて道を急ぐであらうが、店に飾られた牛鳥鶏豚の死體は、争うて買ひ取られる。是等は人の不用」認めたものが、不潔」思はれて、同じ物でも有用」思ふ物は、不潔」は思はぬだけのことである。屑物でも、人様のお宅では不用物」なつたから、不潔物」思はれる。私」もは必需品として取扱ふから不潔物」ではありません。此の屑物の種類を、木綿絹紙屑金物」云ふ位に分類して問屋へ卸すに、問屋は尙細かに撰り分けて、各方面に賣買する。拔毛はカモジ屋へ行つてカモジ」なり、夫人令嬢の頭部に飾られ、プリキ類

は玩具となりてお子さん達に喜ばれ、紙は漉き直して白紙同様に使用せられ、絹物はハタキとなりて各家庭に入る。此の通りに必要品となりて見れば、如何なるお方にでも、清潔物として有用の働きをする。是等の品が物に依つては洗はれたり、消毒せられる譯ではない。却て多くの人の手垢を附け、實のところは不潔を増して居るかも知れぬけれど、古物變造不潔論の起つたころは、未だ曾て聞いたころもない。下水の水は不潔でも、蒸發すれば、雲となり、雨となり、雪となり、霧となり、霞となり、天地に廣がりて百物を潤ほし、動植物を生育する。是は天地の廢物利用ぢやアありませんまいか。屑屋は下賤視せられても、天地と同じ働きをやつて居るので、下賤と見るなア見る方が誤つて居るんだ、なんかん、手前勝手の手理窟をこじ附け、心の裡では自分免許に偉がつて辛棒してやつて見る、ナカ、是も面白いものです。若しもこんな屑物が家毎に溜つたら、家内中不潔になる。私ども無料では持つて行かない。相當の代價を拂つて引受けて行き、天下有用の品とする。貴い職業だ、自分極に極めて居れば、人が何と思はう、

言はれよう、そんなころは氣にも掛らぬ様になります。」

と、諄々話して歸つた。私は實に其の職業的觀念が調うて居るのに感心したころである。彼の精神は既に光明界を辿りつゝ、あるが、此の態度を持續して進めば、細いながらに貯蓄も漸次に増加し、將來は物質上に於ても幸福を齎らすであらう。

三 乞食の親方十五名の良國民を作る

東京市養育院で感化部を設け、浮浪兒を收容して感化教育を施すころ、なつたのは、明治三十八年七月であつた。其の時はまだ感化法の施行されて居らぬ時であるから、浮浪兒を收容するには、各警察署へ依頼したり、養育院が自ら搜索して入院せしめなければならなかつた。

明治四十一年十一月の某日、豫て浮浪兒の巢窟を聞えた淺草門跡裏の誓願寺へ行つて見た。それにおほしき兒童は一人も見當らなかつたが、乞食の親分ら

しい三十許の垢面蓬頭の男、外に男女二人の乞食が居つた。其の親分が彼等の社會で巾き、の通稱ペンキ屋であることは、後で知つたのである。私は其の親分らしい乞食に向つて、「此處には子供の乞食が澤山集つて居るに聞いたが、今日は居らぬか」と問ふに、彼は「皆稼ぎに出て居るから、今は一人も居らぬ」と云ふ。「それでは何時頃歸るか、又幾人位居るか」と尋ねるに、子供は十六人居るが、夜は皆戻つて来る」と答へた。私は彼に種々の話を持掛けて成るべく懇意にならうと考へ、少しばかりの銅貨を取出し、「何か食つて呉れ」と言つて與へた。彼等三人は再三低頭して禮を述べ、奥底もなく私の間に答へた。つまり彼は乞食の親分として、子分の者共に其の營業方法を教授してやり、自分は幾分づゝの頭をばつて渡世して居るのである。

私はソロ／＼説教を始めた。「お前達の様に年を取つた者は、これから學校に入れよか、獨立の職業を求めよかと言つた所が仕方がないが、子供は此の先教育を勉強せよとみんな立派な者にもなれるのである。その者に乞食をさして置いて

は追々悪い事をする様になる。これは人間を殺してしまふ様なものぢや。私の所はこんな子供を學校へ入れ、物の道理を教へ、それ／＼職業も習はし、行先き相當の者に仕立て、やる様に世話をする場所だが、さうだ、お前達も一つ骨を折つて、子供だけにはお貰ひを止めさせ、私の所へよ越す様にしては呉れまいか。此處はお寺だが、佛様は、此の世で不幸な人でも善い事をすれば、未來は必ず幸福な身に生れると教へられたと言ふから、お前達の爲にもなることだ。さうか私どもの助力をして貰ひたい」と眞心をこめて話すに、彼も流石は人の子である。能く私の意を了解して、「誠に有りがたいお考へです。親兄弟もない世話をする者もない宿なし兒の飢ゑるのが可愛相なので、世話をしつて居ますが、是からは屹度あなたの所へ遣る様にします」と請合つた。そこで名刺を數枚與へて歸つた。

其の後彼は數度に十五人の子供を送つて來て呉れた。茲に不思議なことに、は、今まで警察署の手を経て送られて來た者は、動もすれば逃亡して困つたが、べ

ンキ屋親方の送つて来た兒童は少しも逃亡せぬ。これは妙だ、兒童にその譯を聞いて見る、逃けぬも道理。彼が兒童を送り出す時、之に對する訓誡が極めて徹底的である。曰く、「手前達は養育院の學校へ入つて、しつかり勉強して立派な人間になりネー。俺が送つた奴が逃げ出したら最後、隅田川へ逆さまに抛り込んで土左衛門にして仕舞ふから、死んだと思つて辛棒しろ」と言渡す云ふことであつた。

彼の送り込んで来た十五人の兒童は、其の後井之頭學校から諸方面へ依托教育に附されて、各一人前の腕を備へた職人となり、獨立の生計を立てるこゝが出来た。これは全く彼のペンキ屋親方の賜である。こゝいはねばならぬ。若し彼の精神に愛の光明が輝くこゝなく、たゞ乞食小僧の頭をはつるこゝのみを能事として居たのなら、決して兒童を手許から離すこゝもなければ、従つて又多數の者にかゝる幸福を齎らすこゝもなかつたであらう。彼の如き貧窮の極に在りて、身に襤褸を着けながら精神既に光明に輝ける者は、誠に珍らしいと思ふ。

其の後に於ける彼の消息を詳かにするこゝを得ないのは、最も遺憾とする所である。私は是に就て少しく感想を述べて見たい。

私は折々寺院へ行くけれども、肝腎の如來は本堂の中に閉込めてあるから、光明を拜したとがない。誓願寺の堂前で、佛の光明を臭い汚ない中から拜んだ様な心持がするのである。金剛般若經に、佛が弟子の須菩提シュブツキに對つて、「意に於て云何、身相を以て如來を見るべきや否や」と問はれたれば、須菩提が「否なり世尊よ、身相を以て如來を見奉るべからず。何を以てなれば、如來所説の身相は身相にあらず」と答へる、佛は「凡そ有ゆる相は虚妄なり。若し諸相の相にあらざるを見れば、即ち如來を見るところを得べし」と言はれた。私は此の問答をペンキ屋親方の何方が一方を想起する、必ず他の一方を聯想するのが例になつて居る。

* * *

以上、最初にドン底生活の特殊點を指摘し、次には上流又は中流を稱する中より、ドン底に墜落せる各種の實例を挙げ、更にドン底社會の個人の事實を自白を

挙げた。此の事實は社會の大多數を占めて居るもので、世人は餘り心を留めぬ様であるが、實は甚だ恐るべきことである。個人的原因はドン底に陥るの結果を生じ、而も亦それが原因となり、個々に各種各様の結果を見るのみならず、社會を惑亂し、人世を滅亡に導きつゝあるのである。人皆智慧あり、技能あり、ドン底を希ふ者はない。皆失敗を避け成功を希ひ、苦境を去つて樂境を望み、經營活動の結果が、**弱**の**嘴**と**嘴**と違ひ、事爰に至つたのである。此の**嘴**と違ひは何に依るか、**嘴**と違ひなからしむるは可能か否か、是が所論の要點である。最後に挙げた曙光を認め、三人者と比較校量して、十分の考慮を費す所がなければ、以下の所論を徹底的に了解することが難いと思ふ。茲に大聲叱呼して讀者に之を要求する所以である。尙私は、第一編に於ては事實を事實として掲げたのみで、之に對する批判は避けることにしたが、讀者が第二編以下の所論と對比して考察されるならば、理論と事實の一致することに、恰も符節を合するが如きものがあるのを覺られるであらう。

第二編 貧の主因と富の主因

第一章 利己心から逆境へ

一 心理的原因が七割

病氣を治療するには、其の病原を確かめることが肝要である。例へば、突如發熱した場合、單に下熱劑を服用して、一時下熱劑の效果を見ることに出来ても、それが爲めに却て測らざる害を醸し、管に病の根治を困難ならしめるばかりでなく、更に病勢を重らせるやうな事がないことも限らない。故に先づ病原を究めずして藥劑を與ふる如きことは、名醫の最も慎むところとされてある。救貧問題も之れと一般、先づ**貧窮原因**を**明確**に**究め**ることに**根本的**の**要諦**であらねばならぬ。

救貧の道實に古來社會の大問題である。而も其の眞原因を討究することに於て未だ不十分なるものあるが爲めに、之れが救濟方法も動もすれば肯綮に當らぬものが多かつたやうに認められる。恰も醫師の診斷が不十分なるが爲めに、疾病根治の効驗が顯はれないのと同様である。

貧乏は物の缺乏を意味し、或る水準以下の不足不完全状態を言ひ表した語である。斯の廣義に従つて大別すれば、貧には凡そ四種類ある。一、不具や不治の疾患は生理上の貧である。二、無智無能は教育上の貧である。三、不義不徳は道徳上の貧である。四、衣食住の缺乏は經濟上の貧である。此の四種の貧は互に因果關係を有し、錯綜して社會に所謂貧窮現象を暴露するものであるが、今此の書に於て主として論究する所のものは、經濟上の貧である。

經濟上の貧に就て、その原因を内的と外的とに二大別するここが出来来る。内的原因とは吾等の精神上より生ずるもの、外的原因とは社會の缺陷より襲來する所のもので、前者は自ら招く所のものであるから、之を可抗的原因とも稱し、後

者は外部から來て止むを得ず陥つたものと見られ、之を不可抗的原因とも呼ばれて居る。而して一般的に兩者のうち孰れが多いかといふに、從來何れの調査に依つて見ても、不可抗的原因の方が半數強で、可抗的の方が、やゝ少いことになつて居る。

所が嚴密に檢べて見るに、所謂不可抗的のもの、中でも癡疾不具とか、稼人の死亡とか、無能力者にして依怙を失つた者とか、天災事變其の他止を得ざる原因に遭遇して貧窮に陥つたといふ如き、全く不可抗的のものを見做さるべきは、約三分の一に過ぎず、他の三分の二は、心理的に自ら招いたものと認められ得るのである。従つて之れは當然不可抗的原因中より除いて、可抗的原因の中に加ふべきものとなるので、さうするに、結局自ら招いたものが約七割を占めて居る。

即ち貧窮なるものは、自ら招く方が大多數であつて、外から來る方は却て少いといふ結論に到達する。私は此の前者を心理的貧窮原因と謂ひ、後者を社會的貧窮原因と謂ふのである。

凡そ社會現象は、大小をなく我々の心理が、周圍の事情と相關聯し相結合して顯はれるものであるから、苟も世態人事を観るに此の心理的方面を閑却しては、能く其の真相を明かにし得られるものでない。今貧窮原因を究めんとするに方り、主として之を心理的方面より觀察せんとする所以、亦ここに存するのである。

心理的原因は無形的、社會的原因是有形的である。無形的のものは他の視聽を惹かず、有形的のものは常に他の見聞に觸れ易い。視聽を惹かざるものは等閑に附せられ易く、見聞に入るものは囂々として世の言論に上る。貧窮の社會的原因が比較的精細に調べられてあるに拘らず、其の心理的原因に就て討究するもの幾も稀なるは、之れが爲めである。

併しながら、かの病の外科は比較的治療し易いが、内科は往々其の病原を誤診し、治療亦ただ困難で、動もすれば患者を死地に陥らしむるが如く、救貧問題に於ても、所謂内的原因を究むることの如何に重要なべきか、其の外的方面の比に

あらざること、以て知るべきである。

心理的原因は根幹の如く、社會的原因是技葉の如きもので、その枝葉を断ちて根幹を除くことは不可能であるが、根幹を除けば枝葉は共に倒るゝの理、明かに観るべきである。世の社會政策又は社會事業を稱するもの、中には、斯の枝葉を断つて根幹を除かんとする類のものはなからうか。如何に社會的原因に對して適當の處置を執ることも、心理的に起るものを等閑に附しては、唯是れ一時的對症療法に據りて病氣を根治することの不可能なること、何等擇ぶ所はない。斯の如き見地に基きて、私は主として心理的原因を指摘し、併せて徹底的に防貧致富の方法を論述する積りである。

二 利己主義が貧の母

99
貧窮原因の最も根本的なもの、しかも其の大部分を占むるものは、心理的缺陷に胚胎するこの着眼を基調とし、貧の徹底的征服を期するのが、本書に於ける

所論の核子である。而して其の心理とは何か。曰く利己心である。之れを具體的に言ひ顯はせば、

「自分の都合さへよければ他の者の事は構はない」

さいふ思想である。此の心理を以て社會に處する結果が即ち貧窮の状態に陥る眞原因だと言主張するのである。所が此の利己的心理が更に一步を進めて之に勇氣が加はるこ、

「自分の都合さへよければ他の者は押し倒しても構はない」

さいふことになる。是が即ち犯罪心理である。換言すれば利己主義の消極的なものが貧乏根性で利己主義の積極的なものが泥棒根性であると言ふことが出来よう。即ち貧窮程度のもものは利己的思想に於て勇氣の缺けたものである。

貧窮の自招的原因に屬するものは、他人の債務保證に基くもの、如き一二の特例を除きては、無論利己心より生じたものであるが、不可抗的原因に屬する者も、多くは身體又は社會的原因にのみ基づかずして、概ね利己心と關聯して此の

結果を齎したものである。例へば不可抗的原因に依り貧窮に陥りたりとする者も、多くは甚だ利己的である。是は貧窮に陥りし爲に利己的になつたものか、將た利己的なるが爲に貧窮に陥りしものか、疑の存する點であるが、此の眞相を究むるには、其の人が社會に對して如何なる行動を執り來りしかを知るこゝが肝要である。私が長い年月に亘りて此の點に注意し取調べた結果は、不可抗的原因に依りて貧窮に陥りしと告白する人も、元來利己の心事を以て總てのこゝを處置し來りしこゝは、自招的原因の告白者も殆ど撰ぶ所はない。勿論、悲境に陥りし爲に、其の固有の利己心が益極端となり、又元來利己心の濃厚なりし者も自己の好運に牽制されて、其の利己心が漸次緩和されるこゝのあるのは事實である。併し殆ど例外なく、利己心が貧窮の眞原因なるこゝは、敢て私の斷言して憚らない所である。

茲に天災事變の如き不可抗的原因の爲に、急轉して貧窮に陥つた者ありませんに、若しそれが心理的貧窮原因のない人ならば、其の窮境より脱出するの機は

早晚必ず来るものである。之れに反し、若し心理的に貧窮原因を備へて居る者であつたならば、其の境遇より免れ得ることは容易でないのみならず、老象の泥に溺るゝが如く、ますます暗黒の底へ沈みゆくであらう。然るに世の貧窮者は多くの場合に於て、自己の心理的原因に氣付かずして、外部から襲來したものとのみ信じ、周囲の人も多くは亦左様に認めて疑はぬ。實に錯誤の甚しいものと謂はねばならぬ。

凡そ世の中の不祥なる人爲的出來事は、十中七八までは、利己的處置と社會的境遇と相關聯して起るものであるが、それ等の總てが貧窮の原因たらざるものはない。如何なる人でも、不時の天災或は人爲的出來事の爲めに一時窮地に陥ることもあるが、人には親戚もあれば朋友もあつて、心の正しい人ならば、必ず其の場合見殺しにするものではない。然るに若し平素利己的にして他の迷惑を顧みない人であれば、一朝悲境に陥ることも、誰も之れを援護するものはなく、浮ぶ瀬もなきドン底に墮ちゆくより外はない。世の貧窮の大多數は斯の徑路を辿

るもので、其の眞原因は實に利己的觀念より來るものである。外的條件の如きはその副因たるに過ぎない。伊太利の大學教頭ガフハロ氏は、其の著「犯罪論」の中に次のやうに述べて居る。

僧正モロー氏は大慈惠院の創立者で、貧窮者を善良に導くことに盡した人であるが、彼は曰く、若し貧民に接近する時は、何人も是等の貧民は果して普通の精神を有するであらうかを疑ふのである。其の無感覺不廉直と生來の狎惡なる性質を有するところは、吾人種類の人間よりは、寧ろ獸類に近いと云うてよい。是等の貧窮民を正直なる感情に導くとは、全く不可能である。基督教の道德も、彼等の利益も、彼等の上に来るべき不幸の先見も、決して彼等の腕を押ゆることは出来ぬ。或る時期の間と雖も、彼等に善良なる性情を有せしむることは不可能である。彼等は吾人に全く異なる視官を有し、彼等の腦髓は或る通知の送達に不適當なる瑕瑾を有して居る。彼等は不潔なる情慾の刺戟を受くるに非ざれば、決して運動を爲さぬ。

此の説に依つて見るに、モロー氏も貧窮は心理的原因より來りしものと認め居るのである。氏は「彼等の腦髓は或通知の送達に不適當なる瑕瑾を有する」と云つて居る。其の意味は甚だ利己的にして善惡が分らず、これを教へても徹底せぬと云ふに在つて、其の貧窮原因の討究に於て私の見解と全く一致するものである。

併しモロー氏の説に就て一言するの必要を感じる。それは我國の貧民と歐米の貧民と其の性情の異なることである。氏は「性來の瘠惡なる性情を有することは、人間よりは寧ろ獸類に近い」と云ひ、「或る時期の間も之を善良に導くことは不可能である」と云うて居るが、我國の貧民は之と大いに異つて居る。唯根本的に了簡達をして居るだけのものであつて、普通の人より特に瘠惡なるものではない。能く之を導けば善良なる人と爲すことが出来る。歐洲の貧民は祖先傳來のものが多く、經濟上に貧富の溝渠の大なるものがあつて、貧人が富者となることは殆ど不可能で、我國に於ける勞働階級の者が一代にして富豪になるが

如きことは、絶對に存在せざる所である。従つて自然自暴自棄に陥る者も多く、之が爲めに貧民には瘠惡なる者が多いのである。米國の如きは新しい國であるから、經濟上貧富の組織の上に越ゆべからざる溝渠はないが、歐洲貧民の移住者が甚だ多いから、貧民窟の状態も歐洲に異なる所はない。現に生江孝之君の如きは、紐育へ貧民窟の視察に行きて、打倒され追剝をされた上に、人事不省に陥らしめられたる實例さへある。東倫敦の貧民窟は二百萬の人口があること云はれて居るが、我國の如きは、幸にして歐米の如く何十萬さか何百萬か云ふが如き大貧民窟はなく、又貧民窟が危険なき、云ふことは聞いたこともなく、何人が單獨で出入しても危険はないと信ずる。

貧窮に陥つた人に就て實地に調べて見るに、種々様々である。貧窮の家に生れて貧窮を免れぬ人もある。富家に生れた人もある。相當の教育を受けた人もある。中流の地位に居た人もある。或は名譽の地位に立つた人もある。稀には富豪として他の羨望の的となつた人もある。一々挙げれば千態萬様で

あるが、其の利己的精神の所有者たるに於ては萬人一様である。

貧窮の家に生れて、貧窮を免れぬのは遺傳又は境遇の然らしめる處にも云へるが、實は無教育と利己的行動の爲に、逆境に終始するものを見るのが至當である。富家に生れ相當の教育を受けた人ならば、世人に尊敬せらるべきが至當なるに、反つて落魄の窮境に陥り、果ては世の救助を受ける迄に至るのは、果して何故なるか。之を各方面より研究するに、矢張り彼等が抱持する利己心が主因となつて、貧窮に陥りたるものである。また資産家に生れたり、順境に養育された人は、社會の真相に徹底せず、幸福が却て災害の副因となるに至つたものである。生來順境に生長した人は、貧家に生れて千辛萬苦を経歴せる人に比すれば、社會的事情に暗く、資産は天然に備りたるが如き觀念を抱き、収入の道を知らずして、支出の道に通曉し、我儘は増長し、親戚知人の教訓忠言は耳に入らず、善友には遠ざかり、諂諛の悪友に親しみ、終には資産を蕩盡して親戚知人にも見放され、一般社會よりも驅逐せられて、遂に是に至るものが甚だ少くないのである。彼等は

親類縁者朋友知人良好ならず、社會の境遇善良ならずなき、云ふも、虚心に之を批判すれば、親類縁者の惡しきにもあらず、知人朋友の不良なるは、自ら之を選んだのである。社會も彼等を押しおさすのではない。畢竟彼等が抱懷せる利己主義が、恩義を省みず、徳誼を放擲し、良友を遠ざけ、悪友を選び、自ら進んで逆境に立つたのである。何れに就て之を見るも、其の墮落の趣は異れども、其の由て來る所は利己的精神が其の主因であつて、其の他のものは副因である。

三 共同貧乏法

107
試みに利己主義を標語とする一國ありと假定して考察するも妙ならん。國民は皆曰く、「利己は生存の大原則である。我等は此の利己の限りを盡して大に享樂を求むべきで、他人の迷惑なきを願慮する必要はない」と。大商人は曰く、「富を得るには、多人數の迷惑や困難を願慮して居ては不可能である。よろしく我が大資本を運轉して各種の物産の買占を斷行し、以て其の價格を釣り上げて

占賣をやるがよい」云。大に之を實行する。工業家は如何にして大利を博すべきかを研究して曰く、「大利を網せん」云。欲せば、人の利害を眼中に置いては到底目的を達するものではない。職工や使用人は我等の犠牲に心得、成るべく僅少の報酬を以て成るべく長時間を働かしめ、其の能率を擧ぐるに共に、経費を減少し、収益を倍增せしむべきである」云。而して之を實行する。職工は曰く、「我等は資本家の壓迫の下に驅使せられ、利益は悉く彼等に吸収せられ、衣食住すらも不十分の状態である。資本家は我等の敵である。須らく反抗して却て之を制御するの道を講ぜねばならぬ。之を行ふには團體の力を以て之に當るにある」云。罷業や怠業を實行して、其の分配を迫り賃金を競り上げる。地主は地代を釣り上げ、家主は家賃を引き上げ、資本に對する利子の歩合なきに拘泥する必要はない、取り得らるゝ限りに取上げるは我等の權利である」云。主張する。小賣商は同業者と一致協同して暴利を貪り、諸職人は組合同盟の下に賃銀を倍增し、地方の地主は如何にして小作料を高からしめん」云。思ひ、小作人は如何にして小作料

を低くからしめん」云。考へ、天下靡然として利に狂奔し、所謂一切對一切の闘争も云ふべき修羅場を現出するに至るであらう。

此の結果は果して如何なる状態を呈するであらうか、生産品の価格は暴騰し、生活費は倍加し、輸出は減少し、低價なる外國品の輸入は激増し、各種事業の經營は困難となり、生産の制限や協同販賣の方策も其の効なく、失業者は増加し、倒産者は頻出し、自暴自棄の輩は至る所に起り、残忍の慘事は續出するであらう。是が利己主義最盛時代に於ける眞狀である。依つて之を名づけて、共同貧乏法に唱へる。

米國より歸來せる知人の語る所に依れば、大戦中に於ては、米國にても我國と同じく、物價は非常に騰貴した。一般の生産業も隆盛を極め、職工の賃銀、従業員報酬も亦之に伴れて騰貴した。然るに一朝講和となり、各種の製造工業は頓に大打撃を蒙り、各實業社會も著しき不況に陥り、生産品の價格は急轉直下の勢で暴落を告げた。此の時に當つて、一般の小賣商は、競うて物價を引き下げ

て賣り出した。それ迄社會の半面には、戦争が止めば少しは物價も下落するであらうと豫想して、必要品の購入を耐へ忍んで居た者も多くあつたので、スワ物價下落を聞くや、我もくゞり買入を爲した。是に於て一般小賣商は、一時は勿論損失を免れなかつたであらうが、其の賣行に於ては戦時中より遙かに好況を呈した。彼等は其の資本を回收流用して、安くなつた物貨を仕入れては賣出したので、物價暴落に依つて大小實業者の倒産を見るやうな事もなく、案外平穩に落ちつた。然るに我國に歸つて來て見るに、事業の打撃は米國のそれと同様で萎靡不振、生産品大下落の状態も異なる所はない。此の際に處して日本の小賣品の多くは、戦時中よりも却て騰貴したるが如き觀があり、之れが爲めに一般貨物の捌け方も甚だ悪しく、金融界は大なる警戒を要する状況にあつて、米國の實狀に比して甚しい相違である。聞く所によれば、小賣業者は各組合の團體を堅くし、以て商品の高價を維持せんとする結果、に至つたのだといふ。勿論他にも經濟上の原因はいくらかあらうが、併し彼等の利己的なる團結の力は確かに

其の一因たるに相違ない。之を米國の商業界に比すれば、其の巧拙の差、我の彼に及ばざるに甚だ遠く、痛歎に堪へない所である。

併しながら深く反省し戒めねばならぬ點は、此の小賣業者の如き態度は、結局大なる利を獲んを欲して、却て大なる不利に陥るに似ふことである。何となれば、生産業不振の爲め原價の低落を見たのに、小賣業者が結束して之れを喰ひ止めたことすれば、彼等は當然一時は暴利を獨占し得られるであらう。而もそれが爲めに、一般の社會生活に大なる影響を及ぼして、例へば賃銀等も依然低下するを得ず、製品原價も外國品に比して高價となり、爲めに優良にして安價なる外國品は盛に輸入され、之を反比例的に、國産品の輸出は漸次減少を見るに至り、一面労働者の失業を簇出せしめつゝあるといふ如き有様で、結局經濟狀態を不自然に導き、自己も亦不利益を招くと共に、國家社會の上にも甚大なる害毒を流すに至るであらう云々。

是等は、社會の利己的結束の行爲が、一般社會を困窮に陥らしむる有力なる動

力たるもので、結局彼當業者自身が大なる損害を被ることを免れず、實に不合理なる組織的行動であること斷言するを憚らぬ。此の利己主義を共同團結の力を以て實行すれば、能く各種の難問題を解決し、利益を壟斷し得らるゝ如くに思ふのは、其の謬見も亦甚しいものである。鴉は百羽集めても鷲にはならぬごまは個人に於ける貧困墮落の原因が、團體的強力に訴ふればごまで、變化向上すべき道理がない。それは猶一羽の鴉が百羽群を成して、愈其の黒きを増すが如き醜態を示すのみである。如何なる問題にしても、利己的主張を團體的結束の勢力を以て貫徹せんごまするものであるならば、斷じて正しいものごまは謂へない。利己的精神が個人的には貧窮原因であるも、團體的勢力を以てすれば、致富の正道であるが如き道理は決して有り得ない。

要するに、貧窮其の他社會の缺陷なるものは、利己的精神が其の根本で、此の精神を基調とする背天的行爲の結果である。故に世の貧窮若しくは社會の缺陷を除かんごま欲せば、先づ此の根本的精神より改むるの徹底的自覺がなくては、到

底其の目的を達し得られない。如上の利己的團體の結束の如きは、畢竟自他相率ゐて愈窮地に陥る共同貧乏法であるごまを繰返して警告する。茲には經濟界の説明を試みんごました趣意ではない。總て利己的精神より出發する行動は、個人的にも團體的にも、毫も福利を招來するものでないごまを高唱せんが爲めに、偶經濟問題に觸れた點があるに過ぎないのである。

四 貧窮と犯罪

貧窮民ご犯罪人ごは、全く其の方向を異にせるもの、如く見えるが、實は五十歩百歩の道程の差あるのみである。その結果から見れば、前者は社會の表面より驅逐せられて、ドン底に沈淪し、後者は國家の法律に拘束されて、社會外に呻吟するものである。而も其の抱持する所の心理に至つては、兩者其の揆を一にして居る。

東京市養育院ご、巢鴨監獄ごは、偶然にも之が説明を爲すが如き觀を呈して居

る。東京市養育院は全國最大の公設救濟所、巢鴨監獄は我國の模範的監獄と稱せられて居る。此の兩者が地理の關係に於て、犯罪人と貧窮民との精神的關係を雄辯に語りつゝある事實は、確かに一種の興味を惹かしめるものである。養育院は千餘人の窮民を收容して小石川大塚辻町に在り、同所は厩橋より大塚終點に至る、約二里に亘る直線の大通りに添うて、辻町より東に門を入れればそれである。巢鴨監獄は、辻町の大通りより小路を直線に約十町にして、西に曲れば其處に在る。養育院と監獄は甚だ近い。公共の場所としてお隣り合せの位置にある。

人世の大道は自利々他の廣い正しい堂々たる道である。此の大道を歩んだのみでは養育院に入ることは出来ぬ。大道から岐かれて我利の徑路を辿るのである。監獄も此の大道のみ歩んで居ては行くことが出来ぬ。我利的小道を歩んだ上に、他を倒し他を傷ける曲り道を行かねば達し得られぬ。養育院も監獄も均しく利己道を曲るのであつて、唯異なる點は入院者の方は他を傷けるまで

には至らぬが、入監者の方は利己の爲に他を傷害した者で、誠に近い隣り合せである。されば利己主義に智勇の加はる者は犯罪人となり、利己主義に智勇を缺く者は貧窮者となることも見られる。勿論是は何れも多數に就て云ふのであつて、監獄に入る者も、稀には忠信孝悌の爲に誤つて法に觸れた者もあり、養育院に入る者にも稀には不可抗的不幸に遭遇した者もある。

由來利己觀念の強烈な人は、自他の差別觀も自ら烈しい爲に、自分を抓つて人の痛さを知るなき、いふ思ひ遣りの心がないのみならず、一面自己の心の他に通ずるなきのことは少しも考へず、自分の心は城廓の如くに思ひ、我心に於て如何なる思想を抱き、如何なる惡念妄慮を逞うするも、自分の外には知るものはない、私の顔や貌は人之れを知り得るも、私の心は鼻の嗅ぐべきにもあらず、耳の聞くべきにもあらず、之を口にし之を行爲に顯さざる限りは、人の窺ひ知る所ではないと妄信して居る。爰に於て言行一致せず、面従腹背の行爲を敢へてする。實に人を蔑如し、因果を無視し、天を畏れざるものである。貧に陥る者も、囚獄に

墮ちる者も、此の點までは同徑路を辿る者である。斯の如くにして、自利を漁りて他を省みざる者に對しては、他人は之を避けんを努むるが故に、いつの間にか社會外に驅逐せらるゝ状態となる。是が貧窮民である。尙ほ勇を鼓し智を運らし、進んで窃盜強盜姦淫詐僞傷害等至らざるなきは犯罪者である。

我内地の犯罪者數、大正七年中入監者十萬七千七十五人、一日平均在監者五萬七千四百四人である。是等の惡事醜行の大部分は、白日公然行ふ所のものではない。多くは秘中暗裏に行はれたものであるが、天網恢々疎にして漏らさず、終に悉く露顯し、法廷に立ち獄囚となつたものである。犯罪は唯捜査に依りてのみ露現せらるゝものと思惟するは正鵠を得たものではない。本來萬物同體の眞理の存するに依りて、人の善惡邪正は、自然に之を感知するの妙用が行はれて居るのである。例せば、此の天理を體得し大我に安住せる君子は、一見人の善惡邪正を識別するの鑑識を有するもので、謂ゆる佛の他心通なるものは是である。孔子は「其の以す所を見、其の由る所を視、其の安んずる所を察す、人安ぞ庾さんや」

と云はれ、孟子は「其の言を聽き、其の眸子を見る時は、人焉ぞ庾さんや」と言つた。

自己の精神状態は、他に對して寸毫も庾し得らるゝものではない。其の心忠恕に富みたる人に逢へば、自然に心に爽快を感じ、自我觀の強い人に逢へば、自ら精神に不快を感じるのも、此の理に由るのである。又諺に「問ふに落ちず語るに落ちる」と云ふのも、此の半面の事實を言顯はしたものである。自己の心は日常の言語舉動に發露しつゝ、あるもので、之を覆ひ之を庾すことは不可能である。故に犯罪は搜索の方法に依りて、其の露顯を早め得るが、畢竟斯くなるべき理數に依りて然るもの歸結されるのである。善事も亦之と同様で、如何に秘するもつひに顯はれざることはない。「陰德に陽報あり」とは、此の理數より來る事實である。是を名づけて或は神佛の明鑑と稱し、或は神の攝理と云ひ、或は天命の歸着と云ひ、或は因果の應報と云ふのである。

犯罪を爲す者は多くは伶俐で一種特異の能力を有し、自ら其の智を恃み他を愚鈍視して居るから、能く大膽不敵の行動を執行し得るのである。人並の思慮

分別では詐偽・窃盜なきは行れるものではない。特に財貨なき家内の人すら容易に知り得ざる場所に、他の手を觸るゝ能はざる方法を用ひて保管せられてあつても、窃盜なきは一考直ちに其の所在を知り、之に忍び入りて難なく之を取り出す。此の方面に於ける其の智慮の優秀なる、其の技術の巧妙なる、遙かに尋常人に超越して居る。日々に使用せる文具・手道具類の如きものも、其の置き所を失念して搜索に苦しむが如きは、常人に有り勝のこゝであるが、彼等は斯る粗放なるものではない。又勇斷果決は人世に於ける大切の一徳であるが、人の進退に關するこゝなき之を決斷するに方り、一刀兩斷の處置を採り得ずして苦心慘憺たるものあるは、人の頭立たる者に常に見る所であるが、強盜に至りては、他の手足を斷ち生命を奪ふこゝすら平然として斷行する。實に其の勇斷果決、驚歎に値するものがある。

是は素より莊子の寓言であるが、昔大盜たる盜跖の部下が親方跖に向つて「盜にも亦道があるか」と問ふたら、跖の答に「何くに適くして道がなくてならうか、

室中の物を察して知るは聖である。眞つ先に進み入るは勇である。後れて出て來るは義である。不可不可を知るは智である。分配の均しきは仁である。此の五の道が備はらねば、多くの部下を有する大盜たるを得ぬ」と。曾て某教誨師の談に依れば、「巢鴨監獄に古今無類の窃盜犯が入監した。彼は一枚の純日本紙あれば、如何なる錠前にても紙捻をして之を開くの妙技を備へて居る」と聞いたので、或る時彼に最も巧妙に作られたる一個の錠前を一枚の純日本紙を與へて、之を試みた所が、彼は其の紙を捻りて難なく其の錠前を開けたので、一同其の智力の妙技に吃驚した」と云ふこゝであつた。斯の如き堂々智仁勇等の徳を備へたる者も、斯の如き優れた技倆を有する者も、其の精神の基礎を闇黒面に置くときは、忽ち法網に觸れて獄囚となり果てるを免れないのである。

以上貧窮も犯罪も、多數は利己的精神より生ずるものであるこゝを論證したのであるが、此の見地に立つて社會を見渡せば、貧窮的精神や犯罪的精神を以て、富を得んと努力し、而も其の精神に依りて實際に富を爲して居る者も随分多く

あらう。精神的貧窮者が社會を横行したり、精神的犯罪者が紳士を氣取つて闊歩したりして居るのが可なりあるであらう。之に反し、富者にして公利公益に心身を盡すが爲に、資産を蕩盡して貧に陥つたり、國家社會の爲に心身を委ねて、身命を擲つべき場合に遭遇するこゝもあり、或は身命を擲ち、或は窮境に迫りたる實例も多いではないか云ふ疑問が起るであらう。是は社會が複雑であるから、各種の場合に於て種々の變態を呈するのである。一概に論斷し難いけれども、茲に最も明なる事實は、私が取扱つた貧民中で、利己的行動に依りて貧窮に陥つた實例は、其の大多數を數へたが、常に利他的誠意の行動に依りて、貧窮に陥つた者は、殆ど一人も見ることが出來なかつたのみならず、多數の不可抗的原因に依りて貧窮に陥つた人でも、其等の人の取りし始終の行動は、殆ど利己的原因に依りて貧窮に陥つた者と擇ぶ所のない、利己的なる人々であること、を確かめ得たのである。されば貧窮の多數は、利己的行動から生ずるものとの斷案は愈動かすべからざるものなるのである。

又た一面利他的行爲に依りて貧困に陥つたり、國家社會の爲に身命を擲つたり、窮地に迫つたりするものは、之を精神的に見れば、外面には如何に窮地でも、逆境でも、内面的には悠々たる樂天地に安住して居る者である。此の安住は尊い精神生活で、既に宗教的の境地に涉るものであるから、茲には之を論ずること、を避ける。

五 貧の主因と副因

上來貧窮も犯罪も、その精神が主因であつて、他の各種の原因は副因であることを主張して來た。是は自分が三十年間の實地經驗より得來れる所を表明したのである。所が茲に私の所論を裏切るかの如き不思議な現象があるので、之に就て一應辯明して置かねばならぬ。

東京市養育院に於ける三十年間の經驗に徴するに、物價が騰貴し始めるに、入院者が徐々に減少する。物價騰貴の頂上は毎も入院者減少の頂上である。之

と正反對に、物價が下落し始めるに、入院者は漸次増加する。物價低落の最底は、入院者増加の頂點である。恰も物價騰貴の頂點は、入院者増減の分水嶺である。一寸考へた所では、正反對の様で、物價が騰貴すれば、窮民は増加し、下落すれば、少くなるであらうと思はるゝが、事實は此の通りである。是は世の景氣の良否に依るので、景氣が良ければ貨物が捌ける、人を要する、物價が騰貴する、賃銀も騰貴し、職業も増加する、生活難も少くなるに云ふ譯である。景氣が悪くなれば、貨物が停滯する、人手が不用になる、物價が下落する、賃銀も低落する、失職者も多くなる、生活が困難になる、自然貧窮民が増加するわけである。

是は養育院に入來る窮民のみではない。犯罪人の數も亦之と同じ徑路を辿つて其の増減を示して居ることは、統計の明かに證明する所である。是を以て、貧窮民や犯罪人は、世の景氣不景氣に依つて増減するもので、精神の正不正に由つて來るものでない證據を認める者が、世には多くある様だが、其は皮相の見で、根本的に誤謬を免れないものである。

世の中には、事實精神的の犯罪者や、貧窮民が多いのであるが、世間の景氣良好なる間は、其の發芽を遮られて居る。即ち其の主因は帶有して居ても、未だ副因が迫らなかつたまでである。仔細に點檢し來らば、社會には、精神的に貧窮原因や犯罪原因を備へて居る所の百萬長者もあれば、或は精神的富裕者なる貧民もある。たゞ其の主因ばかりで副因が備はらなければ、貧的長者が貧窮にも陥らず、未だ富的貧民が富豪にもならぬ。譬へば、種子はあつても、之を地に蒔き雨露水土や温熱空氣の縁を假らねば、發芽成長せぬと同じである。

謂ゆる貧窮民や犯罪人なるものは、元其の主因を帶有して居る所へ、世の不景氣といふ副因に迫られて、遂に或は入院者たり、或は入監者たるに至つたのに外ならぬ。

次に今一つ貧窮の眞原因に就て、動もすれば世人の眼を誤らしむるものは、統計の上に表はるゝ數字である。統計は個々の事實に基いた數字を彙類集合して、或る事項の大數觀察を爲すものである。併しながら數字だけが、よく事實の

自招的原因を認めたるもの

種類	種類		計	種類	種類		計
	男	女			男	女	
商業事業ノ失敗	五七一	一四	五八五	放蕩	一一五	一〇	一二五
轉業	一〇	二	一二	飲酒	四七	五	五二
投機	一一	〇	一一	賭博	九	一	一〇
怠惰及無教育	一二三	五	一二七	借財又ハ他人ノ債務保證	五	〇	五
不可抗的原因を認めたるもの				計	八九〇	三七	九二七
失業	三七	一	三八	家族過多	一八〇	四	一八四
技術拙劣及無能	二二三	一三	二二六	家族ノ疾病死亡	一二八	六	一三四
病氣又ハ虚弱	二九九	一五	三二四	扶養者ノ死亡	六三	九〇	一五三
扶養者逃亡又ハ離婚	五	六	一一	老衰	四三	一	四四

妻ノ家計拙劣	九	〇	九	不時災難	一九〇	九	一九九
勞銀ノ低廉	一二四	七	一三一	以上列記外事由	一八〇	一一	一九一
物價ノ騰貴	五七	三	六〇	理由ナキモノ	七一	〇	七一
勞働需要ノ缺乏	一一八	一	一二九	計	一、七二七	一六八一	一、八八四

養育院の調査三千四百九十三人

自招的原因	一、五三六	百分比	四三、九
不可抗的原因	一、九五七	同	五六、一
内務省調査三千四百十七戸の内戸主			
自招的原因	九二七	百分比	三〇、四
不可抗的原因	一、八五八	同	六一、〇
不詳	二六二	同	八、六

兩統計共に自招的の者少く、不可抗的の者多數を占めて居る。其の少い方の自招的原因のみは、之を精神的錯誤より生ずるものを見るのは不當でないに

ても却つて多數を占めて居る不可抗的原因に至りては、其の主因を精神的に在りとするは當を得たるものに非ず。其の非難が生ずるのである。是は一應正當の非難である。さりながら此の統計に表はるゝものは、本人の告白から來たもので、これのみに依りて、眞原因を究め得たりとするは皮相の見である。

元來貧窮調査に云ふ事は難事中の難事である。普通利己的でない人ならば、其の心が公平であるから、他が悪いか、自己の誤りかは分つて居る。何となれば常に良心を以て自己を制し、心理が放縱でないから、自己の悪いことは努めて改めつゝある。改め得ぬまでも、改めたいと云ふ希望を持つて居る。故に其の言ふ所は比較的正しいのであるが、貧窮に陥る人は利己的である。利己的の人は本來自己を見ることを誤つて居るから、他を見ることも誤つて居る。自己が悪いことでも、自己が悪いことは思はぬ。他が悪い、社會が悪い、境遇が悪ひ、運が悪いと云ふ風に、善い方のことは自己の方へ引付け、自己の都合の悪いことは外にあると誤想して、常に他に怨を懷いて居るから、其の自白なるものが、甚だ信用の出

來難いのである。尤も社會のドン底生活の條下にも記したる如く、窮民の周圍は總て非社會的である。利己的の者同士の唾み合ひであるから、知らず識らず之に化せらるゝのであらうが、元來利己的の性情が、徐々に斯る方面に彼自らを追込むのである。利己的の人は自己の非を省みることを知らず、その非を覆うて之を飾り、他に之を嫁するは殆ど通有的である。此の人達の間にかかる紛議紛擾の九分九厘までは、過失の塗り合ひと利己の争であることを知らば、此の見解の不當ならざるを知るであらう。世人が片言は其の眞相を知る能はずと云ふは、之を證明するものである。是等の人達は、其の貧窮徑路に於て過誤を他に嫁するのみでなく、如何なる場合に於ても、過誤は總て之を他に嫁せんと努むること、殆ど其の習性とも云ふべきである。

習性は早く幼児の頃から芽生えるもので、家庭教育上最も大切なことであるが、一例をいへば、幼児が過つて柱や板に頭を打つけて泣き叫ぶ場合、父母や兄弟は直に柱や板を打つて敵打の意思を示し、それに依つて幼児を慰め、其の號泣を

止めんとする。柱や板こそ好い迷惑である。家庭教育なき露ほごも念頭にな
い彼等社會には、此の例は到る處に見ることであるが、無情物に對してすら斯か
る過つた教育を幼児の頭に植付ける。若し我が子が隣家の子に打たれて泣い
て家に歸りでもしようものなら、其の事の善惡邪正は問ふ邊なく、直に復讐を教
へるであらう。子ごもの喧嘩に親が出るのは、彼等社會には殆ど通有的な著例
である。幼時より斯くの如き教養を受けて育つた者が、極めて無反省で、極めて
主我的で、凡ての場合に輕々に罪を他に嫁して恬然たるは、怪しむに足らぬ自然
の成行である。

試みに彼等に向て、其の事業失敗の原因を聞けば、彼等は失敗の罪を場所に嫁
して、場所の不適當なりしこゝを鳴らす、或は之を天に嫁して運が悪かつたこゝ唱
へ、或は之を時に嫁して時機の不可なりしを説き、或は之を業そのものに嫁して、
其の業務の不適合なりしを稱するなき、之を經營せる精神要素に大なる非違あ
るこゝや、其の智の足らざるを知らざる者滔々皆是である。彼等は單に虚言を

弄するのではない。利己的の迷ひ、幼年よりの習性に依りて、眞に斯の如く信じ
て居るのである、根本的に其の所見を誤つて居るのである。己れの非を知るは、
既に改悛の道程に就きつゝある者である。如何なる人も自己の非違を認めず
して、之を改め得るものはない。彼等は自己の非違を認識する能はざる者であ
るから、つひに之を改むる能はざる人々である。故に彼等の告白は甚だ信用に
價せざるものと謂はねばならぬ。

尙一二の例を挙げんに、内務省の調査に係る者は最貧民と認めざる者を選んだ
もので、養育院の收容者も殆ど兄たり難く弟たり難き人々である。然るに内務
省の調査には、貧窮原因は飲酒より來れるを告白したる者が、三千四十七人中五
十二人で、百人中僅かに一人七分に過ぎぬ。養育院收容者は、三千四百九十三人
中、自ら飲酒に依りて貧窮に陥りたりと告白したる者、三百五十三人で、百人中七
人三分に當る。此の數すらも大に疑の存する所である。何となれば收容者の
八割は飲酒家である、中には豪飲家も多い。唯自ら飲酒が貧窮原因なりと告白

せずして、他の原因を告白するが故に、主因として列記せられないものに過ぎぬ。之れに依りて考へれば、百人中一人七分は餘りに小數の疑なきを得ぬ。又商業又は事業の失敗は、内務省調査の分には三千四百七十七人中五百八十五人、即ち百人中十九人餘なるに、養育院の分は三千四百九十三人中百廿一人、即ち百人中僅かに三分四厘に過ぎぬ。内務省調査の分に飲酒の原因の甚だ少い云ふことも、商業事業の失敗が餘りに多い云ふことも、怪しむべき事實である。飲酒が貧窮原因といへば、誰が聞いても自業自得と認めらる。商業事業の失敗は止むを得ざるもの、様に聞えて幾分かは品も良い。氣の毒に感ずることも自然深い譯である。内務省の調査を聞いて、何物かを期待する様な意思から、斯る告白が多いのではあるまいか。疑へば疑はる、理由がある。是等の事實に依るも、彼等の告白は、大切な原因を他に嫁するの悪習性が、驚くべき分量を占めて居るここを見逃がすわけにゆかぬ。

養育院に收容する所の人は、多くは病者又は虚弱である。病氣と虚弱を合

すれば三千四百十三人中千二十八人、即ち三分一弱を數へるのであるが、彼等は貧窮原因を病氣又は虚弱に依るとして、他の原因を告白せざるが故に、之のみを記入されたものである。病氣虚弱は入院の近因たるには相違ないが、是が悉く貧窮の遠因であるとは信ぜられぬ。併しながら之を告白せざるが故に、止むを得ず之を其の原因として記入したるに過ぎぬ。是等の事實に依るも、彼等の告白は信用に價せざることは明かである。若し彼等の告白に依らずして、其の言行に依つて見るならば、私の言の誤りなきを知るであらう。即ち問ふに依らずして語るに依り、聞くに依らずして見るに依るのである。

私は多年彼等の言行の實地に就て之を驗し、既に精神的錯誤に陥つて居る者が、偶副因の襲來に遭遇して再び起つ能はざるの窮境に陥りたる所以を深く感じたのである。是に依て之を觀れば、此の統計は前提既に誤りあれば、其の結論に誤謬あるは勿論のこゝである。故に是等の統計の大部分は、精神的誤謬即ち利己心を主たるものとし、其の副因として各種の事項を結び付くべきものであ

る。

救世軍のウィリヤム、ブース大將が「貧民救助の一大要件は、物質的救助を與ふるに同時に、宗教的信念を與ふるにあらざれば、之を救助し得るものに非ず」と説かれたのは、誠に同感を禁ずる能はざる所である。我等の所論を非難する者は、「貧民は物質の窮乏に泣ける可憐の者である。之を自業自得の所業なりとするは不仁の甚しきものである」と。私は之に答へて曰く、「私は仁にもあらず、不仁にもあらず、唯良醫の如く先づ診断を確實にして、然る後に適藥を與へんことを欲するのみである」と。

第二章 不合理なる利己主義

一 利己主義の學說と事實

天に向つて唾するも、唾は天に至らずして、遠つて己れの面上に落ち來り、風に逆つて塵を揚ぐれば、塵は彼方に至らずして、却て我身を汚す。云ふ意味の譬喩

が佛説に見えて居るが、これは此の儘以て利己主義を評するに該當の喩へである。自分の利益幸福のみに専念し、毫も他を顧みぬといふ利己主義が、結局自己の大不利、大不幸を招來するといふ結論に到達する。自利を期して、不利を招く、利己主義畢竟自損主義に外ならぬのである。

利己主義は、之を個人が實行すれば貧窮の結果を生じ、之れを團體の力に依りて實行すれば所期の希望と相反して、其の及ぶところ、自他を損し社會を毒するところ甚大なるものあり、之を國民として實行すれば、對内的にも對外的にも信望を失却し、國力を衰耗するところ甚しいものがあることは、既に論説した通りである。

今日に於ては、主義學說として謂ゆる利己主義なるものを唱道するものはない。一部未熟なる文藝家、淺薄なる思想家が、小我主義に依り、近視眼的に利己説を主張する位が關の山である。堂々たる一家の説として耳を傾けしむるに足るものは殆どないやうである。學說としては現代に於て之を見ないが、古代に

於ては、東西洋ともに利己主義の標榜者を出して居る。而して事實上に於ては、時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、人間の大半は利己主義の信者であり、實行者である。ここは、悲しむべく憐むべきことであるが、遺憾ながらこれを肯定せざるを得ぬ所である。

此の利己的心理が各方面に據頭して、社會に暗黒の影を投じ、共同生活の脅威を爲しつゝ、あるのは、歎すべき状態で、下水にも、河川にも、電車汽車にも、道路交通の上にも、皆然らざるはない。下水や河川には、不用品や塵埃を投げ込んである。電車に乗つて見れば、二人前の座席を横領したり、釣革二本を占領して譲らぬ者もある。稀には込み合の中で、座席を占めながら釣革を捕へて居る偉丈夫すらある。中の方は空いて居ても、入口で押し合ひ、車掌の注意には耳も假さぬ。品川で急行列車に乗るに、東京驛から毛布を敷き込んで二三人分の座席を占領し、狸寝入りをして居る者もある。道路の左側を歩いて居る者が幾割あらうか。「借る時の地藏顔返す時の閻魔顔」は、何事を語るものであらうか。不義理や不人

情は至る所に充満して居る。斯ることを數へ來れば、却つてこれが現代の社會に於ける過半の事實かも知れない。

是等は皆自分の都合のみ考へて、人の迷惑は毫も顧みない云ふ連中であるが、中には更に自分さへよければ、他人は押し倒してもよい云ふ輩も随分少くない。智識階級の方面で、而も政治社會又は公共團體に於ける代表者の地位に在りて、社會の模範となるべき者の中から、頻々として利己的犯罪者を出したり、或は利己的排擠が行はれたりすることがある。智識階級既に斯の如くであるから、無智識階級の如きは其の影響を受けて、唯利を争ふを以て人世の一大事の如く考へ、滔々相率ゐて貧道を辿り、自から之を覺えざるの有様である。

中には此の利己主義を以て、歐米の個人主義を思考して居る者すらある。誤りも亦甚しいものである。元來、個人主義なるものは、國家社會の一員たる個人の完全なる權利義務を認めて、以て個人の完全を期し、延て國家社會の完全なる發達を圖るのが其の主義である。然るに利己主義は非社會的、非國家的で、人類

の共同生活上其の存在すら許容すべからざるものである。此の兩者は實に天地霄壤の差あることを峻別し、處世の道を誤つてはならぬ。

利己主義は、一面に於ては物質的享樂主義であり利那的本能満足主義である。彼等の標語を挙げ來れば、曰く、「若い時は二度ない」。曰く、「死んだらさうする」。曰く、「美味しい物は宵に食へ」。曰く、「宵越しの金は持たぬ」。曰く、「二寸先は暗の世」。曰く、「背に腹は代へられぬ」。曰く、「運は天に在り、牡丹餅は棚に在り」。曰く、「果報は寝て待て」。大凡そ此の類で、利己享樂の外に目的なく、射利射倖に餓鬼の如くなるか、將た怠惰遊蕩に夢の如く消光するかで、結局貧窮と犯罪の二途に急ぎつゝあるものである。

二 利己説の三主唱者

今日利己主義の學說理論の唱道者はないにしても、實際に於て社會に利己主義宗の信者が多いとすれば、古代に於ける此の主義の代表的學說を茲に解剖し、

利己主義の結局不利なる所以を説明して、斯の多數の信者を改宗せしむる必要の急なるを覺ゆるのである。

歐洲に於ては、近世哲學者中に自利説を主張した者があるが、その主とする所は、社會文化發達の基は、人の欲望に發生するものであることを説いたので、茲に謂ふ所の利己説とは趣を異にして居る。西洋に於ける古代の利己主義として、エピクロースを以て代表的のものとし、支那に於ては楊朱、印度に於てはチャールワカが其の著名なる主唱者で、此の三者は學說を以て一家を成し、一時社會に相當の勢力を張つたのである。

エピクロースは、紀元前三百四十二年の生れで、七十一歳で死んで居る。其の説は、紀元後三百年頃まで繼續したといふから、凡そ五百餘年間、其の學說が行はれたものが見える。彼の人世觀の大要を挙げるに、次のやうなものである。

物理上から見て神怪不思議のあるべき筈もなく、人は五官以上の存在を認める必要はない。假令神はありとしましても、それは人よりも精微なる不死のもの

こ云ふだけであつて、神は吾人の世界を省みるものではないから、吾人は彼を恐れたり彼を拜したりするの要はない。

個人は各獨立の者で、自家の快樂を得るこそが畢生の目的である。快樂の外には善なるものもなければ、惡なるものもない。されど吾人は眼前の快樂のみを見るべきではない。或る快樂は却て多くの苦痛を招くから、能く較量選擇せねばならぬ。この選擇は知見である。知見は徳の根本であつて、種々の徳目は知見が種々の場合に應じて働けるものに外ならぬ。

快樂は欲望を充す働きに依つて得らるゝものもあるも、是には苦痛が隨うて來る。苦痛なくして安靜なる状態に於て得らるゝ快樂がある。是は欲望を燃さず、心を騒がさずして得られる。即ち寡欲にして足るこそを知るこそである。

壽命も執着すべきものではない。死を恐るゝは迷である。我の生きて居る内は死は來らぬ。死すれば我は居らぬ。我の死は到底相逢ふものではない。

い。社會は、人類が危難を避け、各自平安に生活を營む爲めに組織せるもの、即ち人類が自利を計る考から造り出せるものに外ならぬ。

賢者は成るべく國務に與りて、煩累を蒙ることを爲すべきものでない。婚姻の如きも係累を多くし、苦痛を増すの恐れがあるから、成るたけ之を避くるがよい云々。

楊朱は支那に於て孟子の前に出た利己主義の唱道者である。孟子が墨氏と並べて甚しく之を攻撃したのを見ても、其の利己説の瀰蔓を察し得られる。今日支那に利己主義の蔓延せるも、其の源遠くして深きを想像するに餘りがある。楊朱の人世觀の大要に曰く、

人間生れて百年生きて居る者は千人に一人あるかないかである。偶百年生きた者があつたとしても、生れだてから、西も東も分らぬ内、老耄した間が、さつと半ばであるから、正味五十餘年だ。其の中から夜の睡眠や晝間で茫然して居る時間が其の半ばを占て居るから、残り僅かに廿五年。其の中に病氣も

ある、哀しいこと、苦しいこと、憂いこと、懼いことが其の半ばであるから、正味は十餘年ではないか。百年生きてすら、こんな淺間しい人間だ。五十六で死ぬとすれば、正味はたゞの五六年か七八年位人間らしく生きて居る譯だ。況や二十や三十で死ぬとしたら、ホンのチヨンの間である。

現世が斯る淺間しいものであるとしても、未來にでも靈魂が残ると思すれば、まだしもであるが、そんなことは一切ない。未來の世界があるなご、は迷信だ。本來萬物異つたものは生であつて、同じものは死である。生きて居る内には、賢人もあれば、愚人もある。貴人もあれば、賤しい者もある。死ぬれば臭骸の外には何も無い、消滅だ。十年でも死ぬれば、百年でも死ぬ。聖人も死し、愚人も死ぬ。一人として長生する者はない。生きて居れば堯舜でも、死んでしまへば臭骸だ。生きて居れば桀紂でも、死んでしまへば臭骸だ。賢愚長幼皆同じことである。

這般馬鹿けた世の中に長命は無用だ。長生しやうと思つたところが出来る

ものでもない。されば人は性慾の欲するがまゝ、大いに快樂を盡すがよい。是が人間の本分だ。

生には遭ひがたく、死には及び易い、遭ひ難き生を以て及び易い死を待つて、ぐづぐづ考へては居れんではないか。禮儀正しく重々しく、人に誇つてえらがつて見たり、性情を矯め忍んで、名譽を求めらるなごは愚の骨頂だ。夫よりも死んだ方が優しである。何でも人間は一生愉快を盡し、出来るだけ五官の樂しみを極めるのが本式だ。さりながら困つたことには、腹が膨れては、食ふことも飲むことも思ふまゝにはゆかぬ。力が憊れては、情慾を肆にすることもならぬ。名譽もいらぬ。長命もいらぬ。唯一途に快樂を盡すがよい。

大きな欲望は起すでない。心を靜かにして、あるだけの物で満足して居れば、是が快樂だ。求むることの困難なものを、強いて求めんとすれば、忽ち苦痛が生ずる。世の中に人の心を動かすものが四ある。壽命、名譽、爵位、財貨である。此の四物を有つものは、鬼神を畏れたり、人を畏れたり、威權を畏れた

り、刑罰を畏れたりせねばならぬ場合に出くはす、之が遁民と云ふものだ。本來殺すも、生かすも、命を制するものは自分ではない、外から來るのであるから、天命が來たら晏然として死ぬがよい。壽命が長からうが短かからうが、自分の關知する所ではない。貴人となつて人に矜らうと思はねば、名譽の必要もない。勢力を得て世の中で威張らうと思はねば、爵位も何のその、羨ましくもない。大厦高樓に住し、輕裘を着て、駟馬に鞭むちたうと思はねば、富の必要もなく、財貨もほしくはない。是が順民と云ふものだ。人間は安心して世の中に生きて居る内は、愉快に暮して、死んでしまへば、それで片付くと云ふものである。云々。

印度には、古代各種の宗教及び哲學も盛に行はれた。釋尊出世の當時には、宗教と哲學の種類も九十五種ありて、佛教よりは之を九十五種の外道と呼ばれた。中に就き、チャールワカの順世派と稱する利己的享樂主義が盛に唱道せられて居つた。此の派は古代の哲學者フリハスフチなる者より出たと云はれて居る。

彼派は一切の精神的宗教を排し、一切の教權を斥くるが故に、婆羅門の教義より出たる階級制度を攻撃すると共に、其の教義を絶対に峻拒するのである。佛教に於て、婆羅門の唱ふる人間の階級は天帝が人世創始の時に授けたと云ふ説は、無論眞理の上から承認するものではない。唯眞理を宣明して天帝をば佛境界の數等下界に列したが、少しも之を攻撃したものではない。確としたことは分らぬけれども、順世派は婆羅門の人間の階級は天帝から授けられたと云ふ説に對して、階級の慘虐から免かるゝ爲めに、寧ろ反抗的に起つたものではないか。其の残つた僅かな説の中にも、激しき自暴的意氣が含まれて居る點から斯く思はるゝのである。此の派の説に曰く、

吾人の直接に觸れて知り、見て知るもの、外に、一切信すべきものはない。現在見ることを觸るゝ、こゝの出來るものは、地水火風の四大である。此の四大が集りて世界を成し、吾人の身體となつたのである。吾人の感覺智識の外に精神ありとするは、虛妄なる愚論である。此の物質の外には、原因もなく、能力も

ない。彼の物質は自然に發動し、自由に變遷して居るのである。之を神の所爲としか、神の攝理としか、因果律としか推測するのは、痴漢の所爲に外ならぬ。然らば人間は、其の感覺の欲する儘に享樂すべきである。身體のあらん限り情慾を満足するところが、吾人究竟の目的である。此の外に何等の理想もなければ、道義もない。

順世學派は、一時は隆盛を極め多數の典籍を有したるも、是等の典籍は既に滅亡に歸し、今日にては唯僅かに一の歌が残つて居るのみである。云ふ。歌に曰く。

天もなし、解脱もなし、精神もなし、他界もなし、行爲の應報もなし。

諸の儀式は、智力度量なき人の生計の方便のみ。

若し犠牲が天上に上るならば、何故に人は其の父を犠牲にせざるか。

若し供物が死に逝きし祖先の腹を充たすならば、何故に旅人は辨當を齎すか。

若し地上の供物が天上に達するものならば、何故に階下の食は、階上の人を養

はざるか。

生命のあらん限り、安樂快樂を盡せ、汝の友より財を借り來りて美食に飽け。

三 利己説の批判

古代に於ける東西代表的の利己主義の三者を擧げたが、さて此の三家の説を見るに、其の言葉は異にして居るが、其の思想の根本は共通であつて、三者同巧異曲の觀を呈して居る。其の共通點を概括的に云へば、

第一、天の攝理を認めざる點が一致して居る。第二、大我を徹見せずして小我を眞我なりと固執せる態度が一致して居る。第三、極端なる享樂主張に於て一致點を見る。第四、毫も愛他の觀念なく、些も義務心なき點が一致して居る。第五、國務に關するここを避くべしとする點に於て、エ氏と楊氏の説に一致點を見る。順世派は典籍の徵すべきもの少く、此の點に於ては不明である。

楊朱の利己説は之を莊子の説に考へ合せて見るに、主として當時の支那の國

情に激成せられて起つたものである。莊子は孔子が王道仁義の説を諸侯に採用せしめんと努力せるに反対し、諸侯を以て盜賊に比し、仁義を彼等に説くは、盜賊をして社會に永續せしむるものなりとて之れを排斥し、専ら内的道德を主張し、大人君子は盜賊の如き諸侯輩に仁義の政を行はしめんとするが如き愚を爲さず、宜しく無爲の化を資くべきであること主唱した。是が莊子の所謂德を尊び仁義を排した趣旨である。故に盛に寓言を設けて盜賊をして孔子を罵らしめ、或は賢人義士を嘲笑したのである。楊氏の利己説も是と揆を一にし、當時の學者や有爲の士が多く政治に熱中して、諸侯の門に奔り、浮華の榮名富貴を望み、或は忠信の人士が空しく逆境に立つ者多きを見て、時勢に激せられて自暴自棄的の利己説を主唱したものであらうと思はれる。

又チャールワカの極端なる物質論も、婆羅門の教義と正反對に立つものである。當時も今も、印度に於ける階級制度は不合理を極め、而も其の制度の起源は婆羅門の教義より來りしもので、其の梗概を擧ぐれば、

最上實在の神は、此の世界を保存せんが爲に、其の口と其の股と其の足とより各種の人間を生じた。是が波羅門刹利毘舍首陀の四種族である。而して神は各種族に向て、各其の義務を授けた。是が爲に婆羅門刹利の二種族は萬劫末代まで尊貴に、毘舍首陀二族は先天的賤族で、婆羅門刹利の奴隸たるべく定められた。

此の根本教義に依りて法律が設けられ、法律は各種族に依りて其の制裁を異にして居る。犯罪處罰の一例を擧れば、婆羅門が刹帝利を殺した場合は罰金五百パナを科せられ、毘舍を殺せば二十五パナ、首陀を殺せば十二パナの科料で済む。之に反し、最下級の首陀が自分以上の階級の者を殺した場合は、如何なる理由があらうとも死刑に處せられる。其の他の法律の規定は推して知るべきである。順世派が斯る説を主張するは、此の階級制度の反感より起つたものである。らうと云ふ所以である。此の階級法律は、今日尙英國の治下に在つても依然として存続して居る。此の階級制度と階級法律とは、素より國民の一致を妨げ、

相反目するは必至の勢であるが爲に、四億の民衆を有しながら、僅々四千萬の國民を有する一小英國の爲めに統御し得らるゝのも、實に是に依るのである。チャールワカの説は理なしとするも、其の由て來る所を察すれば、長大歎息を禁じ得ないものがある。

西洋に於けるエピクロースに就て見ても、以上の二者と同様の理由によりて生起したことが分明であるが、茲には其の説明は省略する。

凡そ所説には、必ず真理が伴はれて世に流行するものである。不易の真理を説いて古今に光輝を存するものもあり、又は一時的に社會状態に促されて、時弊を匡救するが爲めに、機宜に應じ或る種の主張を爲すといふ如きものもあらう。一時的の説は到底一時的の真理に止る。社會状態の變遷に依りて、其の説は自然に不合理のものとなりて行はれざるに至ることは、免れない所である。併し其の説が今日より見て不合理なものとなりても、其の説き出されたる時勢に當りては、合理的の説にして、大に人心を感動せしめ、共鳴せしむるものがあつて、人

をして安心立命せしむるに効驗ある爲に、真理として、一時的にもせよ社會に相當の勢力を得たるものもあらう。又他の真理が宣明せられざる爲に、真理を認められて蔓延したるものもあるであらう。其の説が非真理なりとして用ひられざるに至れることは、時運の推移に依り、社會状態の變遷に依るものであるから、古に行はれて今に行はれざる説も、一概に之を非難するは、其の當を得たものではない。併ながら、利他なき利己説、享樂主義の極端なる主張の如きは、所謂我儘である。我儘は人の根本的本體に遠かり、本然性に背反する惡徳で、社會的要素たる克己犠牲等の人世最大の美德に背くもので、個人に在りては貧窮原因となり、社會に在りては文化の退歩となり、國家に在りては一國を衰頽に陥らしむる不合理のものである。斯の如き説の終に排斥せらるゝに至るは、當然の結果である。然るに其の衰亡したるは唯其の學説のみで、事實に於て利己主義は、古來絶大なる勢力を以て東西を横流し、大に人心を悩まし社會を苦しめつゝある。利己心の横流は恰も野蠻時代の神怪説の様なもので、精神的暗示の飛沫が、

妖怪變化となつて各所に顯はれ、人を悩ました如く、利己主義が事實的に横流して居る。各方面に種々な姿を變へて、尤もらしい説となつて顯はれるものが少くない。根本が利己であるから、理窟を附けて説立てる。利己的に満ちて居る人心に投じ、附和雷同者が多くなり、一大勢力を作るに至る。この珍らしくないのは、世界中同一である。私は今、是等の説を駁する趣意でないから、他の方面のここには觸れないが、根本の眞理を個々の頭に十分培養して置かぬと、頓だ災害を自他の上に蒙るの虞れがある。

印度は歴史なき國であるが故に、何事も歴史的に證明する。ここは不可能なり。これは學者の一致する所であるが、八世紀の頃より佛教は衰頹し、印度教も殘骸に化し、印度の北境から回教徒が侵入し來りて、モーガル王朝を建設したるも、利己享樂主義は愈々印度を風靡し、國家を腐敗墮落の極に陥らしめ、爲にモーガル王朝は顛覆し、四億の民衆を有する全印度は、空しく他國の旗下に其の屈辱を忍ぶの悲境に陥つた。云はれて居る。

支那は四百餘州四億の人口を有する世界の最大國で、而も亦世界の一弱國であるが、其の精神的教養たる儒佛二教の衰頹せる。其の人民の上下擧つて利己享樂的なる。ここは、一般の認めて異議のない所である。今や精神的信念の衰頹に乗じて、歐米の物質主義が滔々として輸入せられ、國內四分五裂殆ど收拾すべからざるの状態である。其の依つて來る所を一言にして盡せば、實に楊朱の如き利己主義の實行が、支那をして滅亡に瀕せしめて居る。と觀られるのである。大正八年支那を遊歴せし松永安右衛門氏は、其の著「支那我觀」に題する書中に論じて曰く、「支那の國民性の利己的傾向が、國政の發達を妨げ、孔孟の教の反對を繰返しつゝ、ある。ここは、彼等が利己性の極端なる發達の結果なり」と説き、「支那は到底強國となるの素因なし」と斷言して居る。

又商科大學教授有馬祐政氏も、大正十年支那遊歴の結果、支那の事情を發表して曰く、

其の道德觀念に至つては、最も痛歎に堪へぬものがある。禮文はあれども、概

して形式に止まり、内容實質に於ては貧弱を極めて居る。即ち自己の幸福利益を唯一の目的とし、總て之れに歸一せしめて居る。聯軸門牌扁額の類、露骨に之れを言ひ顯はして居り、寺院、廟閣皆之を證據立て、居る。陳大傳なごは、「中國今道徳なく法律なし」を浩歎して居られた

ご。又多年支那の海關に當りたる、サー、ロバート、ハート氏は、「支那人の新教育を受けたる者の中、國事を托するに足る者三人を挙げ得るや」ごの間に對して、「人もなし」ご失望の色を以て答へたごは、支那通ブランド氏の公言した所で、且つ曰く、「無智なる四億の民ご、私慾以外眼中國家なき少數政治家より成りたる支那は、全然共和を談ずる資格なし」ご。諸氏の見る所、説く所、實に斯の如くである。私は、支那をして今日の狀態に陥らしめたるものは、眞に利己主義であるごを斷言するに躊躇せぬ。

朝鮮の地を踏んで奇異の思ひをなすものは、一般民家の甚だ貧弱隘小なるに比し、王城の壯大偉觀、其の懸隔のあまりに甚だしきに驚かざる、ごごである。

是れ其の王侯貴族が、仁義を忘れ宗教を排し、人民の膏血を絞つて宮殿を壯大にし、衣食を美にし、威福を擅にした跡を語るもの。而して山骨露出の狀は、人民が天産物を取り得らるゝ限り取り盡して、遊惰に流れたる事實を示すもので、斯くて上下共に利己に奔り享樂を事とした多年の結果を、今日の外觀を以て告白して居るものご見られるのである。孟子が「上下交も利を征つて國危し」ご云ふたのは、全く眞理である。

其の他西洋諸國に見るも、昔歐洲の最大強國であつて、最先に東洋諸國を震動せしめたる大勢力を有せし西班牙、葡萄牙の如きは、今日にては歐洲中の最弱國ごして殆ご顧みられない狀態であるが、其の依つて來る所は、一般國民が利己的に奔りし結果に基くものである。今日にても同國民には、公共的觀念は殆ご缺乏して居るご謂はれて居る。歐洲文明の源泉を以て目さるゝギリシャ、ローマの舊國家の興廢盛衰の歴史を繰り返して見ても、其の他何れの國にしても、其の衰運の跡は必らず國民の利己享樂的惰性より誘致されざるはない。利己主義

は、實に個人的貧窮原因犯罪原因たるのみならず、遂に社會を衰頹せしめ、國家を廢亡せしむる大原因である。一たび利己の迷霧に覆はれると、本然の智は光を失ひて眞理を見ること能はず、暗路に暗路を踏み迷ひて、涯りなき苦惱の淵に墮在せねばならぬ。吾等は須らく眞智に眼覺め、本然の大我を徹見して、斯の迷霧を一掃し、意義ある人生の大道に向上すべきである。

第三章 自他の福利共進法

一 同昌共榮の理法

或る程度の本能満足が、人類生存の不可抗的要求である以上、利己も或る點までは當然許容すべきものであらうが、併しそのみが人の性情の全體面ではない。他の一面には純利他的にして眞善美を追求して止まぬ先天性がある。此の利他に利己を攝し、以て自他共存、二利圓滿を期するところに、人類社會の意義が見出されるのである。

元來公益と私利とは決して衝突すべきものではない。利益と道義も相反するものではない。自利と利他とは相伴隨すべきものである。公益を圖る中に自然に私益も存して居る。公益と私利と道義とは實は常に一致すべきものである。利他の中に自利は常に存して居るのである。故に古聖賢は博愛仁義を唱へ、自利は利他に伴ふべきものなることを説かれて居る。又スペンサーが「發達せる利他の感情と、正當なる利己の感情との完全なる調和が、社會に對する實行的標準なり」と云ひ、二宮尊徳翁が徳に報ゆるは個人及國家の繁榮法なる所以を説いて、之を實行の上に示し、澁澤子爵の論語と算盤經濟と道德の一致説など、皆自利と利他の一致を明示されたものである。眞の利己即ち偉大なる利己が、ここに存在せるの理を體得することが一大肝要である。

斯の眞理を無視せる、利他に一致せざる利己主義を實行せんせば、互の和合を破り、正義に悖つて猥りに權謀を弄しかのホッブスの謂ゆる「一切對一切闘争」といふ淺ましい修羅場を演出するに至り、其の結果は、貧困を招き、或は犯罪とな

つて顯はれ、管に自身の悲境に沈淪するのみならず、害毒を廣く社會に及ぼすものである。

自利を求めて自利を得ず、反つて利他を圖りて自利を完うすることを得るのである。此の理を信じ、之を實行する者は智者であり、之を知らざる者は愚者である。之を知つて實行する能はざる者は怜悯なる愚者、謂ふべきである。

如何にせば善良なる物品を廉價に供給し得べきかを研究し、之を實行するは商工業の秘訣である。大工業家も、小工業家も、大商人も、小商人も、悉く此の秘訣を遵奉して忘却する所なければ、愈其の得意を増加し、其の業の繁昌を呈するは必然である。此の秘訣は、内地に對するも外國に對するも、未開國に對するも、文明國に對するも、行く所として歓迎せられざるはない。これ實に宇宙人世の本然に基く、自利利他の共榮を目的とするが故である。資本家は常に、如何にせば使用人や職工を優遇し、各職務を勵ましめ、能率を増進し得べきかを研究して之を實行し、使用人や職工は、如何にせば職務を完全に忠實に果し得べきかを研究

して之を實行し、各其の職に盡すはやがて各自の利益を完うするの秘訣である。凡そ如何なる人も、如何なる職業も、此の天理天則を度外して、其の成功を期することには到底不可能である。

二 利己心と共同生活

吾等の利益幸福は、完全なる社會ありて始めて之を完うすることが出来る。故に吾等は社會の一員として、其の一般的の利益幸福を維持し増進し、以て吾等の社會的共同生活に對する任務を完うすべきである。一人の善惡邪正、多少の影響を社會に與へざるはなく、時に或は全社會を振動せしむることもある。恰も一石を池面に投ずれば、其の石の大小強弱によりて、或は周圍に小波紋を畫き、或はそれが全水面に及ぼすことあるが如くである。これ即ち各人に公德心を涵養するの必要ある所以である。公德行はれて始めて私利を完うすることが出来るのである。

實際、貧窮に陥りたる人々に就て檢するに、其の公德心の缺乏は甚しいものである。私が東京市養育院に在職中、大に感じた實例の二三を擧げて見よう。養育院の下水は最初地形を爲すに當りて、各室の配置に應じて各所に大なる下水溜を敷設し、土管を埋没して、暗渠式の構造をなし、各室の流しより出るものは素より、屋上より落下する雨水も之に依りて流出する完全なもので、三ヶ月に一度も溜樹だけの掃除を行へば、下水の流下は十分なる見込で建設を竣つた。然るに移轉後間もなく溜樹が杜塞して、大雨に際し樹から下水が溢れる所が出来た。之を調べるに、飯粒や副食物類が各溜樹に充満して居た。何故か云へば、各室の雜役に收容者を使つてある。それに室内の掃除や食器の洗方取片付方の役目を持たせてあつたが、其の人達が残飯や副食物の残りを溜樹へ日々打込むので、是が下水の排出口を壓して居るのであつた。而して數棟の病室の後部には、必らず此の溜樹が設けられて居て、恰も申し合せたるが如く、各室ともに同じ様にやつて居る。以て各室の雜使達の心理状態が殆ど同様なるを認めら

れたのであつた。此の人達は衣食に困窮し、自ら救恤を願つて收容せられた人々である。此の食物を斯る場所へ打込んで平然たるものは、實に驚くの外はない。是は直に適當の方法を設けたが、其の方法は畢竟溜樹に捨てしめざるだけのことで、此の人達の之を打捨て、省みない心理を、正當に改めることは容易ならぬものである。是は殆ど似寄つたこゝが、院の各室内外の掃除にも亦顯はれた。各室内外の掃除は幾許かの給料を與へて收容者を使用した。が、外部の掃除役が今綺麗に掃き終つた場所へ、内部掃除受持の雜使は遠慮もなく大小の塵埃を掃き下ろすのである。是は何を語つて居るであらう。「外部は他人の受持で、内部は俺の責任だ。俺の責任だけ果せば、他の者の受持場がさうならうと俺の構ふ所ではない」と、彼等の精神は慥かに斯様に叫んで居ることが顯はれて居る。之を養育院全體の上より見て、掃除は少しも其の意味が徹しない。彼等に屢言ひ聞かしても、二三度は効能があるが、直に元の通りである。茲に監督を設くるの必要が起る。利己的心理の働く所は、消極的の小事すら斯の如くである。若し

之が積極的の大事の上に働く時は、さうであらう。官公吏の賄賂沙汰横領事件、不正工事、不良品納付なき、公德心缺陷の事例は、殆ど枚擧に違がない。其の國家社會に害毒を及ぼすこと容易ならぬものがある。

私は大正八年七月から滿一ヶ年間、地先下水に就て、毎日實地の研究をした。公德心の缺陷のあることは、單に養育院に收容せられて居る窮民のみではない。此の地先下水に吾等の公德心の缺陷が鏡の如くに顯はれて居ることを痛感したのである。

私の實驗したのは、東京市であるが、是は東京市に限つたことではない。總ての都市は恰も毒物吸人器を据付けて、其の住民に吸入せしめて居る様な状態に在る。是は主として吾等市住民の公德心の缺陷から生ずるものである。各家から流れ出る下水は、皆地先下水へ流れ込む。東京の如きは唯電車通り丈が暗渠となつて居るけれども、十中九分通りは地先は總て開渠で、而も假設のものである。此の下水は皆勾配が附けてあるから、普通ならば下流へ向つて流るゝ筈

である。無事に下流へ流れさへすれば、五日目さか十日目位には雨が降るゝ雨水が自然に掃除をするから、さまで不潔にはならぬが、各家から流し口へ流すものは下水のみではない。野菜の切片、茶殻、米粒、飯粒、魚腸、魚頭、魚骨までも流すのである。是は各家の臺所を預かる人々の公德的精神の缺陷の流露ではあるまいか。言葉を換へて云へば、自分の内の臺所さへ清潔なれば、外なきはさうでも構ふものか云ふことである。又往々来るさの人々は、煙草の吹殻、古新聞、屑紙なき勝手に抛り込んで行く。是は往來の人々の公德的精神の缺陷の流露ではあるまいか。門前の掃除に、其の掃溜を塵箱まで運ぶが面倒さあつて、下水へ掃き込む人もある。下駄の齒入屋は大概古齒や鉋屑を其の邊の下水に投じて去り、納豆賣は中身を賣つて、藁は其處等あたりの下水へ打込んで行く。時として糠味噌の腐つた物、瓦の破片、硝子瓶や瀬戸物の破片なきをそろツミ打込んで歸る女中衆もあると見える。是等は何れも皆公德的精神缺陷の流露ではあるまいか。大人既に然りである。之を見習ふ兒童達は、下水は不用物の捨場さ心

得て居る。竹片木片石ころ瓦片破玩具は皆下水へ抛り込み、少しも罪惡觀なきはない。是等の大人の行爲は、兒童が無意識で眞似て居る。即ち公德的精神の缺陷から、第二の天性を形づくる國民的公德心缺陷の性癖は、慥かに此の邊より養成せらるゝのである。故に決して小事として之を見捨てる事は出来ぬ。斯くて下水は到る所に塵埃瓦片石木片紙なごに依りて堰が作られる。下水は其の堰内に停滯して、其の堰に溢るゝものが下流へ流れる。下にもくゝ同じ堰が無數に作られて居る。其の堰内には腐水の停滯するのみではない。細泥が沈澱して小蟲がウヨ／＼と生ずる。臭氣紛々、此の臭氣こそは、細菌の腐水と共に蒸發するであらう。此の細菌を有毒素ではないと云ふ生理學者がある。成程特に病原菌ではないかも知らぬが、病原菌でなくとも有益素ではない。若しも是が有害ならずせば、下水なごに巨額の費用を投ずる必要もない。臭氣は空氣混濁の實證である。空氣混濁の所には、人體に有益なる光線すら放射せぬ事實がある。如何に人體に有害なるかは、此の一事に徴するも明かである。

165

地先下水既に斯の如しであるが、市内外の小河流を一見するに、驚くべき状態である。こゝは萬人の共に知る所である。前に述べた地先の下水より流れ出るものは云ふも更なり、其の附近の人々の中には、特に不用品や、腐敗物や、破損物を小河に抛け込むものがある。不潔物を詰め込んだ炭俵が至る所に引掛つて居る。早天此の小河の邊りを徘徊すれば、彼所此所から、まめ／＼しきお婆さんや、氣の利いたお嫁さんや、肥つた女中さんや、忠實さうな小僧さん達が、次から次へ、塵埃や不用品を運んで来て河中に投ずるのを目撃するであらう。特に郡部の町村に於ける小河流は一層甚しい。東京市衛生試験所が大正九年に市内の下水を検査した結果の發表に依れば、驚く勿れ十五六滴の水に、細菌の多きは百六七十萬、少きも七萬を下らぬとある。是が暖氣の時に蒸發して、市内一面の空氣が細菌に充たされる。我等は晝夜鼻口から之を吸入する。此の不潔なる空氣を日夜吸入するから、血液が悪くなる、身體が弱くなる。何の事はない、毒物吸入器を四方八方に据え付けて、市民は終日之を吸入して居るのである。此の

状態に至らしむるは、自分の家さへ清潔なら一般の人なごはさうでもよいと云ふ公德心の缺乏から起る所の現象である。

大都市で死亡率の高いのは不思議はない。餘程健康な者でも市内のみに一年間も居れば、身體が弱くなる。病氣に罹り易い。大都會に長壽者は至つて少い。實に自分さへよければ人は構はぬと云ふ心は、間接ではあるが、人殺をしたり、自殺をしたりする様なものである。斯る状態で打捨て、置くことは、野蠻の限りである。當局者は夙に百方苦慮して、着々として下水の改良に盡して居るのであるが、たゞ經費の問題もあれば、電氣瓦斯水道電車汽車なごの各種の事業と調和交渉の必要もあつて、隅々まで改良せらるゝことは、八年や十年先のことではなからう。況や市の周圍は非常な速力を以て、農村が接續市街に變りつゝある。それが又直ちに毒物吸入器の作用を増加するのである。實に始末に困つた問題である。

三 公德心の涵養

市住民が此の先幾十年も、この毒物吸入器の存続を忍ぶべきか、將た何等か是を取り除く簡易なる方法を見出すべきか、之れが當面の緊急問題で、私の研究したのは此の點である。

地先下水の掃除は、各家の門前や店先を掃除すると同様、各戸の義務として履行することにしたらよからうと思ふ。下水掃除と云へば大仰に聞えるが、實は何でもないことである。店先門前を掃除する際に、地先下水の中を箒で掃いて、木片瓦片紙屑其他散亂して居るものを取つて、下水中に置かぬだけのことである。斯くすれば下水の流れは、勾配の儘に流下して停滯せぬ。水が停滯せねば、腐敗せず、細泥は水と共に流れて、小蟲の生育することもない。此のことは甚だ小事であるが、其の及ぼす所は偉大なものがある。第一には、下水から發する臭氣がなくなり、一般市街の空氣を清潔にし、随つて一般市民の健康を保たしめ、

第二には、從來下水は不用物の抛け込み所として居たものが、戸々に此の義務を負擔することゝなれば、大人は云ふも更なり、兒童に公共的觀念を養成せしめ、公德養成の功は甚大なるものがある。

此の公德養成の法は事實上に之を行はざれば、實効を擧げることには容易でない。假令下水が改良せられたとしても、一般市住民の公德が進まざれば、公共的事業は跡から、破壊せられることとなる。此の下水掃除の戸々擔任法は、最も捷徑なる便法である。前に述べた如く、私が滿一ヶ年間、凡八十間の場所を日々實行して試験した所によつて觀るのに、最初は到る所に汚水が停滯して臭氣甚しかりしものも、凡半ヶ月を経れば、細泥は皆流下して臭氣を放たぬやうになつた。

私は大正八年中、岡山市の下水を實見した。以前は同市の下水位不潔なものはなかつたが、今日は下水工事が完成して、模範的のものとなつたこと云ふも不可なきに至つた。尤も開渠が多い様である。多くは藥研型のもので、一週幾回か

河水を放流して、清潔を保つ方式となつて居る。然るに一般市民が、開渠の場所へ各種の不潔物や不用品を投下する悪習慣が依然たるもので、至る所に塵埃、石片、瓦片などが引掛りて堰を作り、河水の放流も其の物體の全部を流下する力はない。常に人足を用ひて之を引掲げねば、十分の清潔を保つことが不可能なる状態である。是等の如きも地先下水掃除は、全部其の地の住民の義務としたならば、一面清潔を保ち、一面には公德の實地養成に大功があると思ふ。

獨逸に久しく留學した友人の談に依れば、同國の田舎にては、道路樹には大抵果樹を植ゑてあつて、其の收穫を以て修繕費に充て、餘りあること云ふことである。秋期に向つて田舎道を散策すること、道の兩側に林檎などの綺麗に實つて居るのが、何とも云へぬ好い氣持である。多くの果樹があつても誰一人として之を採り去る者もない。偶果實が落ちて居ること、子供などがそれを拾つて、人の踏まぬ所へ片寄せて置くこといふ状況である。實に我社會状態などに比べるならば、雲泥の差こと云ふべきである。

歐洲では最も人民が利己的に傾きて公共心衰へ、昔しの強國たりしに反し、最劣弱國とも云はれて居る西班牙や葡萄牙でさへも、田舎の大道には數十里に亘る杏を植ゑてあつて、花時には行人の眼を樂しましめ、果實は莫大な収益があつて、何れも道路費に充てるに於て居るさういふ。斯る例は歐米諸國には至るどころに見られることであらう。種つて我が國の状態を見れば、實に情けない。中國筋の小山なごに桃や梨や葡萄なごを作つてあれば、そこには必らず中央に小舎が見える。關東筋にも葡萄園がチヨイ／＼見えるが、其所には周圍に屹度鐵繩網がある。何の爲か言はずして知る、果實を窃取する者あることを證明するものである。日本の果樹園には缺くべからざる設備として、番小舎や垣根を要するのである。一定の範圍に所有を明かにされてある果樹園でさへ、此の有様である。況や街路や公園なごの公共の地域に於ける花木の類が如何に殘虐の手に痛められるかは、想像に餘りある所である。私の幼年時代の事であるが、諸國の河川の堤防に楮三侯蠟木なごを盛んに植ゑ付けられたことがあつた。

其の成績に就て他の府縣のことは知らぬが、私の生地岡山縣では、それが多くは旅人や草苧なごに折られたり、伐られたりして居る實狀を、今でも記憶して居る。定めし何等の利益も擧らなかつたであらう。

公益事業は公共心の發露である。一般民衆の公共的精神が向上し、社會に公德が行はれなければ、公益事業も或る種のもは、全く起し得られるものでない。

明治十九年頃を覚えて居る。東京近郊で櫻の名所として聞ゆる荒川堤に、數百種幾千本の八重櫻を植ゑた特志家があつた。當時は其の幹が漸く人の拇指大のものであつたが、それでも花時になれば見事に花が開いた。それを往來の人が無残にも折取つたり、伐り採つたりして困るので、花時前から特に番人を附けて保護することに依り、彼の有名なる荒川の八重櫻の名所が作り出されたのである。宇治平等院鳳凰堂内の壁畫は、堂宇と共に世界的の美術にして、今は國寶として保護を加へられて居るが、維新後公衆が自由に堂内に入出した時に、其の壁畫は皆傷けられ剝落され、人の手の届くかぎりには殆ど畫體を破壊せられて

しまつた。板塀壁塀の樂書、堂塔の破壊、其の他公私のものを問はず、物に對する保護的觀念は大に缺くる所がある。是は國民一般の精神的荒廢が顯はれ來るのである。即ち貧乏根性の發露であるから、吾等は、大いに戒しむる所がなくてはならぬ。

公德のここに至るに、我朝鮮は更に酷だしいものがある。一たび朝鮮の地を踏む者は、必らずや山に云ふ山が禿山なるに奇異の思ひがあるであらう。あれは鮮人の心の荒廢が山林に顯はれて居ることを語るものである。

近年總督府に於て、大に植樹殖林を獎勵した爲めに、餘程見るべきものあるに至つたが、しかし尙彼等の中には、當局から下附された苗木を、之が植付をせずして故意に枯死せしめ、薪の代りにする者もあつた云ふ。若しそれが事實にすれば、憐憫の涙の外はない。

獨逸人が青島を得た後、四方皆支那流の禿山であるのを、アカシヤ樹などを植付けるに、居留の幼き兒女などは遠方から態々水や肥料を持ち運んで、其の肥料

をそつと根元に埋め、水を灌いでやる者が多かつた云ふ位であるから、今日では獨逸の租借地たりし地は樹木鬱々たるに至り、氣候も幾分良好に變つた云ふことである。是を彼を比較し來らば、其の人格品性に如何なる差等があるかを考へさせられるのである。公德ある者は彼が如く富み榮え、利己的の者は斯の如く貧弱に陥り、人心も亦四分五裂する。獨逸は今も戰敗の結果見る影を失ひしは雖も、一時は世界統一の實行を夢みし程の富強を示した。其の根本は何れにあるかを考へねばならぬ。彈力性に富める獨逸魂は、戰後早くも復興の芽を噴き出したことさへ云はれ、我國へも安價なる同國品は續々輸入の緒を開いた。

次に支那人の公德心に就て一言する。隣國のここを云ふは面白からぬことではあるが、事實は致し方がない。之を擧げて支那人にも警告し、我等の戒めさもし、共に手を携へて將來の同昌共榮を期したいものである。

是は私の感情に激しく刻み付けられた一の事實である。養育院が明治四十

一年に東本願寺から巢鴨中學の土地家屋を買ひ受けた。同校は土地一萬坪建物二千餘坪で、當時數年前に京都に中學を移轉し不用となつて居たのを、弘文學院長加納治五郎氏が借受けて學院を同所に置き、寄宿舎には支那の學生百五六十人を收容されて居た云ふとである。之を養育院が買ひ受けて明け渡され、早速移轉しように検査せば、寄宿舎は云ふも更なり、校舎講堂、其の不潔言語道斷である。校舎寄宿舎の二階昇降段の手摺は眞黒で漆塗の如くであるが、横面下面は生地である、塗り物ではない。板間廊下等は木か石か不明である。無論泥靴の出入であるから、泥の附着は當然であるが、夫のみではない、泥が固着して漆喰狀を爲して居る。校舎の壁はセメント塗であるが、是も三尺以下は一面泥土が固着して居る。上部の方は、鼻汁、咯痰、唾液が引掛けられて乾燥して居る。段々調べて見るに、廊下板間昇降段の手摺なご、鼻汁、唾液、咯痰の類に塵埃が附着して乾燥したもので、爲めに漆喰の如くなつたものたることを確めた。試みに幾回も熱湯を瀧ぎ、長ダワシにて激しく洗へば、徐々に木地が顯はれて來る云いふ

有様、斯くして全部の掃除に八人の人夫が滿二ヶ月を要し、漸く清潔になつたのである。支那からの留學生諸子は定めて中流以上の人であらうと思ふ。内地の青年學生に比すれば、顔面手先なご綺麗に洗つて居る。頭髮なごも油を塗りテラ／＼光らして居る。衣服も紳士的である。當時に於ける内地學生の汚衣、破帽蓬頭垢面なごの如き者は殆ど見當らぬ位である。然るに共同使用の場合に至りては、斯の如く不潔千萬である。如何なる場所にても手鼻をかみ、咯痰を爲し、壁にでも板にでも塗り附けて自己の不潔を免かれ、自己の衣服や帽子に塗り附ける者は絶對にない。朝鮮都市の電信柱が手の届くかぎり眞黒なるも、是と同一の譯ではなからうか。私は支那の諸子に問ふ。是は利己的にして公同心なきより來る習癖ではあるまいか。

私は幼少の時に、支那の『小學』を教へられたが、灑掃應對坐作進退のこゝを眞先に學び、日常實際の教養を爲すのが、支那古來の教育法であるに聞いた。更に進んで深く孔子の教を究めても、禮を以て六藝の第一とせられてある。其の他修